

靈界物語 第四卷 靈主體從 卯の卷

出口王仁三郎

シフトJISコードに無い文字は他の文字に置き換え、そのことをWebサイトに「相違点」として記した。

底本

『靈界物語 第四卷』愛善世界社

一九九三（平成〇五）年〇六月十九日 第一刷發行

「第九篇 宇宙真相」に關しては『靈界物語資料篇』（大本教典刊行會）所收の聖師御校正本の復刻を底本にした。

圖表が第四六章に五枚、第四八章に一枚あるが、テキストでは再現できないので省略した。

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせずすべて底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。

詳細な凡例は次のウェブサイト内に掲載してある。

<http://onido.onisavulo.jp/>

原データ作成者：『飯塚弘明』

二〇〇四年〇九月十四日作成

二〇〇九年十一月二〇日修正

目次

序じよ

凡例はんれい

總説そうせつ

第一篇

八洲やすの川浪かはなみ

第一章

常世會議とこよくわいぎ（一五一）

第二章

聖地せいちの會議くわいぎ（一五二）

第三章

使臣ししんの派遣はけん（一五三）

第四章

亂暴らんぼうな提案ていあん（一五四）

第五章

議場ぎぢやうの混亂こんらん（一五五）

第六章

怪くわいまた怪くわい（一五六）

第七章 涼風淒風（一五七）

第二篇 天地暗雲

第八章 不意の邂逅（一五八）

第九章 大の字の斑紋（一五九）

第一〇章 雲の天井（一六〇）

第十一章 敬神の自覺（一六一）

第十二章 横紙破り（一六二）

第十三章 再轉再落（一六三）

第十四章 大怪物（一六四）

第十五章 出雲舞（一六五）

第三篇 正邪混交

第一六章 善言美辭ぜんげんびじ〔一六六〕

第一七章 殺風景さつふうけい〔一六七〕

第一八章 隱忍自重いんにんじちやう〔一六八〕

第一九章 猿女の舞ざるめ まひ〔一六九〕

第二〇章 長者の態度ちやうじや たいど〔一七〇〕

第二一章 敵本主義てきほんしゆぎ〔一七一〕

第二二章 窮策の替玉きゆうさく かへだま〔一七二〕

第四篇 天地轉動てんちてんどう

第二三章 思ひ奇おも きや その一〔一七三〕

第二四章 思ひ奇おも きや その二〔一七四〕

第二五章 燕返つばめかへし〔一七五〕

第二六章 庚申の眷屬かうしん けんぞく〔一七六〕

第二十七章 阿鼻叫喚〔一七七〕
第二十八章 武器制限〔一七八〕

第五篇 局面一轉きよくめんいつてん

第二十九章 月雪花〔一七九〕

第三〇章 七面鳥〔一八〇〕

第三十一章 傘屋の丁稚〔一八一〕

第三十二章 免れぬ道〔一八二〕

第六篇 宇宙大道うちうたいだう

第三十三章 至仁至愛〔一八三〕

第三十四章 紫陽花〔一八四〕

第三十五章 頭上づじやうの冷水ひやみづ〔一八五〕

第三十六章 天地開明てんちかいめい〔一八六〕

第三十七章 時節到來じせつたうらい〔一八七〕

第三十八章 隙行すきゆ駒こま〔一八八〕

第七篇 因果應報いんぐわおうほう

第三十九章 常世とこよの暗やみ〔一八九〕

第四〇章 照魔鏡せうまきやう〔一九〇〕

第四一章 惡盛あくさかん勝天にしててんにかつ〔一九一〕

第四二章 無道ぶだうの極きはみ〔一九二〕

第八篇 天上會議てんじやうくわいぎ

第四三章 勸告使（一九三）
 第四四章 虎の威（一九四）
 第四五章 ああ大變（一九五）

第九篇 宇宙真相

第四六章 神示の宇宙 その一（一九六）
 第四七章 神示の宇宙 その二（一九七）
 第四八章 神示の宇宙 その三（一九八）
 第四九章 神示の宇宙 その四（一九九）
 第五〇章 神示の宇宙 その五（二〇〇）

附録 第二回高熊山參拜紀行歌

本ほん卷くわんは主しゆとして、常とこ世よく會わい議ぎの結けつ末まつおよび國こく祖そ御ご退たい隱いんの大たい略りやくを述のべたるものなり。
 神しん典てんに國くに常とこ立たち之のみ命こと、豊とよ雲もぬ野のみ命ことは獨す神なり成なり坐まして隱す身きり也なりとあるは、言こと葉ば簡かん單たんなれども、
 實じつに無む限げんの意い味みの含ふくまれあるなり。第だい五ご卷くわんには盤ばん古こ大だい神じんの神しん政せいより天あめの三みつ柱しらの大おほ
 神かみ、地ち上じやうに降かう臨りんして、先まづ淤お能の碁こ呂ろ島じまより神しん業げふをはじめ、國くに魂たま神かみを生うみたまひた
 る、その經けい緯ゐを神しん示じのまま述のべむとする也なり。故ゆゑに本ほん書しよ第だい四よん卷くわんの終はりまでは、我わが
 日ひの本もとを中ちゆう心しんとする靈れい界かいの物もの語がたりにあらざることを知しりたまふべし。

大正十年十二月十五日 王お仁にしるす識

一、本卷は現代の海軍制限案討議の華府會議にも匹敵す可き、神代に於ける武備撤廢の常世會議を其の卷頭に掲げ、次に最も悲歎愁傷の念に堪へざる國祖の御隱退及び天文地文學に大立替を促進す可き神示の宇宙觀が卷尾に輯録されてあります。元來神示の宇宙は國祖大神を始め奉り、諸正神の御隱退遊ばされし箇所を示さむために口述されたものであります。想へば吾々は木の葉一枚造られぬ身でありますから、洪大無邊の神示に對して云爲する資格無きものであります。懃に先入主に執着して居ては雁も鳩も立つた後に後悔し、又恥かしいことがあると思はれますから、素直に神示を肯定する方が上乘であらうと考へます。

一、第一卷より第三卷までに得たるものは、唯【執着】の二字を心底より取り去らねばならぬと言ふことであります。然らざれば或は大切な玉即ち日本魂を此の上にも引抜かれることは請合だと思ひます。總ての先入主に執着せずして神に任すといふことが、何より大切だと考へます。誠を以て赤子の心で本卷を味はひ

得る人は、國祖大神の御隱退と御仁慈の御心に對し、萬斛の涙を注ぐと共に黙つて改心さるることと信じます。

一、本卷第二章迄と、第二五、二八章及び第四三章より第四五章までは、瑞月聖師自ら執筆されたものであります。

聖師が一度執筆さるるや些の澁滯もなく、淀みもなく、すらすらと書き誌され、しかも一字一句訂正を要せらるることは無いのであります。故に一日に二百頁も原稿を綴らるるので、其の實況を熟視した人々は逆も人間業とは思へぬといふのであります。

一、各章の末尾に筆録者の署名をしてあるのは、其の全文に對して責任を有たねばならぬことに定めてあるのです。兔に角編輯印刷を急ぎますので、種々の點に於て不満に思はれるでありませうが、讀者幸に諒せられむことを希望します。

大正十一年二月十九日 於瑞祥閣 編者識す

吾人が朝夕神前に拜跪して奏上したてまつる神言の本文には、

高天原に神集ります、皇親神漏岐神漏美の神言以て八百萬の神等を神集へに集

へたまひ、神議りに議り玉ひて、吾皇御孫命は豊葦原の瑞穂の國を安國と平けく

知食せと言依さし奉りき。かく依さし奉りし國中に荒ぶる神どもをば、神問はし

に問はし玉ひ、神拂ひに拂ひ玉ひて言問ひし岩根木根立草の片葉をも言止めて、

天の磐位放ち天の八重雲を伊都の千別に千別て聞食さむ 云々

と天兒屋根命以來皇國に傳はつた神言のごとく、神々は天の八洲の河原に八百萬

の神を集めて、神界の一大事を協議されたることは明白な活きたる事實でありま

す。

約幹傳首章には、

太初に道あり道は神なり、神は道と俱にありき。萬物之に依りて造らる、造ら

れたるもの之に依らざるはなし云々

とあるごとく、眞正の神はアオウエイの五大父音とカサタナハマヤラワの九大母音とをもつて、宇宙萬有を生成化育したまふたのであります。ゆゑに凡ての神々は言葉をもつて神の生命活力となしたまふのであつて、神界の混亂紛糾を鎮定するため高天原の天安の河原に神集ひを遊ばしたのであります。

そして各神の意志を表白するために、第一の生命ともいふべき言靈の神器を極力應用されたのであります。現代のごとく自由だとか、平等だとか言つて誰もかれも祝詞に所謂「草の片葉に至るまで言問」すなはち論議するやうになつては神界現界ともに平安に治まるといふことは、望まれないのであります。

本巻は主として、常世國の常世城における太古の神人の會議についての物語が、その大部分を占めてをります。八百萬の神人の種々の意見や論争が述べてあります。すが、ある一部の人士は、「神様といふものは議論ばかりしてをるものだなあ」と怪訝の念にかられた方があつたやうですが、すべて神様は前述のごとく言葉（道）をもつて生命となしたまふものであるから、言靈の幸はふ國、言靈の生ける國、言靈の助くる國、言靈の清き國、言靈の天照國と古來いはれてあるのであります。

ゆるぎに本巻の大半は常世會議の大要と、神人らの侃々諤々の大議論で埋まつてを
るといつてよいくらゐであります。

宇宙萬有一切を無限絶對、無始無終の全能をもつて創造したまひし獨一眞神
なる大國治立尊は、最初に五大父音と九大母音を形成して天業を開始されし以來、
今日にいたるまで一秒時といへども、その言靈の活動を休止されたことはないの
である。萬々一、一分間にてもその活動を休止したまふことあらば、宇宙はたち
まち潰滅し、天日も、太陰も、大地も、列星もたちまちその中心を失ひ、つひに
は大宇宙の破壊を來すのである。宇宙には常住不斷的にアオウエイの五大父音が、
巨大なる音響をたてて、とどろき渡つてゐるのであります。されど諺にいふごと
く、「大聲は耳裡に入らず」人間の聽覺にはあまりに巨大にして、却て感覺せない
のであります。巨大なる音響と、微細なる音響は人間の耳に入らないのは、音響
學の精神である。されど人もし大宇宙の五大父音を聞かむとせば、兩手の指をも
つて耳の穴をふさぎみよ、轟々たる音響を聞くことを得む。これぞ大宇宙に不斷
とどろき渡れる聲音そのままである。今日文明の利器たる諸々の機械といへども、

その運轉活動するあひだは各自に相當の音響を發してをる。かかる無生機物の器械といへども、音響の休止したときは、すなわち機關の休止した時である。況むや宇宙の大機關の運轉に於てをやである。宇宙のアオウエイの五大父音は、すなはち造物主なる眞の神の生ける御聲であつて、眞神は絶えず言語を發して宇宙の進化と運行と保持に努力されつつあるのであります。

その眞神の分靈、分力、分體を受けたる神人は、言語のもつとも多きは當然である。世人は神といへば常に沈黙を永遠に續けてゐるものと考へ、黙々として天答へず、寂として地語らずなどといつて、唐人の寢言を信じてゐるものの多いのは、實に天地の眞理と、その無限の神力を悟らない迂愚の極であります。

常世會議における神人らの議論の百出したるも、神人の會議としては實に止むを得ないのである。王仁は常世會議の神人らの論説を、一々詳細に記せば數千頁を費すも足りないから、ただその一部分を述べたにすぎませぬ。恰も九牛の一毛、大海の一滴にも及ばない量であります。

『至聖大賢斯民所稱、神眼視之未盡全美、況乎其他哉、故先靈不能守後魂必矣』

と先師本田言靈彦命の喝破されたるごとく、現代の人間の眼から見た聖賢者、哲人も神の眼より見そなはしたまへば、不完全きはまるものである。また同師著、
『道の大原』にも、

『萬物之中也者有形之中也。其中可測、神界之中也者無形之中也。其中不可測。勿混語。』

とあり。また、

『漢人所謂中庸中和大中、其中者與神府之中迥別、勿同視』
と示されてある。人心小智のたうてい神界の真相を究むること能はざるは必然である。ゆゑにこの物語を讀んで怪亂狂妄とみる人あるも、人間としては、あなたが咎むべきものにあらず。ただその域に達せざるがためなることを憐み寛容せねばならぬのであります。

玉銚百首にも、

あやしきはこれの天地うべなうべな、
神代にことに異しきものを。

おほけなく人のいやしき心もて神のなすわざ争ひえめや。

天地を創造したまひし獨一の眞神およびその他の神々の御行爲の怪異なる到底
現代人の知識學説をもつて窺知し得べきものでないことを覺らねば、神界のことは
信じられないものであります。

第一篇 八洲の川浪

第一章 常世會議（一五一）

太古の神界經綸の神業は、最初稚櫻姫命の天則違反によりて瓦解し、つぎに國直姫命の神政となり、これまた姫命の地上を見捨て天上へ歸還されしため、大八洲彦命の神政に移りける。いづれも國治立命の統轄のもとに、神政の經綸に奉仕したまひけり。つぎには天上より高照姫命、地の高天原にくだりて神政經綸の神業に奉仕し、またもや瓦解の運命におちいり、ついで澤田彦命天より降りて國治立命のもとに神政經綸の神業に奉仕し、大破壊を馴致して、またもや地上を捨て天上に還りたまひたるなり。

國治立命は幾度主任の神を代ふるも失敗に歸し、あたかも蟹の手足をもぎ取られたるごとくに途方に暮れたまひける。されど性來の剛直端正なる國治立命は、天地の律法を嚴守して、いかなる難局に會するも毫も屈せず、部下の諸神人にむ

かつて律法の寸毫も干犯すべからざること厳格に命じたまひしがために地の高
あまはら 主任者は、しばしば更迭したりける。

常世の國の八王大神は機逸すべからずとして、世界各山各地の八王八頭を常世
城に召集し謀議を凝らさむと、天の鳥舟を四方に馳せ神の正邪の論なく、智愚に
關せず一所に集めて、八王八頭の聯合を圖りたり。また一方には自在天大國彦と
内々協議を遂げおき、世界神人の國魂會議を開かむとせり。

すなはち八王大神側よりは美山彦、國照姫、魔我彦、魔我姫、清熊、龍山別、
蠟螈別、八十枉彦、朝觸、夕觸、日觸、山嵐、廣若、舟木姫、田絲姫、鬼若、猿
姫、廣依別らの諸神人の出席することとなりける。

大自在天大國彦側よりは、大鷹彦、中依別、牛雲別、蚊取別、蟹雲別、藤高別、
鷹取別、遠山別、醜國別、倉波、蚊々虎、荒虎別、國弘別、出雲別、高彦らの神
人、堂々として出席したり。

また十二の八王八頭の神司は、萬壽山の磐樟彦、瑞穂別を除くほかは、全部出
席することとなりけり。しかるに常世の國の八王大神より、ぜひ出席すべく數多

の鳥舟を率ゐ、蝶螭^{あもりわけ}をして萬壽山に急使を遣はしていふ、

「神界統一のため、平和のための會議に出席なき時は、一大團結力をもつて貴下を神界現界一般の破壊者とみなし、これを討伐するのやむを得ざるに至らむ」と脅喝的^{けふかつてきしんしよ}の信書をもつて來たらしめたりけるに、萬壽山城にては大八洲彦命、磐樟彦以下の神人らは俄の會議を開かれにける。

磐樟彦は強剛なる態度を持していふ、

「たとへ世界の神人らが一束となつて萬壽山へ押寄せくるとも、我は靈鷲山の神力によりて引受け、數百千萬の敵軍をただ一息の伊吹に吹拂ひ退け、天地律法の精神によりて天下の千妖萬魔を言向け和合し、國治立命の神慮に叶ひたてまつれる大神世を樹立せむ。生ける誠の神の神力には、如何なる邪神も、惡魔も敵し得べきものにあらず。今回の常世の會議は常世彦、大國彦が大陰謀の發露なればかかる會議に相交はり、相口合ふは巨石を抱きて海に投ずるよりも危険なれば、當山の神司は一柱といへども出席すべからず」

と主張したりければ、大八洲彦命は第一に八王神磐樟彦の説に贊成の意を表し、

斷じて出席すべからずと主張したまへり。

ここに瑞穂別は立ち上り、

大八洲彦命、磐樟彦の御説示は、實にもつとも千萬の次第なれども、時世時節の力には抗すべからず。よろしく時代の趨勢に順應するをもつて、神政經綸の必要事と思ふ。すみやかに當山より何れかの神司を遣はして、今回の大會議に列せしめたまへ。萬々一にも出席を望まざる神司數多ありとせば、願はくば我を使者として派遣せしめたまへ。いかに靈鷲山の神人らの威徳は強くとも、國治立命の制定せられし律法の一端に觸れることありとも、今回の神集ひに出席せざらむか、世界の神人らに萬壽山の神司らは、世界の平和を破壊する邪神司として一齊に攻撃さるるも、答辨の辭なかるべし。今や當山は實に危急存亡の秋なり。吾らは神界現界平和のために強て出席の議を決定されむことを希望の至りに耐へず」

と主張したりければ、神司らはこの場の光景を見ていかになりゆくかと、各自固唾を呑みてひかへる。このとき神國別命は立つて、瑞穂別の出席説に大々的反對を唱へける。

瑞穂別はおほいに怒りて、

「貴下らは天地の律法を破り、國治立命より當山に御預け、否な食客となりし神司なれば、八頭神たる我々の所説に容喙すべき資格なし。退場あれ」と聲を慄はせながら顔色火のごとくなりて怒鳴りつけたり。

ここに大八洲彦命、神國別命、言靈別命、大足彦は席を蹴つて退場したりけり。あとに瑞穂別は肩をいからせ、肱を張り、居丈け高になりて、八王神の磐樟彦に出席の正當なる理由を千言萬語理をつくし理義を明して説き迫りけり。城内の諸神司の贊否は相半し、いづれとも決斷付かざりにける。磐樟彦は立つて、最早この上は神示に従ふのほかは道なし。汝瑞穂別は神殿に拜跪し、自ら神勅を乞ひ、神示によりて出否を決せよ」

と一言を遺して退席したり。ここに瑞穂別は直に月宮殿に參拜し、今回の事件にたいする神示を恭しく奉伺したるに、たちまち瑞穂別の身體は、麻痺して微動だもできずなりぬ。従ひきたれる瑞穂姫は俄然歸神となり、身體上下左右に震動しはじめ、早くも口が切りし憑神はいふ、

「我は國治立命の荒魂、奇魂なり。今回の神集ひは常世彦、大國彦ら一派の周到なる陰謀に出づるものなれば、當山の神司は一柱といへども出席すべからず。今後いかなる難關に逢ふことありとも、よく忍ぶべし。第二の神界經綸の聖場なれば、當城のみは決して敵に蹂躪さるるがごときことなし。眞正の力ある神司神人をして、五七出現の世までは固く守護せしめむ。夢疑ふことなかれ」

と宣言して、姫の體內より出で去りたまひぬ。それと同時に姫の身體はもとに復しける。この神勅と様子を見聞しめたる瑞穂別は、おほいに前非を悔悟し、心中にて大神に謝罪すると同時に瑞穂別命の身體また舊に復し自由自在となりぬ。固りて直ちに大神に感謝し、莊嚴なる報本反始の祭典を舉行し、八王大神および大八洲彦命以下の神司らに陳謝し、萬壽山の神人は一柱も出席せざる由を常世の國の使者にむかつて、斷乎として宣示したりける。常世の使者、螻蛄別は拍子ぬけしたる顔色にて、一同の神人をさもいやらしき眼にて睨みつけ、

「勝手にされよ。後日に悔いをのこされな」

と捨臺詞をのこして天の鳥舟に乗り、あまたの從者ととも常世の國へ還りける。

(大正一〇・一二・一五 舊一一・一七 出口瑞月)

第二章 聖地の會議 (一五二)

地の高天原の神政は澤田彦命の還天以來、ますます混亂紛糾して收拾すべからざるの慘状を呈するにいたりぬ。されど廣宗彦は、母事足姫、猿田姫、出雲姫らとともに銳意神政の完成に努力したまひしかば、一たん混亂状態におちいりたる地の高天原も、この四柱の奮闘的至誠の力によりてやうやく瓦解を免れむたりける。

然るにここに突然として常世の國より地上神界一般の國魂の神人の大集會を開催するにつき、地の高天原より使者を派遣すべきことを通告しきたりぬ。重ねて常世彦は、龍山別を使者として天の鳥舟に乗り數多の從者とともに地の高天原へ遣はしたりける。その信書の主意によれば、

「今や地上の世界は八王神、八頭神、たがひに嫉視反目してその権力を争ひ優勝劣敗、弱肉強食の惨状目もあてられぬ次第にして、國治立命の御聖旨に背反すること最もはなはだし。天地は現在のままに放任せむか、つひには地上はたちまち修羅道となり、餓鬼地獄の暗黒界と化すべきは火をみるよりも明白なる事實なれば、八王大神常世彦はここに大いに覺るところありて、大國彦と相謀り、八王八頭その他諸山の國魂を常世城に集合せしめ神界平和のため一大會議を開催せむとす。ついては第一着手として地の高天原の主宰者國治立命の天使長廣宗彦以下の御出席を懇請す」

といふにありける。

廣宗彦は、弟行成彦ならびに猿田姫、出雲姫その他の諸神司を集めて會議を開き、出席の賛否を慎重に審議したり。廣宗彦はほとんど土崩瓦解の有様を呈したる地の高天原を修理固成し、地上の世界を平和に統一せむと日夜焦慮しつつありし際なれば、常世彦の信書をみて大いによるこび、欣喜雀躍の體なりき。地の高天原にては即刻大廣前に諸神司を集めて大祭典を執行し、つぎに各神司は設けの

座ざに着つき神前しんぜん會議くわいぎを開ひらきける。この會議くわいぎに參さんずる神司かみがみは八百八柱はつびやくやはしらの大多數だいたすうに達たつし、地ちの高天原たかあまはら神政しんせい開始かいし以來いらいの大集會だいしふくわいなりけり。

ここに事足ことたる姫ひめは議席ぎせきにあらはれ、今回こんくわいの大會議だいくわいぎに出席しゆつせきの不可ふかなることを極力きよくりよ主ち張やうしたりける。その説せつによれば、

極惡無道ごくあくむだうの常世彦とこよひこならびに常世姫とこよひめ以下の邪神じゃしんは、あらゆる奸策かんさくを弄ろうして天使長てんしちやう大八洲彦命おほやしまひこのみことを退隱たいいんせしめ、つぎに國直姫命くになほひめのみことをして還天くわんでんの餘儀よぎなきにいたらしめ、

なほも高照姫命たかてるひめのみこと以下の天使長てんしちやうおよび天使てんしを失脚しつきゃくせしめて、その後ごの聖職せいしよくを奪うばはむと千計萬略日せんけいばんりやくひも足たらざる彼かれ邪神じゃしんの惡行あくかう邪心じゃしん、たうてい改心かいしんすべき筈はずのものにあ

らず、かならず深ふかき計略けいりやくのもとに行おこなはるペテン會議くわいぎに相違さうあなからむ。加くはふるに常世姫とこよひめは美山彦みやまひこ、國照姫くにてるひめ、魔我彦まがひこ、田依彦たよりひこらをたくみに籠絡ろうらく頤使いしして不斷ふだんに地ちの

高天原たかあまはらをはじめ龍宮城りゆうぐうじやうに假面かめんを被かぶりて出入しゆつにぶせしめ、機會きくわいのいたるを待まちつつあるを知らざるか。萬々まんまん一廣宗彦いちひろむねひこその他の神司かみがみにして、かれ常世彦とこよひこの奸策かんさくにおちいり、

遠とほく衆しうを率ひきゐて出席しゆつせきせば、混亂こんらんの極きよくに達たつしたる地ちの高天原たかあまはらはこれを統轄とうかつする神人かみの數すうを減げんじ、ますます無勢力むせいりよくとなるべし。その虚きよに乗じやうじて彼らかれの一派いっぱたる美山彦みやまひこ

以下の邪神は一時に反旗をあげ、聖地聖場を蹂躪するは目の前にあり、斷じて油斷あるべからず。萬々一常世彦にして地上の世界を統一し、國祖國治立命の聖旨に奉答せむとするの眞實誠意あらば、彼らはまづ國祖の大神の鎮まりたまふこのエルサレムの聖地に參るのぼりて國祖の神の許可をうけたる上、天神地祇の神集ひに集ひて神議りすべき神定の聖地、地の高天原において大會議を開かざるべからず。苟くも地上一般の國魂神を集めて世界の大事を決定するに、常世國をもつて中心たるものごとく、聖地のごとく振舞はむとするは、はじめより天地の神定に背反せる破律的惡行爲にして、却つて天地を混亂せしむるものなり。よろしく今回の大會議はエルサレムにおいて開催すべく常世彦に勸告せよ』

と宣示したまひける。このとき常世の國より第二の使者として廣若なる者諸々の從者を率ゐて來り、一日も早く廣宗彦以下の重職の出席を促しやまず。聖地の會議は事足姫の大反對のため連日連夜の會議を重ねて、未だその解決にまでいたらざりし時なりき。第一の使者たる龍山別、第二の使者廣若はしきりにその回答を迫つて止まざりける。ここに廣宗彦は衆議の如何にかかはらず、行成彦をして常

世の會議に列せしめむと決心の色を面にあらはし、すみやかに決定すべきことを主張したり。母の事足姫は前述の不贊成説を固持して少しも譲るの色なく、廣宗彦以下の神人は進退これ谷まり、青息吐息の體なりける。

かかる時しも常世彦の閒者にして美山彦の幕下なる清熊は進み出で、さも横柄に諸神人を見廻し梟のごとき眼を開きながら、

諸神人は如何に思はるるか知らざれども、現今の聖地、エルサレムの勢力は極めて微弱にして、その運命また風前の燈火に等し。いかに神定の聖地なればとて、かかる微力なる神人の集團をもつて、かの強大なる常世國の勢力に對抗せむとするは實に無謀の極にあらずや。萬々一常世彦の怒りに觸れむか、巖石をもつて卵を打ち砕くよりも脆きは、現今聖地の真相ならずや。諺にも長きものには巻かれよ、といふことあり。立寄れば大樹の蔭とかや。しかるに神定とか、聖地とかの、ほとんど有名無實の舊習や、形式にとらはれて時代の趨勢を辨へず、天下の同情を失墜し、つひには自滅を招くよりも、今日のごとき千載一遇の好機をとらへ、すみやかに出席を諾し、おほいに神政の基礎を固め、もつて災禍を未萌に防ぐこ

そ、策の上々たるものなるべし』
と、言辭を盡して述べたてにけり。

廣宗彦は板挾みの姿となり、兔やせむ角や決せむと焦慮さるる折しも、大道別の密使として鷹依別は靈鷹と變じ、常世の國より飛びきたりて密書を口にくはへ、これを廣宗彦に渡し、ただちに天空さして姿をかくしたりける。廣宗彦はこの信書を見るや顔色俄に變じ、急病と稱してこの議席を退出したり。ア、この結末はいかに展開するならむか。

(大正一〇・一二・一五 舊一・一七 出口瑞月)

第三章 使臣の派遣(一五三)

廣宗彦は靈鷹の信書を見たるより急病と稱して議席を退去し、わが居館に入りて、幾度となくその信書を繰返しくりかへし打ち眺め、漸くにして打うなづき會

心の笑をもらし、枯木に花の咲きしごととき華やかなる心地したりけり。

その文意の大略は左の意味が認めありぬ。

「私は大道別であるが、神命を奉じて常世の國常世城に忍びこみ、いまは常世彦命の従僕となつて一切の様子を探査してゐる。私は一度聾啞癡呆となつたが、南高山において不思議のことより一たび全快した。それより、各地各山の國魂神の動靜を調査すべく長高山に進み、ふたたび神命により、今度は偽の聾啞癡呆と化け高白山にむかひ、つぎに世界の各地を精細に調査し、つひに常世城にいたり不可思議なる神の攝理によりて常世彦に見出され、聾啞癡呆の強力者として拔擢され、いまは城門の守衛となつてゐる。私のほかに八島姫、鷹住別、春日姫の三人は常世彦の氣に入りの従臣となつて仕へてゐる。私と八島姫には神命によつて高倉、旭といふ二個の白狐が交はるがはる守護して、常に神變不思議の神力を現はし、吾が使命を全からしめてゐる。ついでには今回の會議の目的とするところの眞意は常世彦が神界の主宰者たらむとする、大野心から起つたもので、大自在天大國彦との密議の結果である。各山の八王や八頭はその眞相を知つてゐないので、

いづれも五六七の世のいまに出現するかのやうに平和來の福音として、有頂天になつて今度の會議を歓迎し、先を争ふて出席を申し込むといふ有様である。されども八王大神の目的は、聖地より代表者を送らせて、満座の中にて聖地を八王大神一派の管理に移した上、盤古大神をして國治立命に代らしめ、八王大神は貴下を却け、みづから天使長となりて神政を私せむとするものである。ゆゑに彼らはどうしても聖地より貴下または代理者を出席させやうとして種々の奸策をめぐらしてゐるから、どうしても誰かの神司を出席せしめねばをさまらぬのである。ゆゑに今回の常世會議を斷然拒絶して一柱の神司も参加なきときは、貴下をして神界の攪亂者とみなし一擧に聖地を攻略せむとの下心であるから、いかに神徳盛大なりとて衆寡敵せず、敗北を見ることなきを保しがたければ、ぜひ行成彦を代理として派遣ありたし。吾らは神變不可思議の白狐の妙策をもつて、邪神の企圖を根底より轉覆せしむるの心算は確立しあれば衆議の如何にかかはらず、すみやかに決行されたし』

との文意であつた。

ひろむねひこ
廣宗彦は決心の臍をかため、ふたたび大廣間の會議に列し、使臣を派遣するこ
とを斷乎として宣示したるに、母の事足姫は自説を固執して動きたまはず。され
ど廣宗彦は、

「天下の一大事猶豫すべきにあらず。たとへ大義親を滅するの結果を來すとも、
天下を救ふを得ば決して大神の神慮を怒らしむるものにあらず。いまは形式律法
等に囚はるべき時機にあらず」

と奮然として立ち上りぬ。弟行成彦はその説に賛成し、一切の情實を却け猿田姫、
出雲姫その他の従者を數多引連れ常世の使者とともに天の磐船を天空にならべて
出發したりける。あとに事足姫は、國治立命に無事を祈り、かつ日々侍者とともに
に、天の原なる國の廣宮に詣でて行成彦一行の成功を祈りけり。これより常世城
における大道別以下の神人の行動は、實に面白きものありしなり。

(大正一〇・一二・一六 舊一一・一八 出口瑞月)

第四章 亂暴な提案（一五四）

常世の國の首府たる常世城内の大廣間には、世界における八王、八頭の神司をはじめ、數多の使者を集めたる大會議は開催されたり。大廣間の中央に高座が設けられて八王八頭をはじめ諸神司は立つて議題を演述するの装置なりける。

常世彦は美山彦をしたがへ、この高座に現はれ、

「世界の平和を永遠に、無窮に保持して、神人をして國治立命の神政に隨喜し天地の律法を嚴守し、各山各地の神政を統一して根本的世界の大改造を斷行すべく、そのため、諸神司の來集を求めたるに、神界および萬有の平和安息を望まるる至誠至仁の諸神司は漏れなく、空前絶後のこの大會議に先を争ふて出席されたるは、主催者として實に感謝のいたり耐へず。願はくば、諸神司は協心戮力もつて慎重に世界のため、天下神人のために最善をつくして審議されむことを懇請す。ただ恨むらくは萬壽山における八王八頭の反抗的態度を固持して出席を拒絶せる頑迷不靈の行動を遺憾とするのみ。萬々一この會議をして、不結果に終らしむる様

のことあらば、本會議にたいする責任は萬壽山の八王神司に歸すべきものと確信する。諸神司それ克く吾が誠意の存するところを洞察して、我が主催の大目的を達成せしめられむことを希望す』
と宣明せり。

諸神司は一度に拍手喝采し八王大神の宣示を大神の慈言のごとく、救世主の福音として口を極めて讚美したり。その聲は常世の國の天地も崩るるばかりの勢なりける。ついで萬壽山の不参加を口々に惡罵嘲笑して世界の大敵、平和の破壊者とまで極言するにいたりける。

諸神司の會するもの八王、八頭をはじめとし、諸山諸地の守護なる國魂および使臣を合して八百八十八柱の多數が綺羅星のごとく、中央の高座を圓形に取まきたりしが、その光景は、大宇宙の中心にわが宇宙球ありて、無數の小宇宙球が包圍し居るごとく見えにけり。

ここに大國彦の重臣なる大鷹彦は八王大神の退場とともに中央の高座に現はれ、議席を一瞥し厭らしき笑をもらし、眉毛を上下に轉動させながら百雷の一時にと

どろくごとき大音聲を發して、諸神司の荒膽を奪はむとしたりしより、諸神司はその聲にのまれて摺伏せむばかりなりける。

因にいふ、この時代はいまだ神人の區別なく、現代のごとき嚴格なる國境も定まらず、神人は單に高山を中心として、國魂神を祭り神政を行ひたりしなり。神人らは龍蛇、虎、狼、獅子、惡狐、鬼、白狐、鱈、熊、鷲、鷹、烏、鷄なぞを眷屬として使役し、これらの眷屬によつて各自に守らしめたりしなり。ちやうど現代の國防に任ずるところの陸海軍、空軍が各自に武装をこらしめて敵にあたるごとく、角や、牙や、羽根や、甲のごときは太古の時代における神人の大切な武器とせられける。

ここに大鷹彦、美山彦二人は立つて、
神界の爭亂を根絶し、眞個平和の神政を布き、道義的に世界を統一せむとせば、各神の率ゆる眷屬の有するその武器を脱却せしめざるべからず。かつ各山の主權者なる八王を廢し、上中下の神人の區別を撤回し、四海平等の神政を行ふをもつて第一の要件と思ふ。諸神司は如何、御意見あらば、遠慮なくこの高座に登りて、

その正否を陳辨論議されたし」

と述べ立てたりしより、十一柱の八王は寢耳に水の驚きに打たれ、鳩が豆鐵砲を喰つたるごとく、啞然として互ひに顔を見合すばかりなり。ここに蛸閒山の八頭なる國玉別はただちに登壇し、大鷹彦、美山彦二人の提出せる議案について口を極めて讚歎し、八王の廢止をもつて平和第一の要點なりと述べ、且つ、

「武備の全廢は平和のために缺くべからざる大名案なれば、一同の贊成を乞ふ」と謂ひつつ壇をしづかに降り、自分の定席につきぬ。満場水を打ちたるごとく暫時のあひだは寂寥の氣に充たされ、神人らは呆然として口を開いたまま閉づるものなかりける。大廣間の外部には數萬の猛虎嘯き、獅子吼え猛り、狼唸り、龍蛇荒れくるひ、鷲の羽ばたき凄まじく、大空には天の磐船幾百千ともかぎりなく飛びまはりて巨音をたて、一大示威運動が開始されつつありき。いづれも常世彦の指揮によるものなりけり。

八王、八頭の神司をはじめ諸神人は、いまに何事かの一大慘事の勃發せむやも計り難しと、煩悶の結果は、たちまち顔色土のごとく、蒼ざめたる唇を慄はせて、

上下の齒に音をたてつつ一言も發せずして、扣へてゐたりける。示威的運動は時々刻々に激烈の度を加ふるのみ。八百八十八柱の神司らは、この光景に膽をうばはれ畏縮して、何の意見をも述べむとする者なかりけり。

この腑甲斐なき場面をながめて、聖地よりの使者行成彦は、恐るる色もなく立上り壇上目がけて悠々と登りゆく。神司らの視線はのこらず行成彦の一身に集注されたりける。ア、行成彦は果していかなる意見を吐くならむか。

(大正一〇・一二・一六 舊一一・一八 出口瑞月)

第五章 議場の混亂(一五五)

行成彦は満場にむかつて慇懃に挨拶を述べ且つ、

今回の大會議は世界永遠の平和を企圖さるるため、八王大神および大自在天の發起されしものにして、じつに現今の世界の状況よりみて、まことに吾々は感謝

に耐へないのである。これ全く二神が天下蒼生を愛したまふ大慈大悲心の發露にして大神の慈言に等し。我々は誠心誠意をもつて相終始しこの平和會議をして名實相伴ひ、眞個世界の永遠平和の基礎たらしめざるべからず。この點においては、諸神司におかせられても吾々と同感なるべきことを信じて疑はない次第である。各自の武備を撤廢し、四海同胞和親の曙光に接するは實に同慶の至りである。ゆゑに我々は武備の撤廢については雙手をあげて贊成するものである。されど吾々は八王廢止の件については、おほいに考ふべき餘地の幾多存することと思ふ。そのゆゑは、かの八王なるものは、天地の大神の定められたる規定にして、それぞれに國魂を配置し、もつて神界現界御經綸の守護となしおかれ、八王は天地の律法をあまねく神人に宣傳し、かつ國魂を通じて國治立命に仕事するの聖職である。かかる聖職を神界大神の御神慮をも伺はず、輕々しくこれを提唱するごときは、第一天地の神明を無視したる反逆的行爲なれば、吾らはこの議案にたいしては大々的反對である。各山各地の八王を撤廢するは、恰も扇子の要を抜きとりたると同様にして却つて、世界の四分五裂を招き、これより地上は一層の混亂、無明の天

地と悪化せむ。吾々は世界の前途を思ふのあまり、一時も早くかくのごとき愚案は撤回されむことを望まざるべからず。いかに徳望高く、勢力旺盛にして旭日昇天の威望ある八王大神の提案なりとはいへ、かくのごとき天意に反したる議案には他人はいざ知らず、吾々は断じて盲従すること能はず』
とやや聲を荒らげ、憤然として降壇した。

ここに八王大神は烈火の如く憤りながら、強力の神道彦を従へ、ふたたび壇上に登り一座を瞰下し、恐ろしき眼を見はりつつ、視線を行成彦の方にむけたる時の容貌は實に六面八臂の邪鬼の面相そのままなりける。諸神司は固唾をのんで雨か、風か、はた洪水か、雷鳴か、地震かと、おそるおそる八王大神の顔色をのぞくやうにして、見上げてみたり。

このとき八王大神聲を勵まし雷鳴のごとくに怒號咆哮し、列座の諸神司をして恐怖の念に驅られしめたり。しかして行成彦をハツタとにらみ、
『汝は若年の身として小賢しくも屁理屈を百萬陀羅述べ立るといへども、口角いまだ乳臭を脱せず。汝は律法を楯にとりて吾らの大慈旨を抹消せむとは片腹痛し。

時世の大勢に透徹せざる迂遠狂愚の論議を、かかる尊き會議の席において蝶々喃喃し、議席の神聖を汚し、天下の神人萬有を安住せしめ、眞個の天國を地上に顯出せむとする大自在天大國彦および吾らの神策の實行を妨害せむとする、その心事の陋劣にして惡逆無道なる實に汝の言辭といひ、精神といひ見下げ果てたるその振舞ひ、汝のごとき邪心を包藏する愚者は、この席に列するの資格なし、一時もはやく退場せよ」

と嚴命し、かつ諸神司の方に眼を轉じていふ、

「諸神司は彼行成彦の言をもつて、天地經綸の神策を破壊するものと見做さざるや。諸神司にして我が説に贊成ならば、手をあげて以て誠意を示されたし」

と傍若無人の暴言をはき、場の四隅を見渡しける。諸神司はその權幕の猛烈さに、ますます氣をのまれ、猫に出あひし鼠のごとく、戦々競々として縮みあがり片言隻句も發し得ざるの卑怯さを遺憾なく發露したりける。

行成彦は憤然として立ち上り、何事か自席より發言せむとするや、八王大神大に怒り、

「汝は神聖なる議場を汚す曲人なり。意見あらば何んぞ場内の規律を守り登壇してこれをなさざるや」

と叱咤したるにぞ、行成彦は、

「然らば御免あれ」

といひつつ自席をはなれ登壇せむとするや、八王大神は、

「この愚昧者」

といふより早く、壇上より蹴り落さむとする際、従者なる道彦は暫時の御猶豫と言ひながら、八王大神の片腕を掴みける。八王大神は強力の道彦に利腕を固く握られ、全身麻痺してその場に顔をしかめて打ち倒れたり。この態を見たる大鷹彦、美山彦は矢庭に壇上に立ち上がり、道彦を蹴り落したり。蹴落されたるは道彦と思ひきや、行成彦なりき。しかして道彦の姿は煙と消えて跡形もなくなりぬ。八王大神は痛さをこらへ、やうやくにして立上り、道彦を叱咤せむとし四邊を見れば、道彦の姿は見えず、行成彦が壇下に倒れて七轉八倒し居たりける。八王大神は心地よげに打ながめ、

「汝は若年の分際として、老練なる神政者の我にむかつて抗辨せり。天地の大神は汝の暴逆を惡みたまひて、その高き鼻梁をうち碎きたまふ。今より汝は良心に立かへり、我主張に贊成せば汝のいまの無禮を許し與へむ」
と欣然として降壇する際、八王大神は吾が足をもつて行成彦の倒れたる身體をはね退けむとする刹那、行成彦の身體より數個の玉現はれ満場を照して天上へ上ると見るまに玉はその姿をかくしたりける。
行成彦は、依然として最前より自分の議席に静まりゐたるなり。また道彦は八王大神の館の正門を離れず嚴守しゐたりける。ア、これ何物の所爲なりしならむか。

（大正一〇・一二・一六 舊一一・一八 出口瑞月）

（序）第五章 昭和一〇・一・一九 於鹿兒島市錦江支部 王仁校正）

第六章 怪また怪（一五六）

龍宮城に野心を包藏して永く仕へるたる美山彦、國照姫は、地の高天原の事情によく通じみたるを幸ひ、美山彦とともに國照姫は傲然として中央の高座に登壇し、口を極めて、聖地の窮状を満座の前にて嘲笑し、かつ凡ての内情を暴露したるにぞ、行成彦、猿田姫、出雲姫は、國照姫の行動をいま眼前に認めて非常に憤慨し、獅子奮迅の勢にて前後の區別も知らず、たちまち壇上に馳せのぼり、猿田姫、出雲姫は國照姫の襟髪をとるより早く、高座より引きずりおとし、驚きおそれ狼狽する國照姫の部下を、一々女性の強力にて打据ゑ蹴飛ばし、泣き叫ぶ神人を目掛けて、二女は多數を相手に戦ふにぞ、大虎彦、美山彦は、
「ソレ狼藉者逃がすな、引捕へて縛せよ」
と厳しく下知するを、満座の神司らは呆氣に取られて、この場の光景を默視するのみなりき。神司は漸くにして猿田姫、出雲姫を捕へて高手小手に縛りあげ、中央の壇上に押しあげ、満座にむかつて、
「地の高天原の神人は、女性といへども斯くのごとき亂暴なるもののみ。その他
の男司の暴惡無道や知るべきのみ。諸神司はこの現場において暴逆なる女性の行

爲を直接目撃されたれば初めて迷夢を覺まし玉ひしならむ。これにてもなほ聖地の神政經綸を謳歌し、もつて行成彦の説に賛成盲従をつづけたまふ所存なりや」と兩肩をゆすり、口を左方に斜に釣りあげながら、したり顔に高座より述べたり。一座の神司らは耳を澄ませて聞き入りしが不思議なるかな、いままで猿田姫、出雲姫と見えしは、まつたくの間違ひなりける。猿田姫と見えしは、八大神の寵神にして常世城の内外に嬌名たかき春日姫にして、出雲姫と見えしは、これにはまた八王大神の寵神にして常世城に艷名並びなき八島姫なりき。眞の猿田姫、出雲姫は依然として自席に柔順にひかへて靜かにこの光景を對岸の火災視しつつ無心の態なり。満座の神司らは、この不審の出來事にその眞偽に迷はざるを得ざりける。

今まで沈黙を守り怖ぢ怖ぢし居たりし青雲山の八頭なる吾妻彦は、猛然として立ちあがり中央の高座に登壇し、一同にむかつていふ、
「ただいま大虎彦、美山彦ならびに常世城の神司らは、聖地の神人は女性さへもかくのごとき亂暴狼藉におよぶ。これを見ても聖地の神人らの暴惡は察知さるべ

しとの言明げんめいにあらざりしか。然しかるにただいまの狼藉者ろうぜきものの女性によしやうは、満座諸神司まんざしよしんの見みらるるごとく、常世彦とこよひこの寵神ちようしんなる春日姫かすがひめ、八島姫やしまひめの二人ふたりに非あらずや。しかるに溫柔おんじうなる聖地せいちエルサレム城じやうの女臣ぢよしん、猿田姫さだひめ、出雲姫いづもひめの暴動ばうどうせしごとく主張しゆちやうせし美山彦みやまひこ、大虎彦おほとらひこ、國照姫くにてるひめらの神司かみがみらは、かかる明白めいはくなる事實じじつをとらへて、罪つみを聖地せいちの女性ぢよせいに科くわせむとするは何なにゆゑぞ。亂暴らんぼうもまた極きはまれりとみふべし。今いまここに縛ばくされし二人ふたりは、常世城とこよじやうにてもつとも聲望せいぼう高たかき女性によしやうにして、かつ八王大神やつわうだいじんの無二むにの寵女ちよぢよなり。そのもつとも精選せいせんされたる女性ぢよせいにして、その亂暴らんぼうの行爲かうゑかくのごとし。これをもつて推おし考かんがふるときは、常世城とこよじやうの男神だんしんらの惡逆無道あくぎやくむだうの邪神じやしんたるは論ろんをまたず。況いはんやこれを統轄とうかつする常世彦とこよひこに於おいておや、その惡逆無道あくぎやくむだうは察さつするに餘あまりありとみふべきのみ。常世城とこよじやうの神人かみがみらはこれにたいして何なんの辭じあるか。ただちに明確めいかくなる答辨たふべんを待まつま。

と壇上だんじやうに突立つきたちたるまま大虎彦おほとらひこ、美山彦みやまひこの面おもてをにらみつけたり。にらみつけられたる二人ふたりは何なんの返答へんたふもなく顔見合かほみあはせてブルブルと菟藟こんにやくの幽靈いうれいのごとく震ふるひをののき居ゐたりける。このとき會場くわいぢやうの空そらには、天あまの鳥船とりふねのとどろく聲こゑますます激げき烈れつとな

り、示威運動は再開せられたり。吾妻彦は、毫も屈せず、直立不動の姿勢をとり、壇上にて、

「常世彦は惡逆無道にして天地に容るべからざる魔神なれば、満座の神司らはこの機を逸せず常世彦を面縛し、天地の律法を説き諭し、いよいよ改心せざるににおいては、吾一人としても諸神司の面前にて天に代り誅伐せむ」

と臆めず恐れず懸河の辨舌さはやかに述べたたり。満座の神司らは呆然自失ほとんど腰を抜かさむばかりの状態なり。このとき場の一隅より魔我彦は席をけて立ちあがり、

「畏くも八王大神にむかつて無禮の暴言聞きすてならじ、我は天に代つて無禮者を誅伐せむ。思ひ知れや」

といふより早く長刀を引抜き、高座に馳せ登り、ただ一刀のもとに吾妻彦を頭上より斬りつけたりしが、ハツト思ふとたんに一條の白煙立ちのぼり見るまに、吾妻彦の姿は消え失せにけり。同時に春日姫、八島姫の姿も見えずなりぬ。魔我彦は吾が振りあげたる長刀の尖に我とわが脚を斬り、流血河のごとく【あけ】に染

まりてその場に打ち倒れたりける。神司らは周章狼狽して魔我彦をかつぎ一室に送り、侍女をして看護せしめたりき。しかるに、またも不思議や吾妻彦は依然として自席に柔順にひかへ無心の態に、コクリコクリと白河夜船をこぎ、華胥の國に遊樂の最中なりける。かかる大騒動を前にして議席に着きしまま眠りたる吾妻彦こそは、じつに暢氣なものといふべし。

大虎彦、美山彦は一向合點ゆかず、アフォンとして、魂をぬかれたる人形のごとく、木像のごとく呆然自失の態にて、蛸の八足を取られし時のごとく、身體は一寸一分といへども、動かずなりみたりける。第一回の會議は混亂紛糾の中に幕を閉ぢられしが、第二回目の會議の模様は果していかなる結果を來たすならむか。吾妻彦、八島姫、春日姫は果して何ものなりしや合點行かざる次第なりける。

(大正一〇・一二・一六 舊一・一八 出口瑞月)

第一回の常世城の大会議は前述のごとく、大混亂のあひだに日没とともに幕は閉ぢられ、翌れば八百八十八柱の神司鶏鳴を合圖にさきを争ふて大廣間に參集したり。合圖の磬盤の響きとともに神司らは各自設けの席に着きにける。

八王大神の妻常世姫は春日姫、八島姫とともに中央の高座に登壇したり。春日姫の艶麗なる容姿は、満座の神司らをして驚歎の眼を見はらしめたり。あたかも五百羅漢を陳列せしごとき不恰好の顔のみなる神司らの間には、一層衆目を惹きたるも自然の道理なりける。つぎに八島姫の容貌、また春日姫に劣らぬ美はしさ、衆の視線は期せずして二人の姿に集注せり。常世姫は色あくまで白く、光澤鮮麗にして白雪の旭日に照らされたるごとき容姿にして、この三人の女性は月雪花を一度に眺めしごとき、何ともいへぬ立派なる神品を遺憾なく壇上に發揮したりけり。昨日の殺風景なる議場に引きかへ、今日は打つて變りし女性の出場で、春の長閑な空氣漂ひ居たりける。すべて相談事は女性の姿現はれざれば、何事もゴツゴツとしてうまくゆかぬものなり。第一回の會議の紛糾混亂に手を焼きたる常世彦は、方針を一變し、平和の女性として月雪花に擬ふ嬋娟窈窕たる三女性をこの

議場ぎぎやうに出席しゆつせきせしめ、集議しふぎの大目的だいもくてきを達成たつせいせむとしたるなり。

一旦いつたんモスコむに破れやぶ、八頭やつがしら夕日ゆうひ別わかとともに萬壽山まんじゆざんに避難ひなんし居ゐたる八王道貫彦やつわうみちつらひこは、春日かすがひめ姫めの、いまや常世とこよひめ姫めの侍女じぢよとしてこの壇上だんじやうに現あらはれたるを見て、不審ふしんに堪たへず、首くびをやや左方さほうに傾かたむけ、彼かれはわが最愛さいあいの娘むすめ春日かすがひめ姫めには非あらずやと、わき眼めもふらず見守りみまもりあたりけるが、道貫みちつらひこ彦ひこ心のうちおもに思おもふやう、花はなの唇くちびる月の眉まゆ、加くはふるに左さ頬ほの「えくぼ」といひ、背せ恰好かつかうといひ、寸分すんぶん違ちがはぬその容姿ようし、もしや我娘わがむすめの春日かすがひ姫めにあらざるかと、溜息ためいきをつき思案しあんに暮くれりたりける。

また南高山なんかうざんの八王やつわう大島おほしま別わかは、八島やしま姫ひめの姿すがたを遠とほく自席じせきよりながめ、日常心にちじやうこころを碎くだきて戀慕こひしたふ吾わが娘むすめ八島やしま姫ひめの容貌ようぼうに酷似こくじせるは如何いかなる理由りいうぞ、世よには似にたるものもあるものかな。吾わが居城きよじやうにある八島やしま姫ひめと見比みくらべて瓜うりを二ふたつに割わりたるごとし。ア、なつかしさの限りかぎなりと飛とび立たつごとおもき思おもひにて、つくづくと八島やしま姫ひめの面色かほいろを穴あなのあくほど見みつめてゐたり。

このとき常世とこよひめ姫めは満座まんざの神人かみがみらを見渡みわたし、慇懃いんぎんに遠來えんらいの勞苦らうくを謝しやし、顔色がんしよくをやはらげ、温順おんじゆんを装よそほひて挨拶あいさつを述のべけり。

「神界永遠の平和のため、諸神司の和衷協同して本會議の目的を完全に達成せしめられむ事を希望の至りに堪へず」
と滔々として布留那の雄辨をふるひ諸神司をして酔はしめたりぬ。今日は旭光このほか鮮麗なりしが、正午に至りてますます光輝を増し、大廣間は何ンとも云ひ様なき明るき氣分と輝きがただよひ、神司らの顔色も何となく勇ましげに見える。

ここに春日姫は満座にむかひ、叮嚀に一禮していふ、
「妾はモスコの城主八王道貫彦の娘にして、春日姫と申すものなり。妾は邪神のため魅せられ、不覺の過ちより生命すでに危きところ、慈愛に富める常世姫のために一命を救はれしのみならず、肉身の父母にもおよばぬ無限の愛をほどこされ、いまは常世彦御夫婦の侍女として、日夜誠心誠意のあらむ限りをつくし奉仕せり。妾も最初は御夫婦の心事と行動をうたがひ、平素審神の道を怠らざりしが、案に相違の八王大神の仁慈博愛に富める大御心は天のごとく高く、海洋のごとく深く、廣きを心底より透察して、はじめの妾が疑ひたてまつりたる邪心を愧

ぢ、天にも地にも身の置きどころなきまでに懺悔の念に打たれたり。諺にも疑心
暗鬼を生ずとかや、神司らはよろしく反省して、清く、赤く、直く、正しき至誠
の心をもつて、その大御心とその行爲を拜察されなば、平素の疑團はまつたく氷
解せむ。現今のごとき草の片葉にいたるまで言問ひあげつらふ世界は、到底以前
のごとき神政經綸の神策にては修齋の道思ひもよらず、天下の神人をして至安至
樂の世に安住せしめむとの八王大神の大慈大悲の神心よりいでたる大會議なれば、
諸神司は時代の趨勢を慮りて小異を捨て大同に合し、大慈大悲の神心を發揮し、
區々たる一切の感情を捨て世界統一の大業を翼賛するため、その第一着手として
諸山各地に割據守護する八王の聖座を自發的に撤廢し、天下共同のもとに八王大
神の幕下となり、一切の聖職を擧げて八王大神の管理に委任し、その指揮を仰ぐ
にいたらば、政令一途に出て、現今のごとき天下の紛亂を根本より拂拭し、國祖
國治立命の大神業に至誠忠實に奉仕することを得む。諸神司の御決心や如何
と、あたかも梅花の露にほころぶごとき優美なる口より、流暢なる懸河の能辨を
ふるひ、莞爾として、降壇せむとするや、神人らの拍手の聲は雨霰のごとく四邊

より響ききたりぬ。常世姫はなにゆるか春日姫の降壇せむとするを引留め依然として壇上に立たしめたり。このとき議席の左側八王の座席より突と身を起したる神司ありき。これ春日姫の父にして、モスコの城主八王の道貫彦なりける。八王は常世姫にむかひて登壇を許可せられむ事をと、心ありげに請求しければ、常世姫はニヤリと笑ひて、快く登壇の請求を快諾したりける。

(大正一〇・一二・一七 舊一一・一九 出口瑞月)

第二篇 天地暗雲

第八章 不意の邂逅(一五八)

道貫彦は常世姫の快諾を得て、中央の高座にのぼり満場の諸神司にむかひ一禮していふ。

「我はモスコを管轄する八王道貫彦なり。今日はじめて常世彦の至仁至愛にして毫末の野心もなく、眞個世界平和を欲求したまふ至誠のあまり今回の大會議を開催されたることと確信す。諸神司試みに現今地の高天原の状勢を見られよ。天地の律法は有つて無きがごとく、綱紀は弛緩し、邪神は至善至美至仁の假面をかぶりて聖地に入し、天使眞心彦は絲竹管絃に心を奪はれ花顔柳腰に心魂をとるかし、つひには自決するのやむなきに立ちいたれり。天使の行動にして斯のごとしとせば、その他の神人の悪行非爲や知るべきのみ。第一、天使長たりし澤田彦命は神命を輕んじ、律法の尊嚴を無視し、薄志弱行の心性を暴露し、聖地の紛糾混亂を餘所に見て還天したるごとき無責任極まる行動を敢てし、ために聖地の秩序をみづから破りたるにあらずや。その片割たる眞心彦の後嗣廣宗彦は、やや反省するところあるものごとく、神政經綸のため最善の努力を竭しつつありといへども、元來無責任にして放埒きはまる眞心彦の血統を享けたる者なれば、言、

心、行、常に一致せず、ために聖地の神人が日に月に聖地をはなれ、各地に居住を定め、邑に君となり、村に長となり、たがひに權勢を争ひ戰亂止むなき常暗の現代を招來したり。いかに智仁勇兼備の神將と稱へらるる廣宗彦といへども、今日のごとく敗亡の域に瀕せる聖地エルサレムの神政を恢興し、回天の大神業を遂行すること思ひもよらず、かつ聖地の勢力は至つて微弱にして、いつ顛覆の運命に遭遇するやも計りがたく、嵐の前の朽樹のごとき状態なり。このさい常世城の八王大神にして聖地の神政を根底より破壊し、おのれ取つて代り神政を管掌せむと計りたまはば、じつに燒鎌の敏鎌をもつて葱を刈り取るごとく易々たる業のみしかるに至仁至愛にして、世界の萬有にたいし、恵みの乳房を抱かしめむとして苦心焦慮したまふ、常世彦のごとき至誠至實の神司は、はたして何處にか之を求めて得るものぞ。我々は八王大神御夫婦の萬有に對したまふ平等なる大慈愛の大御心に對し奉りて感歎措くところを知らず、じつに八王大神は天來の救世主にして、國祖國治立命の股肱たるべき眞正の義神なれば、我らは世界永遠の平和のため率先して、八王神の聖職を退き一切の權能を八王大神に奉り、一天四海の平

和のさきがけを爲さむ。諸神司はいかが思召したまふや、現にわが肉身の娘春日姫は永く大神の近側に奉仕し無類の慈愛に浴し、至善至愛の神司にみませることを證言したるに見るも、一點八王大神を疑ひたてまつるの餘地、寸毫も發見することあたはず。行成彦の主張のごときは、ほとんど齒牙にかくるに足らざる、短見的愚論にして耳をかすの價値なきものなり。諸神司にして吾が言ふところをもつて是としたまはば、直ちに起立をもつて贊成の意を表したまへ」と陳べたて悠然として降壇したりける。常世姫以下二女は依然として壇上に立ち、その艶麗國色の譽れを輝かしまたり。八王八頭その他の國魂をはじめ、諸々の神人は何の言葉もなく、默然として呆氣に取られ、眼球を白黒に轉回させ、口をへの字に結び何人かの答辭を待ちまたりける。

このとき場の何處よりともなく、
「満場の神人たち、常世彦の奸策に陥るな、注意せよ。惡魔は善の假面をかぶりて世を惑はずぞ」

と大聲に呶鳴りしものあり。常世姫をはじめ列座の神人は、何神の聲なるかと四

隅を見渡したるが何の影もなかりき。常世姫は聲を震はせ息をはづませながら、諸神司にむかつていふ。

「諸神司、よろしく心魂を臍下丹田に鎮めよ。好事魔多し、寸善尺魔とはただ今のことなり。天下を混乱せむとする邪神妖鬼の言に迷はさること勿れ。良果には蟲害多く善神と善人には病魔常につけねらふ。神界をして永遠無窮に至治太平ならしめむとするこの神聖無比の議會を根底より破壊せむとして、數萬の惡鬼羅刹は場の内外に充滿せり。寸毫といへども油斷あるべからず。すみやかに諸神司は八王の撤廢に贊成されむことを望む」

と容色を柔げ笑を満面に湛へて述べ立てたり。諸神司は何ゆゑか口舌をしばられたるごとく一言をも發すること能はず、かつ全身麻痺して微軀とも動くを得ざりしがため起立して贊意を表すること能はず、ただおのおの目を圓くしてギロギロと異様の光を放つのみなりけり。

このとき壇上の八島姫は口をひらき、

「妾は南高山の八王大島別の娘なりしが、ある一時の心得ちがひより父母を捨て

て城内をひそかに脱出し、それより世界の各地を漂浪し、零落して四方を彷徨せし折しも、至仁至愛なる常世彦の部下に救はれ、言舌につくしがたき手厚き恩恵に浴しその洪恩譬ふるにものなく、日夜感謝の涙に暮れゐたりしに、思ひきや、勢力徳望天下に冠絶せる八王大神夫婦の殊寵を忝なうし、今やかくのごとく畏れおほくも姫命の侍女として、春日姫と相ならび一日の不平不満もなく近侍し、二神司の神徳の非凡にして大慈大悲の救世主にましますことを覺り、洪恩の萬一にも報いたてまつらむと寸時も忘ることなし。諸神司は妾のこの證言を信じて、一刻も早く原案に賛成され、もつて永遠平和の神と後世まで謳はれたまはむことを、天地の大神に誓ひて勧告したてまつる』

と述べ立つる。このとき會場の一方より常世姫に登壇の許可を請求せる八王あらはれにける。さて、この結末は如何になり行くならむか。

(大正一〇・一二・一七 舊一・一九 出口瑞月)

(第六章 第八章 昭和一〇・一・一九 於錦江支部 王仁校正)

第九章 大の字の斑紋（一五九）

常世姫の快諾を得て今や中央の高座に現はれたる神司は、南高山を主管する八王の大島別なりき。命は登壇するや否や、八島姫の全身に眼をつけ、頭上より足の爪先まで異様の顔色すさまじく熟視し、ややしばらく無言のまま壇上に突つ立ち瞑目をつづけ、思案に暮るるものの如くなり。満場の諸神人は大島別の態度の尋常ならざるに怪訝の念を湧起し、たがひに眼と眼を見合せめる。場内はあたかも水を打つたるごとく静寂の空氣漂ふ。

大島別はやうやく口を開いていふ、

「満場の神人よ、活目張耳して今回の會議を熟慮されよ。昨日の議場の怪といひ、種々合點のゆかざることのみ多かりしに、今日またもやその怪はますます怪ならずや先刻道貫彦の贊成説を吐露するや、たちまち中空に怪聲あり、…常世彦の奸策に陥るな、惡魔は常に善の假面を被るものぞ、諸人注意せよ…と呼ばはりしその聲は、果して何神の發聲なりしぞ。おそらくは現場に出席したまふ神司らの聲

には非ざるべし。我は之をもつて全く天津神の御注意の御聲なりと斷言して憚らざるものなり。現に見よ、いまこの壇上に立てる八島姫はいかにも我娘の八島姫に酷似して、その眞偽を判別せむとするは、現在の父たる吾においても、これに困しまざるを得ざるまでに克くも化けたり。これをもつて察するときは常世姫はじめ春日姫、八島姫の三女は、けつして正しきものにあらず。かならず妖怪邪鬼の變化なるべし。現に吾が娘八島姫は一度ある事情のために、城内を脱出し、諸方に彷徨せしことあるは事實なれども、忠實なる從者玉純彦の苦辛慘憺の結果、スペリオル湖の南岸において姫に邂逅し、ただちに姫を南高山にともなひ還りたれば、我は南高山にありて姫の孝養を受け日夜傍を放れしことなし。しかるに一應合點のゆかぬは、いま眼のあたり八島姫の堂々としてこの壇上に現はれ、小賢しき駄辨を振ひをることなり、吾は二柱の八島姫を産みし覚えなし。思ふに、この八島姫なるものは、妖怪變化の作用に相違なし。吾いまその正體を曝露し、諸神人の眼を醒し參らせむ」

と言ふより早く長刀を抜きはなち、電光石火の迅業に八島姫の首は壇上に落ちた

るかと思ひきや、八島姫はヒラリと體をかはし、悠然として直立し、微笑をたたへながら、

「父上よ心をしづめて妾が言葉を聞きたまへ。大事の前の小事、早まつて噬臍の悔を後日に貽したまふな」

と、泰然自若すこしの恐れげもなく述べたてけり。

大島別は八島姫の少しも動ぜざる、その態度にあきれ、やや躊躇の色見えたる折しも、玉純彦はまつしぐらに壇上に登り八島姫の前に立ちふさがり、言葉を荒らげ肩をそびやかし、眼を怒らせながら、

「汝は必定常世の國の邪神の變化なること一點疑ふの餘地なし。汝いかに巧みに變化して神人を誑惑せむとするも、吾一人のみは欺き得ざるべし。八島姫には他神人の知らざる特徴あり吾は常に姫に奉侍してその一部身體の特徴を知悉す、第一には額に巴形の斑紋なかるべからず、第二には左の肩のあたりに大の字形の紋あり、汝果して八島姫ならばその斑紋を明らかに吾が前に示して證明せよ」と言葉鋭く詰め寄れば、八島姫はカラカラとうち笑ひ、

「愚なるかな玉純彦、汝かくまで妾を疑ふならば、今その證據を顯はさむ」
と額に塗りつけたる白粉を、兩手をもつて擦りおとし、

「玉純彦これを見よ」

と額を突出し見せたるに、擬ふ方なき巴形の斑紋は歴然として表はれたり。玉純彦は眉毛に唾し眼をこすり、吾と吾が頬を爪もてつまみ、不審の眉をひそめて、八島姫を深く見つめてゐたり。八島姫はまたもや笑つて、

「いかに玉純彦よ、妾の妖怪變化に非ざること悟りしや」

と言ひながらクルリと背を玉純彦の方に向けたり。玉純彦はその後姿を首筋から足の下まで打ちながめ、長き舌をまき太き息を吐きながら、

「この畜生奴、よくも完全に化けをつたなあ」

と思はず叫ぶ。八島姫はやや聲をとがらせ、

「汝は主の姫女にむかつて無禮の雑言畜生奴とは何事ぞ」

と向きなほり柳眉を逆立て叱りつけたるに、玉純彦はその眞偽の判断に苦しみける。玉純彦は半信半疑の雲につつまれ壇上に諸神人とともに、無言のまま暫時突

立ち居たり。八島姫は、

「汝はこれでも疑ひを晴らさざるか」

と言ひつつ片肌を脱ぎ、左肩の大字の斑紋を示したるより、玉純彦はその場に平伏し無禮の罪を陳謝したり。

大島別は、初めて疑ひ晴れたれど、南高山にある、八島姫の身上についてふたび疑問を喚び起さざるを得ざりけり。第一の不審は、城内の八島姫には巴形の斑紋の有無に氣づかざりし故なり。玉純彦もまた巴形の斑紋の消え失せたるものと考へるたるが、いま目のあたり確固不動の證據を見て、南高山の八島姫を疑ふこととなり、大會議の壇上に我身の立てることさへも氣づかずありける。このとき南高山より大島別の後を追いつつ八島姫きたれりとの報告あり。ア、この判別は如何。

(大正一〇・一二・一七 舊一一・一九 出口瑞月)

第一〇章 雲の天井（一六〇）

南高山より八島姫來場せりとの急報は、諸神人の耳朶に、晴天の霹靂のごとくに轟きわたりけり。八島姫は盛装を凝らして、諸神人列座の前をはずかしげに一禮して通りぬけ、ただちに壇上に登りたり。ここに毫末の差異なき八島姫は二柱あらはれたるなり。このとき又もや、

「八島姫ここにあり」

と場の一隅よりまたもや同じ八島姫が現はれ壇上に登りける。衣服の色といひ、頭髮の艶といひ、面貌といひ、背の高さといひ、分厘の差もなきこの光景を見やりたる神人は、夢かうつつか、はた幻かと、互に眼をこすり頬をつめれども夢でもうつつでも幻でもなかりける。この時、

「モスコアの城主八王神道貫彦の娘春日姫來城あり」

との急報あり。諸神人はまたもや不審の眉をひそめみる際、悠然として入りきたる絶世の美人あり。美人は列座の神人に叮嚀に一禮し、ただちに中央の壇上に登

りたれば、春日姫はまたもや二人ならびたり。いづれを見ても花菖蒲、正非の區別つかざりにける。

この時、

「龍宮城に久しく出たまひし八王大神の妻常世姫御歸城あり」と報告する使神あり。

常世姫は顔色を變じていふ、

「常世姫は妾なり、何ぞ妾のほかには常世姫あらむや」

と絶叫する。このとき絹ずれの音しとやかに入りきたる女性は、常世姫そのままなりき。女性は列座の神人に一禮して直ちに壇上に登る。またもや二人の常世姫が現はれたるなり。大廣間の中央の高座は月雪花にも擬ふ二常世姫、二春日姫、三八島姫の美人立ならび、じつに立派なるものなりき。これを七柱の女神と誰いふとなく言ひふらす者ありける。

以前より現はれぬたる常世姫は柳眉を逆立て、

「汝いづれの邪神にや、かかる神聖なる議場に突然入りきたりて、妾と同様の姿

と變じ、この聖場を汚さむとするや。いでや汝が化の皮をぬぎ、正體を現はしてくれむ」

といふより早く、後の常世姫にむかつて組付けば、後の女神は聲を張りあげ、
「汝こそは眞の妖怪變化なり、今にその正體を露はし、神人の目を醒しくれむ」
といふより早く、細き白き腕を捲りて丁々發止と打ちすゑたり。

八王大神は從者道彦の急報におどろき愴惶として議場に走りきたり、常世姫以下女性のあまた竝立せるに呆れはて、いづれをそれと分別しかねて眼を光らせ、直立不動の體に七柱の女神の様子を凝視しむたり。常世姫は八王大神の姿を見るや、飛びかかつて泣きはじめたるに、またもや一人の常世姫は八王大神に飛びかかり泣きつく。春日姫は二人一度に八王大神にむかつて、

「妾こそは眞正の春日姫なり」

「いな彼は偽神なり。眞正の春日姫は妾なり、かならず見過まりたまふな」

と泣いて抱つかむとするや、一方の八島姫は、
「妾こそ眞正の八島姫なり、他は偽神なり」

□ いな妾こそ眞の八島姫なり」

□ いな妾なり」

と同じ姿の三柱の姫は、四方八方より八王大神を取りまき、一寸も動かさず。八王大神は五里霧中に彷徨するの思ひにて、眞偽の判別に苦しむ折しも、

□ 八王大神これにあり、偽神の八王大神に面會せむ」

と大音聲に呼ばはりながら悠々として入りきたり、中央の高座に登れば、八王大神は烈火のごとく憤り、

□ 汝何神なれば我が名を偽りて、この神聖なる議場を攪亂せむとするや、目に物見せてくれむ」

と、後來の八王大神にむかつて打つてかかり、八王大神と八王大神は互に鎬を削りて壇上に挑みあひ、終には入り亂れて前後の八王大神の判別を失ふに致りける。列座の神人は狐に魅まれたるとき顔して見入るばかりなりけり。たちまち中空に聲あり、

□ 常暗の夜の常世の國の常世彦、その妻の常世姫、それに従ふ八島姫、こんな不

末代まつだいの愧はぢを天地てんちにさらしたるなり。

ここに目覺めざめたる八王大神やつわうだいじん以下い満座まんざの神人かみがみは、第一だいいちに國祖こくそ國治立命こくわいはるたちのみことの認許にんぎよを得えざれば、何事なにごとも成就じやうじゆせざることを心底しんていより悟了ごれうし、第三回だいさんくわいの會議くわいぎよりは、天地てんちの大神おほかみにたいして祝詞のりとを奏上そうじやうし供物くもつを獻けんじ、神界しんかいの許ゆるしを得えて、その後のちに何事なにごとにも着手ちやくしゆすべきものなることを、深く感得かんとくしたりける。

(大正一〇・一二・一七 舊一一・一九 出口瑞月)

第一章 敬神けいしんの自覺じかく〔一六一〕

常世彦とこよひこをはじめ八百八十八柱はつひやくはちじふやはしらの神司かみがみは、天地てんちの大神おほかみの神慮しんりよに反はんし、律法りつぽふを輕視けいしし、この大會議だいくわいぎを開催かいさいし又は參列さんれつし、大神おほかみの神慮しんりよを怒いからせたてまつり、意外いぐわいの失しつ敗ばいを招まねきたるに悔悟くわいごの心こころを起おこし、ここに諸神司しよしんは大會議だいくわいぎの開催かいさいに先さきだち、まづ天地てんちの大元靈だいいげんれいたる天之御中主あめのみなかぬしの大神おほかみ一名大國治立尊おほくにはるたちのみことを奉祀ほうしし、山野河海さんやかかいの珍うまし物を

獻じ、大神の守護のもとに至誠至實の神聖なる大會議を開催せむことを期せずして感得し、天地の大神の畏るべきを自覺したり。天地の律法には、

『省みよ。恥ぢよ。畏れよ。悔い改めよ。克く覺れよ』

との五ヶ條の内面的戒律あり、これを的確に遵守せざるべからざること自覺したり。これぞまつたく大慈大悲の大神の、甚深微妙なる恩恵の鞭なりにける。

諸神人はここに翻然として前非を悔い改め、わが心胸に手をあてて反省し、各自の思慮の淺薄にして無智なりしを恥ぢ、天地主宰の大神の威嚴の犯すべからざるを畏み、邪は正に敵しがたき大眞理をおのづから覺り得たりけり。

八王大神は、ここに地の高天原なるエルサレムの聖地を蹂躪し、あはよくば漸進的に國祖の大神までも退去せしめ、みづから國治立命の職權を奪はむとする方法手段として、盤古大神を擁立して時を待つて盤古大神を押しこめ萬古不易的に八王大神の神政を樹立せむことを企ててゐたるに、今回の失敗に八王大神常世彦は本心に立復り、常世姫もまた夫とともに『悔い改め』の心をおこしける。ここに八王大神は、國祖の地位を奪はむとするの大陰謀のみは斷念したれども、國祖

を奉じてみづから聖地の宰相神たらむとするの目的のみは夢寐にも忘れざりける。
第二回の議席に現はれ、侃々諤々の雄辨を振ひ、満座の神人をして舌を捲かし
めたる春日姫と八島姫の二女性は、その實は白狐の高倉と旭なりき。二女に化し
たる白狐は、大道別の周到なる妙策に出でたるものにして、いはば邪神の野望を
破壊せむための反間苦肉の神策にして、敵本主義の謀略に出でたるものなりき。
この白狐の今後の行動こそ實に面白き見ものなるべし。

いよいよ第三回の會議を開かむと、まづ第一に常世城の大廣間に莊嚴なる祭壇
は設けられ、海川山野の種々の神饌を供進せむと衆議の結果、宮比彦を齋主とし
美山彦その他は齋官として神事に奉仕し、目出度く祭典は執行されたるが、この
とき天空澄み渡りて一點の雲片もなく、微風おもむろに吹ききたつて温かに、鳥
は艶聲をあげて樹木の枝にうたひ、得も言はれぬ芳香四邊をつつみ、常世の春の
長閑な景色はさながら、五六七の神政を地上に移寫されたるかと疑はるるばかり
なり。

南瓜に目鼻をつけたるとき、不景氣な神人の顔も、蕪や、瓢箪や、茄子、長

瓜、田芋などに目鼻をつけたるとき、醜惡なる八百八十八柱の神人の面色も、この時のみは、實に勇氣と希望に充ち、華やかなりけり。神々は心の奥底より、無限の愉快と喜悅とを感得したりける。大本神諭に、
「心の持ちやう一つによりて顔の相好までが變るから、心の持ちやうが一番大切であるぞよ」

と喝破されたるは實に至言といふべし。

いよいよ第三回目の會議は、諸神人喜悅歡呼の間に、もつとも莊嚴に靜肅に開かれける。諸神人は各自設けの席に着きぬ。この度は前回のとき野天泥田の會議にあらずして、眞の常世城内の大廣間なり。神人らのうちには、前日の泥田に懲りてか、足をもつて座席を念いりに踏みてみるもの、手を伸ばして議席を撫でまはし、議場の眞偽を試しみるものありき。中には吾と吾身をつめりて痛さを感じ、やつと安心の胸を撫でおろすもあり。どうやら今度は、眞正の會議場であるらしいと自語するもありぬ。羹に懲りて鱈を吹くといふ譬へは、かかる時のことを指したるものなるべし。神諭に、

『國會開きは人民が何時まで掛りても開けは致さむぞよ。神が開かな開けぬぞよ。神が開いて見せうぞよ。改心なされ』

とあるは實に千古不易の至言なり。太古の神人さへも、國祖の御許しなくしては、かくのごとき失敗を演出するものを、況んや罪惡の淵に沈みたる、體主靈從の人間の開く會議においておや。猶更の事なりと云ふべし。

常世彦は、まづ神前に進み、恭しく拜跪して神言を奏上し、靜かに中央の高座に登り謹嚴の態度にて諸神人席に眼を配りていふ。

『吾らは成功を急ぐのあまり、神に祈願したてまつり、神助の下に神聖なる議案を討究することを忘却したるがために大神の神怒に觸れ、議場はたちまち混亂に混亂の慘状を現出し四離滅裂の苦き經驗を嘗めたり。いまより吾らは諸神人とともに、悔悟して世界平和のため誠心誠意をもつて終始せざる可らず。今日までの二回の會議は怪事頻々として湧起り、一つも決定にいたらずして幕を閉ぢたり。これ全く神慮に叶はざるがための結果に外ならざれば、今より改めて神聖なる會議を神助の下に開かむ』

と宣示し、諸神人は拍手して八王大神の宣示を迎へたり。

このとき、天井には微妙の音楽聞え、天男天女は天の羽衣を春風に靡びかせながら、舞ひ遊び、以前のすさまじき猛虎、悪狐、獅子の咆哮、怒號の悪聲や、天の鳥船の轟き渡る示威的光景に比ぶれば、天地霄壤の差あることを覚えしめける。

(大正一〇・一二・一七 舊一一・一九 出口瑞月)

第一二章 横紙破り(一六二)

常世城の大廣間の中央の高座には、八王大神常世彦泰然として現はれ、ふたたび神界永遠の平和確立のため、八王神の聖職を撤廢し、神人各自の武装を除却すべきことを提案したり。

大自在天大國彦の重臣なる大鷹別は、登壇するや否や満場の諸神司に向つて、八王大神の提案にたいし、縷々數萬言を費やしてその提案を稱讚し、かつ、

「かくのごとき事理明白なる天來の福音にたいして、異議をはさむ神司ありとせば、我らは神界平和の攪亂者としてこれを排斥せざる可らず。諸神司はいづれも公明正大にして、天下の平和を心底より好愛さるる仁義の方々なれば、八王大神の大慈眼の發露ともいふべき今回の提案に對しては、滿場一致もつて本會議の目的を達成すべく努力されむは必定なりと、吾々は堅く信じて疑はざる次第なり。願はくば賢明なる諸神司の一致的贊成を世界平和のために熱望して止まざる次第なり」

と頭上より大風呂敷をかぶせ有無を言はせず、一瀉千里の勢を以てこの議案を疾風迅雷耳を覆ふに暇なく通過せしめむとしたり。

列座の諸神司はまたもや亂暴極まる議案の提出と、大鷹別の強要的辨舌に不快の念をおこし滿場寂として、一柱の立つて應答辨駁するものなく、いづれもその突飛なる提案に呆れ果て面上にも、形容しがたき不安と公憤の色ただよひぬ。中には隣席の神司と眼と眼を見合せ、その横暴に舌をまくものもありける。常世彦をはじめ、大國彦は苦蟲を噛み潰したる如き六ヶしき面構へを高座に曝して、形

勢いかんと固唾を呑み手に汗を握りて、何人かの發言を、もどかしげに待ちぬたり。

このとき天山の八王齋代彦は八王大神にむかひ、發言權を求めながら兩腕を振りつつ登壇したれば、諸神司の視線は期せずしてその一身に集注したり。

齋代彦は壇上に現はれ咳一咳し、右の手の掌をもつて鼻先を左より右に擦りあげ、そのまま右の眼瞼から眼尻にかけてツルリと撫で次で、洩を右の手の甲にてかみ、ただちに右の乳の下あたりの着衣に無造作に拭きとり、上唇を山形に人中の下に押し上げ配列不整なる赤黒き齒を剥きだし、平素得意の能辨を活用するはいまこの時なり、との誇りを面に遺憾なく表白したりける。元來齋代彦は磊落不羈の勇者なり。八王大神の大勢力も大自在天の權勢力も彼にとつては放屁の一つとも思ひをらず。またもや鼻をこすり上げ眼を撫で洩をかみ、その手を乳の方で拭ひながら、雷聲を發していふ。

元來八王大神かれ何ものぞ、大自在天とは彼れ果して何ものぞ。そもそも狐の屁和怪疑なるものは、天地神明の大御心に出でたるものに非ずして、神にあ

らざる神の發企に成れるものなれば、我らをはじめ諸神司は、互にその蘊蓄をか
たむけて各自の意見を吐露し正邪理非の根本を討覈し、和衷協同して、もつて世
界永遠平和の基礎を確立せざるべからず。しかるに何んぞや、八王大神の強要的
宣示といひ、大自在天の部下なる大鷹別の傍若無人の強壓的暴言といひ、殆んど
巨石を以て頭上を打ち碎くに等しき、その言辭論説の横暴無道なる、どこに和親
協同の精神がある。平和を懇望するの至誠果していづれにあるや。諸神司よ柔順
と隱忍と盲従とは決して平和を招來するものに非ず、諸神司は本會議に對しては、
無限絶對的の權能あり、しかるに何を苦しみてか諸神司らは斯かる大問題に對し
て沈黙を守らるるや。諺にいふ、出る杭は打たれ、喬木は風にもまる、如かず退
いて我身の安全を守らむ、とするに如かずと卑怯の精神に抑壓されたまふに非ず
や、左もなくば八王大神ごとき神司の勢力に恐怖されしに非ずや。八王大神も神
司なれば、諸神司もまた同様なり、大自在天の權威にして、いかに強大不可犯の
趣きあるごとく見ゆるとも、宇宙の大元靈たる大國治立命の、無限絶對の神威と
慈心に比ぶれば、象にたいする蚤の比較にも如かず。我らは大神の嚴命にしたが

ひ、天山の八王として神明の示教を奉戴し、普く神人を教化し扶掖す。これにた
いして蝨にも比べがたき微々たる八王大神、または大自在天を恐るるの理由あら
むや。我らの王は生ける眞正の獨一神なり。諸神司よ、宇宙はいかに廣大にして
無邊なりといへども、畏るべく、信ずべく、親しむべく、愛すべきものは眞誠の
活ける神ただ一柱あるのみ、何んぞ八王大神らの願使に盲従し、以て眞正の神の
聖慮に背かむや。諸神司よろしく自己の天授的聖職の神聖不可犯なる理由を反省
され、神にあらざる神の壓制的宣示に盲従すること勿れ。大宇宙にはただ獨一の
眞神なる大國治立命あますのみ。しかるに常世彦はみづから稱して、王の王たら
むとし、八王大神と稱す、眞正の神ならぬ身として八王大神とは僭上至極、天地
容れざるの大逆罪なり。我は今より八王大神に尊稱を奉らむ、即ち八王の【お】
は八頭八尾の大蛇の尾にして、大神を臺陣と敬稱せむ、諸神司の贊否いかん
と辨舌水の流るるごとく説き去り説き來つて、平然として一座を見渡したり。満
座の神司らは齋代彦の痛快なる演説に溜飲を下げ、元氣は頓に加はり、各自肩の
そびゆるを覺えざる程なりき。八王大神の部下の邪神は喧々囂々として嘲罵し咆

哮し、この演説を極力妨害せむとせしに、齋代彦はそれらの妨害も嘲笑も馬耳東風と聞きながし、滔々として所信を述べ了り、右手をもつて鼻と目をこすり、最後に着衣の袖にて洩の手を拭ひながら悠々として降壇し自席に着きにける。
(大正一〇・一二・一八 舊一一・二〇 出口瑞月)

第一三章 再轉再落(一六三)

このとき八王大神の部下なる八十柱彦は、胡麻煎型の禿頭に湯氣を立てながら、發言權を請求して登壇し、右手を高く右耳のあたりより、クルリと左頬部を撫で廻し、その手を胸のあたりに抱へるやうな招き猫よろしくといふ恰好で一寸押へ、ややうつむきつつ頭を前方に突きだし、蚊の鳴くやうな齒切れのせぬ、細い肝聲を臍の上方より搾りだし、乞食が物を貰ふときの姿勢よろしく承り腰になりて、
「ア、満場の諸神司よ」

と一言を發したまま、今度は腹をやや前方に突出し、左の手で自分の腰を三ツ四ツ打ちながら衝立つかと思ふと、またもや腰を曲げて前方に頭をうつむけ、幾回ともかぎりなく繰り返し繰り返し狂態を續けたり。あたかも機織バツタの化物然として滑稽なる態度を晒しける。

神人の中には可笑しさに耐へかねて、クツクツと吹き出すものさへありけり。今まで齋代彦の痛快なる演説のために緊張し切つたる議場は時に取つての實に一種の愛嬌にぞありける。

「八十枉彦といふは、その名のごとく心の八十色百種に曲つてゐるかと思へば、頭も腰も素敵滅法界に曲つた奴だ」

と小聲に囁く神人もありき。八十枉彦は妙な手付きをしながら、憤然として齋代彦の言にたいして大々の攻撃を加へ、大勢を挽回せむとし、矢庭に登壇はしたものの、にはかに舌が釣り上りしたために、ただ口ばかりをパクパクさせて上唇と下唇との衝突運動を開始したるのみ。衣川の辨慶よろしくといふ行體にて、壇上に機織バツタの曲藝を演じ、諸神司を抱腹絶倒せしめたるのみ、一言半句も得出さ

ず、またもや右の手を右耳のうしろより左頭部にクルリと撫で廻し、ついでに頭を三ツ四ツガシガシと搔きながら、満座の中で赤恥まで「かいて」手持無沙汰に降壇し、こそこそとその珍姿怪體を隠したりにける。

大自在天の部下なる蚊取別は、八十柱彦の失敗に憤慨し、會稽の恥辱を晴らさばやと焦立ちながら八王大神にたいし發言の許可をもとめて、肩を斜にゆすりながら傲然として登壇したり。

蚊取別にもまた一つの面白き癖ありき。満場の神司に向つて一禮せむとし、まづ吾が額をあたかも蚊の止まれるを打ちたたくとき手つきにて、ピシヤリと右の手にて打ちながら、屁放り腰になりて前方を見渡し、大文字屋の福助に菊石をあしらつたごとき御面相にて大口を開き、満場を睥睨し、

「ア、満場の諸神司よ、諸神司は齋代彦の驕慢不遜なる言動にたいしていかなる御感想を」

と、ここまでいつて、またもや額をピシヤリと一つ打ち、腰をかがめ、

「承はりたし、畏くも大宇宙の大元神たる大國治立命の神靈を奉祀し、神明の」

と、ここまで云つてまたもや額を右の手でピシヤリと音をさせ、屁放り腰を後に突だしながら、

「御許容の下に開かれたる神聖なる」

とここまで云つては、またもや止まつた蚊をたたくがごとき手つきにてピシヤリとたたき、

「大議場を攪亂せむとする惡逆無道の邪神なり。我々は議場の神聖を保つために先づ第一着手として」

とここまで云つて、またもや額をピシヤリと打ちたたき、調子にのつて吾と吾が鼻柱を拳骨を握りかためて打ちたたき、眼から火を出し昏迷して壇上より眞逆様に顛倒し肱を折り、

「イイイ痛つたーい」

と左の手で右手の肱を撫で、涙をボロボロとこぼして男神に似合ず、ほへ面をかよく可笑しさ、神人らは周章てて之を擔ぎ場外に持ち運びけり。

ここに八王大神の一味なる廣依別は、發言の權を求めて、勢よく大手を振つて

登壇したるが、廣依別にもまた一つの妙な癖ありき。彼は演壇に立つや、兩手を背後にまはし弱腰の邊にて結び合せ、反身になつて壇上を前後左右に往來しながら演説を始めたりしが、少しく油が乗り來ると、その往來はだんだん激烈の度をまして、終には兩手を離し、兩の手に拳骨を握り、一言云つてはポンと卓上を亂打する惡癖あり。

廣依別はその名のごとく、壇上を廣く往來せねば演説の出來ざる奴なり。彼は列座の神人に向ひ、お玉杓子に目鼻をあしらつた如き凹みたる顔に、田螺のごとき丸い眼玉の持主なるが、彼はその丸い眼をギョロつかせ、右の手の拇指を以て左の眼をこすりながら、

「満場の諸神司よ。吾こそは此の廣大なる常世の國の常世の城主、もつたいなくも天下に勢力徳望ならびなき八王大神常世彦、常世姫の最寵最愛の從臣にして、常世城はおるか常世の國は未だおるか、トコトコまでも名の轟いた常世彦の床の間近く侍りたてまつる智勇兼備の勇者なり。世の諺にも勇將の下に弱卒なしとは宜なる哉言や。諸神司よ、今度こそは耳の穴の掃除をなして、餘が明智の言を聞

かれよ[㊦]

と傲然^{ごうぜん}として鼻^{はな}うごめかしつつ述べ立てながら、例^{れい}の癖^{くせ}を發揮^{はつき}して壇上^{だんじやう}を前後^{ぜんご}左右^{さゆう}に往來^{ゆきき}しつつ、卓^{テーブル}を頻^{しき}りに打^うちながら、グルグルと速度^{そくど}を早^{はや}めて舞^まひ狂^{くる}ふ。

神司^{かみがみ}らは廣依別^{ひろよりわけ}が、蚊取別^{かとりわけ}の二^にの舞^{まひ}を演^{えん}ずるとき失態^{しつたい}を演^{えん}出^{しゅつ}せざらむかを、汗^{あせ}を握^{にぎ}つて危^{あやぶ}み、その身體^{しんたい}のみを凝視^{ぎようし}し居^ゐたるが廣依別^{ひろよりわけ}は、その演説^{えんぜつ}に油^{あぶら}がのり來^きたり、いよいよますます猛烈^{まうれつ}に舞^まひ狂^{くる}ふその態度^{たいど}を、神人^{かみがみ}らは半笑^{はんせう}半危^{はんき}の態^{たい}に打^うち眺^{なが}め居^ゐたる。廣依別^{ひろよりわけ}は圖^づに乘^のり舞^まひ狂^{くる}ひ、愚論^{ぐろん}迂説^{うせつ}を連發^{れんぱつ}しながら、踏^ふみ外^{はつ}して壇上^{だんじやう}より轉落^{てんらく}し、蚊取別^{かとりわけ}同様^{どうやう}に右^{みぎ}の肱^{ひぢ}を折^をり挫^{くじ}き、神司^{かみがみ}らに擔^{かつ}がれてまたもや場外^{ばげつぐわい}に運^{はこ}ばれにけり。斯^かくも邪説^{じゃせつ}を吐^はく邪神^{じゃしん}の不可思議^{ふかしぎ}なる運命^{うんめい}に遭^{さう}遇^{ぐう}するの悲劇^{ひげき}は果^{はた}して何^{なに}もの所爲^{しよゐ}なりや。量^{はか}り知^しるべからざるなり。

(大正一〇・一二・一八 舊一・二〇 出口瑞月)

第一四章 大怪物 (一六四)

ここに大島別の從臣たる玉純彦は、八王大神の許しを得て威勢よく登壇し、笑顔を湛へながら満座の神司の首を一夕實檢におよび、兩肩をわざと聳やかしながら、

「ア、満座の神司よ、耳の穴の清潔法を執行し、風通しを良くして以て、吾が述ぶるところの高論卓説を謹聽せられよ。我こそは、南高山に隠れなき雷名天地に轟き渡る八王神大島別の第一の重臣のその從臣、又その從臣なる玉純彦とは我がことなり。日は照るとも曇るとも、常世の城は焼けるとも、南高山の名城さへ無事ならば毫も痛痒を感じず、笑つてこれを看過するといふ鷹揚至極の大英傑大膽者の玉純彦なるぞ。諺にも勇將の下に弱卒無し、臍の下に乳房なし、口の下に眼なし、ただ眼と口の間には、かくのごとき高き鼻あるのみ」

と言ひつつ右手の指を固めて拳となし、その拳を吾鼻の上におき、左の手の指を固めて前の如く拳骨を造り、右手の上に乗ねて、またもや右の手を抜いては左の手の上に重ね又左手を抜いては右手の拳の上に重ね、交る交る手を抜きては重ね腕を上前方に伸長して、

『我はかくの如き鼻の高き英雄なれば、南高山の鼻形役者と持てはやさるる、花も實もある尊きものなるぞ。花の都の花と謳はれしは、智仁勇兼備の譽を恣にする吾玉純彦のことなり。吾素性を聞いて膽を潰し、壇上より轉落し、肱を折り挫かざる様、登壇さるる諸神人にたいし忠告を與ふ』
 と、廣依別もどきにさも横柄にかまへ、またもや以前のごとく兩手の拳を交る鼻の先に高く重ねながら、手を振り足踏みとどろかし、品よく面白く踊りながら、即座に口から出まかせの歌を作りける。その歌、

狐こン狐こン癡奇珍狐こン癡奇珍
そこよ 常世この國くにの常世彦こ 常世この姫ひめの狐こン膽たんで
 ヤツト開ひらけた狐こン怪くわいの 眞怪しんくわい屁はい和わのそのために
 八百八十八柱はつひやちじふやしらの 寄よりに寄よつたる癡ち甚じん幽ゆう
 慘得さんとく犬尾けんびの誤醜ごしう怪かい 恐おそれ入谷いりやの鬼子きしも母神ぼじん
 鬼おにや惡蛇あくじやの御念佛ごねんぶつ アカンアカンと鳴なる鐘かねは

彌勒三會の鐘鳴らで

地獄の門を押し開く

合圖とかねてきく耳の

耳と舌とは極樂へ

上る壇上は針の山

足竝痛く揃はぬは

妙癡奇珍の珍怪議

泥田や野天で法螺を吹く

尾も白狸の腹つづみ

神の面には泥をぬり

どこもかしこも泥田坊

泥つくどんどん泥まぶれ

泥に酔ふたる鮎のごと

泥吐かされて笑はれる

狐んな馬鹿げた失態は

常世の何處を探しても

またと有るまい赤愧と

あたまを搔いて仰天し

見れば天には天の川

數千萬の星の影

ほしいほしいは神界の

總統權と咽鳴らす

猫を被つた常世彦

常夜の暗の常世姫

さぞや心は細引の

禪のやうに右左

外れた目算桁違ひ

春日の森の古狐

喰へて振られたモスコの道貫彦の面の皮
 かはいかはいの春日姫 長い尻尾に尻の毛を
 抜かれて八王の聖職を 捨てるといった腰抜けの
 尻からはげて泥の中 なかぬ斗りの顔つきで
 あつもの食つて懲りこりし 鱧を吹いた可笑しさよ
 南高山は名にし負ふ 難攻不落の鐵城と
 天下にほこりし八王の大島別の尻の毛は
 八島の狐につままれて 一本も残らず抜き取られ
 城よりか己れ眞先に あばずれ姫の春日女の
 愛におぼれて無残にも 自ら八王の聖職を
 落す盲目の常夜城 野天の泥田に落されて
 からしが利いたか雙の眼に 涙落した可笑しさよ
 禿げたあたまは光れども 心の魂は光りなし
 早く身魂を研ぎあげ 玉純彦の神となり

聖地の神に謝罪せよ
それが厭なら我前に

三度も四度も尻まくり
ワンワンワンと聲高く

ほえて廻れよ禿八王
時世時節と云ひながら

齋代の彦の鼻神は
鼻をこすつて眼をこすり

寝とぼけ顔の寝言をば
百萬陀羅尼と蝶舌り立て

口先ばかりの大神樂
獅子の舞ならよからうが

奇想天外天山の
八王の神の唐威張

心の底はドキドキと
轟き震ふた齋代彦

何を柚やら蜜柑やら
キンカン枡で量るやら

はかり知られぬ底ぬけの
池の鮒とぞならにやよい

生血を搾り吸ひに来る
蚊取別神壇上に

現はれ出でて灰猫の
手水を使ふその恰好

ツルリと撫でた黒い顔
ピシヤリとたたいて鼻柱

吾と吾手で打ち懲らし
眼から火を出し肱を折り

痛つたいいたいと男泣き
氣の毒なりける次第なり

八十柱彦の腰まがり
心も鼻も首筋も

能く能く揃ふた曲津神
機織バツタの化物か

稀代の珍姿怪體を
もれなく高座に曝したり

廣依別のウロウロと
前後左右に壇上に

大法螺吹いて舞ひ狂ひ
蚊取の別の二の舞を

演じてまたもや赤恥を
かいてかかれて場外へ

投げ出だされし愚さは
餘所の見る目も憐なり

餘所の見る目も憐なり
狐ン狐ン癡奇珍狐ン癡奇珍

満場の諸神司は玉純彦の面白き節にて謳ふその美聲に酔はされ、神聖なる議席にあるを忘れて、ただ口のみ、あんぐりとし耳を澄まし、目を見張りゐたりける。ふと面を上ぐれば、今まで玉純彦と見えしは謬りにて、仁王にまがふ骨格たたくましき荒神は、鏡のごとき兩眼をカツと見開き、太き鐵棒をひつさげ壇上に衝立

ちながら、八王大神の方を見つめて火焰のごとき舌を吐き出しチリチリと攻めよるにぞ、さすがの常世彦も満座の諸神司もこの光景に荒膽をくじかれ、顔色土のごとくに變じ、わなわなと地震の孫の火事見舞のやうに震ひ出しける。この荒神は次第々々に煙のごとく成りて消えたまひける。日は常世の西山に春きて、早くも黄昏つぐる長鳴鶏の聲とともに、第三日目の大會議はまたもや有耶無耶に閉ぢられたりにけり。玉純彦は依然として此の間自席に眠りを貪りゐたるなり。そのため、この光景を夢にも知らざりける。はたして何神の化身なりしぞ。この怪物の正體はいつの日か氷解さるるならむ。神諭に示されたる三千世界の大化者とは如何なる神にましますか、たいてい推知し得べきなり。

(大正一〇・一二・一八 舊一・二〇 出口瑞月)

第一五章

出雲舞(一六五)

天氣晴朗にして蒼空一天の雲片もなく、東風徐るに地上を撫で擦り、ロツキー
山は新装をこらして高く雲表にそびえ、満山満野の草木はおのおのその艶麗を競
ひ、その枝葉は黄紅、白紫、赤黒、青緋の花を咲かせ、芳香馥郁として、宛ら工
デンの花園にさも似たり。百鳥羽ゆるやかに翱翔し、蝶は花をたづねて四方の原
野に翩翩とし、陽炎のまたたき悠悠として春風になびき、神人みな喜悅の色に満
つ常世の長閑な春の光景、天地神人をして思はず歌ひ舞ひ踊らしめむとするに致
る。かかる心地よき空に巍然として聳えたてる常世城の大廣間には、前日の失敗
に省み、八王大神をはじめ各山各地の八王、八頭、國魂の數々は各自の議席につ
いた。八王大神は温顔に笑みを湛へて例のごとく、中央の高座に常世姫、春日姫、
八島姫を随へ、肅々として登壇したり。末席より登壇を請求したるは出雲姫なり
き。出雲姫は長閑なる常世の春を讚美し、
『これぞ全く八王大神盛徳の致す所にして、昨日に變る今日の空の色、心にかか
る叢雲も無し。嗚呼これ天國か、淨土か、將た樂園か。ア、かかる尊き瑞祥を妾
は祝ひ奉らむ』

と、手を拍ち節面白く歌ひ出した。その歌、

至美と至樂の神の世は

百千萬歳億兆の

月日を経るも變らざれ

神の經綸は天地の

あらむ限りは常永に

動かざれども空蟬の

世は紫陽花の七變り

變り果てたる今の世も

昔も一度はこのごとき

瑞祥至慶の世ありけり

常世の國の常世彦

常世の姫は何ものぞ

尊き神の裔なれど

心の空の曇り切り

天足と胞場の御魂より

生れ出でたる八頭

八尾の大蛇の邪靈や

金毛九尾白面の

常世の惡狐に魅せられて

體主靈從の目的を

達成せむと執拗に

聖地聖城蹂躪し

イスカの嘴の喰ひ違ひ

是非なく常世へ逃げ歸り

暴威を振るひ四方山の尾の上に守る八王や

國魂司や諸神司を常世の城に甘言を

もつて誘なひ召び集め集まる八王八頭

國魂その他の神人の數嘘は八百餘柱の

頭顱の光ピカピカと甚く輝く稻妻の

またたきする間も長の日の常世の城に神集ひ

集ひて議る眼目は八王大神常世彦

永い奸計を達せむと千々に心を碎きたる

その甲斐ありや有難や常世會議は常永に

和親破壊の魁となり渡らひて雷の

轟くばかり四方の空海の底まで破れ鐘の

ひびき鳴戸や瀬戸の海かへて干す世はありとても

常世の國のこの會議松の嵐となりぬべし

松の嵐や浪の音聲を限りに天地の

神かみに救すくひを祈いのる世よは

ア、まだ遠とほき常とこ暗やみの

常とこ世よ會わい議ぎぞ頼たのみなき

頼たのみなき世よに杖つゑとなり

力ちからとなるは天あめ地つちを

造つくりかためし國くにの祖おや

國くに治はる立たちの神かみのみぞ

神かみは議ぎ場やうに祭まつれども

許ゆるし無なければ空からの宮みや

常とこ世よの神かみのからくりは

見みよみよ今いまに根ね底そこより

くつがへされむエルサレム

聖せい地ちを守まもる天てん使し長ちやう

廣ひろ宗むね彦ひこの執とり成なしを

威ゐり力よくに任まかせ無む視ししたる

報むくひは嚴きびしく眼まの當あたり

國くに治はる立たちの神しん力りきに

打うたれて轉ころぶ神しん人じんの

八や十そ枉まが彦ひこや蚊か取とり別わけ

廣ひろ依より別わけの三さんの舞まひ

八や王わう大だい神じん村むら肝ぎもの

心こころを洗あらへ神かみの前まへ

心こころを洗あらへ神かみの前まへ

容よう姿し端たん麗れいにして一いっ種しゆの威ゐ嚴げんを具そなへたる出いづ雲も姫ひめは、衆しう神しん司しん環くわん視しの壇だん上じやうに長ちやう袖じゆうしと

やかに舞まひ歌うたひける。

(大正一〇・一二・一九 舊一・二二 出口瑞月)

(第九章 第一章 第五章 昭和一〇・一・二〇 於日奈久町泉屋旅館 王仁校正)

第三篇 正邪せいじゃ混交こんかう

第一六章 善言ぜんげん美辭びじ (一六六)

出雲いづも姫ひめは口演こうえんに代かへ優雅いうがと、皮肉ひにくとの混交こんかう歌うたを歌うたつて、自己じこの憤怒ふんどと、所信しよしんとを遺憾あかんなく、諸神しよしん司しんの前まへに訴うったへたるにぞ、常世とこよひ彦ひこ、常世とこよひ姫ひめは心中しんちゆう甚はなだ面白おもしろからず、冷然れいぜんとして出雲いづも姫ひめの歌うたを聞きくともなしに聞きき入いりにける。

凡て歌は天地神明の聖慮を和げ、萬有に陽氣を與へ、神人の心魂を照り明かす言靈の精華なり。ゆゑに常世彦もこれに向つて憤怒を發し、叱責するの餘地無かりしなり。

現代の人間同士の會議は、すべて言論のみを用ゐ、決して歌なぞの風雅の聲に耳を藉すものはなく、却つてこれを禁止するにいたれり。それゆゑに現代の會議は何事にも口角泡を飛ばし、眼を釣り爭論の花を散らせ、鎬をけづりて快哉を叫び、如何なる問題に關しても言葉冷たく尖どく不平不満の間に優勝劣敗的多數決てふ、衆愚本位の議決に甘んじ居らざるべからず。秋津島浦安國の神國の遠き昔は言靈の幸ひ、助け、天照り渡り生ける國にして、善言美詞をもつて相終始したりしに、最早この時代は、天地神明の大道なる言靈の應用も亂れ亂れてつひにはその跡を絶つに至れり。今日にては神人が優雅にして高潔なる歌をもつて、その意志を述ぶるもの甚だ尠く、ただ上位の神人の間にわづかに行はれ居たりける。ゆゑに今回の常世の會議においても、神人の自由にまかせ、直接の言辭によるものと、單に歌のみに依つて意志を表白するものと、言辭と歌とを混合して口演す

るものとありしなり。言靈の清く朗かなる神人は、凡て和歌によりて難問題を解
決せむと努力したりける。

ここに常世姫は、出雲姫の意見表示の歌にたいして、答歌を歌はねばならぬ破
目となりければ、常世姫は長袖を壇上に曳摺りながら、聲音清く滑かにその主張
を歌ひける。その歌、

天地を造りかためし大御祖 國治立の大神の

千々の恵に生れし國 國とふ國は多けれど

神とふ神は澤ませど 眞の神は一はしら

神の造りて神の住む 常磐の松の生ひ茂り

色香妙なる白梅の 咲きて賑ふ神國は

常世の國を餘所にして 尊き國はあらざらめ

常世の國はとこしへに 開け榮えて天の下

四方の國々島々も 東の空ゆきらきらと

輝き昇る朝日子の

光と共に明けく

治る國は天地の

その眞秀良場や常世國

常世の國の空高く

そそり立ちたるロツキーの

山よりたかきそのほまれ

空行く雲も憚りて

避くる斗りの大稜威

常永に照る日の常世彦

心は清く身も清く

雪より清き常世姫

常夜の暗を照らさむと

赤き心をふり起し

世の叢雲を拂ひつつ

千々に思ひを筑紫瀉

深き恵も不知火の

波に漂ふ神人の

苦しみ叫ぶ聲あはれ

あはれを餘所に見捨かね

ここに八王の大神は

山より高く海よりも

深き恵の神の露

諸々の千草にそそがむと

神と親との心もて

開きたまひしこの集ひ

集ひたまひし山と野の

つかさと居ます八王の

神かみに仕つかふる八頭やつがしら

國魂くにたまがみ神かみや百ももの神かみ

集あつまる數かずは八百柱やほはしら

八十八柱やそやはしらの眞心まごころを

一ひとつに協あはせ活はたらきを

一ひとつに固かためて天あめの下した

四よ方の醜しこく草さ薙なぎ拂はらひ

はらひ清きよめて天あめに坐ます

天あめの御柱みはしら神かみの前まへ

國治立くにはるたちの知しるしめす

豐葦原とよあしはらの瑞穂國みづほくに

いや常永とこしへに平たひらけく

安やすく治をさめて浦安うらやすの

神かみの御國みくにを守まもらむと

常世とこよの城しろの神集かむつどひ

先まづ八王やつわうの聖職つかさをば

科戸しなごの風かぜの朝あさなさな

靈霧たまきり四方よもに吹ふきはらひ

天あめ明あきけく地清つちきよく

高たかき低ひくきの差別けじめ無なく

親おやと兒このごと親したしみて

神かみの惠めぐみを嬉うれしみつ

治をさまる御代みよを松まつばかり

時ときじく薰かをる白梅しらうめの

世よは照妙てるたへの神かみの國くに

開ひらく常世とこよの神集かむつどひ

かくも尊たふとき神人かみがみの

清きよき集つどひを怪あやしみて

きたなき心と言擧し
空に湧き立つ出雲姫
常世の神の赤心を
うたがふ胸の雲霧と
神の定めしこの度の
言問ひ和ごめ天津神
國治立のみこころに
叶ひ奉れよ百の神
これぞ常世の願なり

心にかかる黄昏の
暗き御魂の戸を開き
諾ひ神と國のため
暗の戸張を引上げて
集ひの功すくすくと
國の御祖と坐しませる
叶ひ奉れよ百の神
これぞ常世の願なり

斯くうたひて列座の神司に一禮し、
今回の八王大神の救世的提案に奮つて賛成されむことを望む
と優しき花の唇を閉ぢ、壇上なる己が設けの席におもむるに着きにける。

(大正一〇・一二・一九 舊一一・二一 出口瑞月)

第一七章 殺風景（一六七）

さすがは稚櫻姫の娘にして、智勇兼備の常世彦の妻だけありて、かかる紛糾混
亂せる議場の猛烈なる反対派の神たちの反駁も、攻撃も、突喊もほとんど鎧袖一
觸の感じも抱かざるごとき悠然たる態度をもつて、よく胸中の野心と不満とその
希望を、優雅なる歌もて遺憾なく表白し、諸神人の心膽を柔げ、且つその大度量
に敬服せしめ、反対側をして一言一句を挟むの餘地無からしめたる手腕は實に天
晴なり。あたかも清風爽々として巷塵をおもむるに吹き散らして一片の埃影をも
止めざるの概ありき。

満座の神人は常世姫の堂々として動かず、悠悠として騒がず焦慮らず、小兒に
たいする大人のごとく、綽々として餘裕ある長者の態度に心膽を吞まれ、一柱と
いへども立つて之を反駁する神人なかりたり。

この時、モスコの從臣森鷹彦は飄然として自席より身を起し、八王大神に向
つて發言權を請求し、骨格衆に秀でたる仁王のごとき巨軀を提げ、足早に一步一

歩場内をヤツコスの六方踏みしごとき調子にて、節くれ立つた兩腕に拳を固く握り、腕を廣く左右に張りつつ威勢よく登壇したり。森鷹彦はモスコの爆裂弾と稱へられ居る強力にして、無鐵砲なる英傑なりける。

常世姫の言靈の威力に吞まれて堂々たる八王、八頭をはじめ、その他の神人らの一柱として反駁を試むるものなき腑甲斐なさを見て心中深く憤懣し、終に耐へかねて登壇を試みたるなり。森鷹彦は壇下に居竝ぶ諸神人に赭顔を曝し睨みつけ、つぎに身體をクルリと常世姫の方にむけ、嬋娟たる美容を頭上より脚下まで熟視し、口唇をへの字形にかたく結び、巨眼をむき出し、忌々しげに太息を猛虎の嘯くごとく吹き立てたる。その形相の凄じきこと、惡鬼羅刹の怒りたる時の如なりけり。

森鷹彦は舌端火を吐きながら満座に向つて聲を勵まし、
「そもそも今回の大會議については、八王大神の世界を永遠に平和ならしめむとする、大慈大悲の至誠より發起されたるものと聞きおよぶ。しかし表面的理由は如何とも名づく可けれども、その落着く心の眞の精神の如何については、十分考

量を要すべきことと思ふ。本會議に臨みたまふ八王、八頭は申すにおよばず、その他の神人はいづれも神定の聖地エルサレムの地上高天原において、國祖國治立命の神定によりてその身魂々々に匹敵する神界の天職を命ぜられたる、至嚴至重の聖職に奉仕すべき天賦的大使命を負はせらるる方々ならずや。しかるに何んぞや、大神の天使たる八王をはじめ、その他の神司の今日の行動は、天地神明の聖慮を無視したる反逆的惡事にあらざるか。かれ八王大神なるもの果して何の特權あるか。かれは國祖の神任によりて八王大神と成りしに非ず。ただただ時の力を利用し、體主靈從的行爲を續行して數多の邪神を蒐集し、自らその頭目となりしものにして、一言にして論ずれば彼のごときは、天則違反自由行動の反道者たるのみ。素性賤しき野蕃神の成り上りにして眞正の天使にあらず、天下を掠奪せむとする一大盜賊の徒なり。吾々は彼が如き大盜賊をして心底より悔い改めしめ、善道に導き、大神の慈徳の洪大無邊なるを悟らせ、身魂ともに天國に救ひ與へむとの眞情より、はるばると本會議に參列したる次第である。然るに諸神司はかかる天則を破る大盜賊の配下となり、神より任命されたる各自の聖職を捨てむとす

るや。八王以下の聖職は神の職を任せられたる貴き天職にして、決して個人の自由
に左右すべきものにあらざ、諸神司はよろしく我が天職を反省し、軽々しくか
かる暴論暴擧に耳を藉し、参加して國祖の神慮を怒らしむる勿れ。吾々は八王大
神にして心底より省み、前非を悔い改め、天地の眞理を覺り大神の律法に背戾す
るの罪を畏こみ、また八王大神らの奸策にのりて野天泥田に陥りたるその無智を
恥ぢ、斷然として今回の會議を脱退し、天賦の聖職を尊重し、聖地エルサレムに
おいて神慮に叶へる至善至眞の會議を開催されむことを望む[□]
と大聲疾呼しつつ降壇せむとし、たちまち巨軀をクルリと返へし、ふたたび演説
を始めた^{はじ}り。

□ 諸神司はくれぐれも眞の神の恩徳を忘れたまふことなく、至誠の眞心を發揮し
今日の失敗を大神に泣謝し、蕃神八王大神大自在天の陰謀を根底より破壊し、以
て神の前に清き、赤き、直き、正しきを顯彰されよ。我は微賤の者なりといへど
も、世界平和のため、律法保護のためには、決して諸神司の後に落ちざるもので
ある。ア、八王大神よ、常世姫よ、寸時も早く至誠にかへれ。ア、満場の諸神人

も、片時も速かに迷夢を醒ませ。悪魔は善の假面を以て善なる神人を誑惑す。正邪理非曲直の判断に迷ふなかれ。と現在名聲を世界にとどろかし、勢力巨大なる八王大神の前をも憚らず、洒々然として猛烈に攻撃の矢を放ちたるその大膽不敵さに驚かざるはなかりける。要するに森鷹彦は一意専心に大神の神威を畏れ、神徳の洪大無邊なるを確信するより、かくのごとき強敵の前をも憚らず、諄々として大膽に、率直に所信と抱負を無遠慮に吐露することを得たるなり。ア、信仰の力は山をも動かすとかや、千祈萬禱至誠一貫して以て山動かざる時は、吾より往きて山に登らむてふ確固不拔の信仰あらば、天下何ものか之に敵し得むや。森鷹彦の熱心なる大々的攻撃も悪罵も流石の八王大神において、如何ともすること能はざりしは、全く信念の力の致す所といふべし。

(大正一〇・一二・二〇 舊一一・二二 出口瑞月)

第一八章 隱忍自重（一六八）

森鷹彦の壇上における大獅子吼はその實、地の高天原より神命を奉じて、この
反逆的會議を根底より改めしむべく、神使として鬼武彦なる白狐出の猛神の變化
なりける。森鷹彦はモスコの八王道貫彦の從臣にして、あくまで強力の男子な
るが、いま壇上にその雄姿を表はしたるは、實に鬼武彦の化身なりける。鬼武彦
は大江山の守神にして惡魔征服の強神なりけり。
八王大神以下常世國の神人らは、何れも惡鬼、邪神、惡狐、毒蛇の天足と胞場
の裔靈常に彼らの身魂を左右し、日夜惡逆無道、天則破壞の行爲を續行せしめつ
つありける。ゆゑに今回の常世會議は、すべて背後にこれらの邪神操縦して居り
て、大々の野望を達せむと企てたりけるに、地の高天原より大神の命により派
遣されたる大江山の猛神鬼武彦のために、さすがの邪神もその魔力を發揮する機
會を全く失ひけるぞ心地よき。

すべて天地の間は宇宙の大元神たる大神の御許容なき時は、九分九厘にて打ち

覆かへさるるものなれば、さしもに名望めいぼう勢力せうり一世いつせいに冠絶くわんぜつせる八王大神やつわうだいじんと自在だいじざい在天いてんの威あり力よくをもつてするも、到底たうていその目的もくてきを達たつし得えざるは、神明しんめいの儼乎げんことして動うごかすべからざるの證據せうこなり。神かみは自ら創造さうざうしたる世界せかいを修理しうり固成こせいせむと、ここに千辛萬苦せんしんばんくの結果けつぐわ、無限むげんの靈德れいとくをもつて神人しんじんを生うみ出したまひ、天地經綸てんちけいりんの大司宰だいしさいとして大神かみに代かはりて、世界せかいを至善しぜん、至美しび、至安しあん、至樂しらくの神境しんきやうとなしたまふが大主願だいしゆくわんなり。併しかしこの時代じだいは前述ぜんじゆつせるごとく、世界一體せかいいつたいにして地上ちじやうの主宰者しゆさいしやは只一柱ただひとばしらと限定げんていされぬたりしなり。しかるに世よはおひおひと開ひらけ、神人しんじんは神人しんじんを生うみ地上ちじやうに充満じゆうまんするに至いたつて、各自かくじの欲望よくぼう發生はつせいし、神人しんじんみなその天職てんしよくを忘わすれて、利己的りこてき精神せいしんを發生はつせいし、つひには自由行動じいうかうどうをとり、優勝劣敗いうしようれつぱいの惡風あくふう吹き荒すさみ、八王大神やつわうだいじんのごとき自主じしゆて的強きき力の神現かみあらはれ、天下てんかを掌握しやうあくせむとするに立到たちいたりたるなり。

ちなみに神人しんじんとは現代げんだいにいふ人格じんかくの優すぐれたる人ひとをいふにあらず、人ひとの形かたちに造つくられたる神かみにしてある時ときは龍蛇りうじやとなり、猛虎まうことなり、獅子ししとなりて神變しんべん不思議ふしぎの行かう動どうを爲なし得うる神かみの謂いひなり。ゆゑに神かみとして元形げんけいのままに活動くわつどうする時ときは、天地てんちをかけり、宇宙うちうを自由自在じいうじざいに遠近明暗えんきんめいあんの區別くべつなく活動くわつどうし得うるの便宜べんぎあり。宇宙うちうの大元だいげん

神はここにおいてその自由行動を抑壓し、地上の神界を修理せむとして神通力を
のぞき、神人なるものに生み代へ變らしめたまひける。

ゆゑに神人なるものは危急存亡の時に到るや、元の姿のままの龍となり、白蛇
となり、その他種々の形に還元することあり。されど還元するは神の生成化育、
進歩發達の大精神に違反するものにして、一度元形に復し神變不可思議の神力を
顯はすや、たちまち天則違反の大罪となりて、根底の國に驅逐さるるのみならず、
神格たちまち下降して畜生道に陥るの恐れあり。ゆゑに神人たる名譽の地位を守
るためには、いかなる悔しさ、残念さをも隱忍してその神格を保持することに努
力さるるものなり。自暴自棄の神人はつひに神格を捨て惡龍と變じ、つひに萬劫
末代亡びの基を開くなり。現代のごとき體主靈従の物質主義者は、すべてこの自
暴自棄してふたたび畜生道に墮落したる邪神と同様なり。これを思へば人間たる
ものは、あくまでも忍耐の心を持ち大道を嚴守して、神の御裔たる品格を永遠に
保つべきなり。

人間の中には短慮なるもの有りて危急の場合とか、一大事の場合に際し、身命

を擲ちてその主張を急速に達成せむとし、知らず識らずの間に自暴自棄的行動を敢行し、瓦全よりも玉碎主義を選ぶと言ひて誇るものあり。玉碎は自己の滅亡にして、自ら人格を無視するものとなり、神界の大神の眼よりは自暴自棄、薄志弱行の徒として指弾され靈魂の人格までも失墜するに致るものなり。すべて瓦全と玉碎は、人間として易々たる業なり。天地經綸の大司宰として、生れ出でしめられたる人間はあくまでも隱忍自重して、人格を尊重し、いかなる壓迫も、困窮も、災禍も、忍耐力、荒魂の勇を揮つて玉全を計るべきは當然の道なり。ア、現代の人間にしてこの忍耐を守り、人格を傷害せざるもの幾人かある。人は残らず禽獣の域を脱すること能はずして、神の造りし世界は日に月に餓鬼、修羅、畜生の暗黒界と化しつつあるは、實に遺憾の極みなりけり。

國祖の神諭にも、

「三千年の永き月日を悔し残念、艱難辛苦を耐へ耐へて、ここまできた良の金神であるぞよ」

と示されたるも、右の理由に基くものなり。天地萬有をみづから創造したまひ、

絶対無限無始無終の神徳を完全に具有したまふ宇宙の大元神たる大國治立命にし
て、固有の神力を發揚し、太古の初發時代の神姿に還元して活動したまふにおい
ては、如何なる大神業といへども朝飯前の御事業なるべし。されど大神は一旦定
めおかれたる天則をみづから破り、その無限の神力を發揮したまふは、みづから
天則を造りて自ら之を破るの矛盾を來すものなれば、大神は輕々しくこれを斷行
したまはざるは、もつともなる次第なりけり。

神諭にいふ、

「良の金神が、太古の元の姿に還りて活らき出したら、世界は如何様にでも致す
なれど、元の姿のままに現はれたら、一旦この世を泥海に致さねばならぬから、
神は成るだけ静まりて、世の立替を致そうと思ふて神代一代世に落ちて、世界の
神、佛、人民、畜類、鳥類、昆蟲までも助けてやらうと思ふて苦勞を致して居る
ぞよ」

と示されたる神示は、我々は十分に味はひおかざるべからず。萬々一國祖の神に
して憤りを發し、太初の神姿に復歸したまひし時は、折角ここまで物質的に完成

したるこの世界を破壊し終らざれば成らぬものなれば、大神はあくまでも最初の規則を遵守して忍耐に忍耐を重ねたまひしなり。ア、有難き大神の御神慮よ。

常世彦をはじめ、さすがの暴悪無道の神人といへども太古のままの元形に還り、神變不可思議の活動をなすことは知りをり、かつ又その實力は慥に保有してをれども、その神人たるの神格を失ひ、根底の國において永遠無窮に身魂の苦しむことを恐れて、容易にその魔力を揮はざりしなり。この眞理を悟りし神人はたとへ肉體は滅亡するとも、決して根本的に脱線的還元の道は選ばざりしなり。ア、犯し難きは天則の大根元なるかな。

(大正一〇・一二・二一 舊一一・二三 出口瑞月)

第十九章 猿女の舞(一六九)

聖地エルサレムの神都より行成彦に隨伴して入城せる猿田姫は、妹出雲姫の登

壇だんして皮肉ひにくなる歌うたを作り、諸神人しよしんを感歎かんたんせしめたるも、やや神格しんかくを傷きずつけたるの
點てんありと煩慮はんりよし、その缺けつを補おぎなひ、聖地せいちの神使しんしたる神格しんかくを保持ほぢせむと平素物へいそものしづか靜しづかなる
姫ひめも斷然意だんぜんいを決けつし發言はつげんの權けんを愧はづかしげに請求せいきうし、靜しづかかに壇上だんじやうに現あらはれたりける。
猿田姫さだひめは、出雲姫いづもひめの容色ようしよくえんれい艷麗えんれいなるには到底たうていおよ及およばざりけり。されどその口許くちもとのどこ
となく締しまりありて、涼すずしき眼めは諸神人しよしんをして知しらず識しらずの間に引ひきつけ得うる不ふ
思議しぎな力ちからを持もちゐたりける。猿田姫さだひめは稍愧やほづかしげに頬ほほを赧あからめて壇上だんじやうに立たちしが、
その赧あからめる頬ほほには何なンともいへぬ親したしみ湧わき來きたりける。姫ひめは女性によしやうの分際ぶんざいを省かへり
みて烈はげしき言論げんろんをさけ、なるべく優やさしき言靈ことたまの威力ゐりよくをもつて所感しよかんを述のべむとし、
優美いうびなる歌うたをもつて言論げんろんにかへたりにけり。

「もろこしの常世とこよの國くには遠とほけれど　　モロコスヨトコヨヨクシホトホケレド
神代かみよをおもふまごころは　　カムヨヨオモフマコモトホ
からも、あきつも常永とこしへに　　カコモ、アキツモトコスエイ
變かはらぬものぞ天地あめつちの　　コホロ又モヨゾアメツツヨ

神かみの御魂みたまのさちはひて　　カムヨミタマヨソチホイテ
 生うまれ出いでたる神人かみびとの　　ウモレウデトルカムフトヨ
 心こころは直なほく正ただしくて　　モモトホノヲクトドスケテ
 誠まことの道みちにすすみつつ　　マコトヨミツイスイツツ
 開ひらくるままにいつとなく　　フロクルモモイウツトノク
 世よは常暗とこやみの雲くもおこり　　ヨホトコヨイヨクモオコイ
 浪なみたかまりし四よつの海うみ　　ノミトカモリスヨツヨイミ
 吹ふきくるあらし静しづかめむと　　フキコルコセイイズメムト
 國治立くにはるたちの大神おほかみは　　クシホルトチヨオオカムホ
 ころを碎くだき身みをくだき　　コモトヨクドキミヨクドキ
 朝あしたの深霧みきり夕霧ゆふきりを　　アストヨミキリユウキリヨ
 科戸しなとの風かぜに吹ふきはらひ　　スノドヨコゼイフキホロイ
 はらひたまへど空蝉うつせみの　　ホロイトモヘトウツセミヨ
 世よは烏羽玉うばたまの暗くらくして　　ヨホウボトモヨクロクステ

高山たかやまの末短山すゑひきやまの　　タコヨモヨスエホコヨモヨ
 山やまの尾をの上への神人かみひとも　　ヨモヨヨヨエヨカムフトヨ
 旭日あさひの光月ひかりつきの影かげ　　アソホヨフカリツクヨカゲ
 星ほしの輝かがやき不知火しらぬひの　　ホスヨカカヨキスロ又ホヨ
 千々ちぢに心こころをつくし　　ツツイコモトヨツクスゴト
 海うみにも野のにも曲神まががみの　　イムイヨノイヨマゴカムヨ
 伊いたけ猛くるり狂ありさまふ有ありさま様ありさまを　　ウトコイクロフアイソモヨ
 和なごめすかしていにしへの　　ノゴメスコステウイスエヨ
 元津御神もとつみかみのうまし世よに　　モトツミカムヨウモスヨイ
 持もち直なほさむと御心みこころを　　モチノヨソムヨミコモトヨ
 碎くだかせたまひて畏かしこくも　　クドコセトモイテカスコクヨ
 高天原たかあまはらに八百萬やほよろづ　　タコモヨホライヨホヨロツ
 神かみを集つとへてまつりごと　　カムヨツドエテマツリコト
 はじめたまへど海川うみかはや　　ホジメトモヘボイミコハヨ

山野の果てに立つ雲の　　ヨモヨヨホテイトツクモヨ
 晴るる暇なき常暗の　　ホルルホミノキトコヨミヨ
 神のおとなひ草や木の　　カムヨオトノイクサヨコヨ
 かきはときはに言問ひて　　カキホトコホイコトトイテ
 萬のわざはひ五月蠅如す　　ヨロヅヨウズウイソボヘノス
 群がりおこり天地の　　ムラゴイオコイアメツツヨ
 國の眞秀良場高天の　　クシヨモホロボタコアモヨ
 原に現はれ村肝の　　ホライアラホレムラキモヨ
 心も廣き廣宗彦の　　コモトヨフロキフロムネホコヨ
 貴の命の知らず世は　　ウツヨミコトヨスラスヨホ
 山河草木みな靡き　　ヨモコホクソコムノノイキ
 浦安國となりひびく　　イラヨスクシヨノリフブク
 かかる芽出度き神の世の　　カカムメデトキカムヨヨヨ
 礎かたく搗きかため　　ウスツエコトクツキコトメ

| | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------------------------------|---------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------|---------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|--------------------------------|---------------------------------------------------|----------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| 御心 <small>みこころ</small> きよき常世彦 <small>とこよひこ</small> | 神世 <small>かみよ</small> を思 <small>おも</small> ふまごころの | 萬 <small>よろづ</small> の曲 <small>まが</small> を拂 <small>はら</small> はむと | 日 <small>ひ</small> に夜 <small>よ</small> に曇 <small>くも</small> る天地 <small>あめつち</small> の | こころの儘 <small>まま</small> にさやぎつつ | 神 <small>かみ</small> はかたみに村肝 <small>むらぎも</small> の | 四方 <small>よも</small> の山野 <small>やまぬ</small> や海川 <small>うみかは</small> の | 治 <small>をさ</small> まるべしと思 <small>おも</small> ひきや | 世 <small>よ</small> は平 <small>たひら</small> けく安 <small>やす</small> らけく | 立 <small>た</small> てはじめたるこのみぎり | 清 <small>きよ</small> き神代 <small>かみよ</small> のまつりごと | 千代 <small>ちよ</small> に八千代 <small>やちよ</small> に動きなき | 建 <small>た</small> て初 <small>はじ</small> めたる眞木柱 <small>まきはしら</small> |
| ミコモトキヨキトコヨホコ | カムヨヨオモフモコモトヨ | ヨロヅヨモコヨホムヨ | フイヨイクモルアメツツヨ | コモトヨモヨソヨギツツ | カムホコトミイムロキモヨ | ヨモヨヨモヨヨイミコホヨ | オソモルベスヨオモイコヨ | ヨホトフロケクヨスロケク | タテホシメトルコヨミキリ | イヨキカムヨヨマツイコト | ツヨイヨツヨイウコギノク | タテホシメテルモコボスロ |

大國彦の二柱

オオクシホコヨフトホシロ

心のたけを打ち明けて

コモトヨタケヨウツアケテ

天と地とのおだやかを

アメヨツツヨヨオトヨコヨ

來たさむためのこの度の

キトソムトメヨコヨトイヨ

常世の城の神集ひ

トコヨヨスロヨカムツトイ

集ひたまひし神人は

ツトヒトモイスカムフトホ

清けく直く正しくて

キヨケクノヲクタドスクテ

萬のものに安らげき

ヨロヅヨモヨヨスロケク

いける生命をあたへむと

ウケルイヨツヨアトエムヨ

心を碎くこの集ひ

コモトヨクドキコヨツドイ

國治立の大神は

クシホルトツヨオオカムヨ

かならず諾ひたまふらむ

カノロズイベノイトモフロム

されど物には順序あり

サレドモヨイホツユデアリ

これらの順序を誤りて

コレヨツユデアヨモリテ

本もとと末すゑとをひと一つにし　　モトヨスエヨヨフトツニス
 内うちと外そととの差別けじめをば　　ウツヨソトヨヨケズメヨホ
 過あやまつことのあらざらめ　　アヨモツコトヨアロゾロメ
 これの集つどひを開ひらきたる　　コレヨツドヒヨフロクトロ
 神かみの御心みこころいと清きよく　　カムヨミコモトウトクヨク
 尊たふとく坐ませど天地あめつちの　　タフトクモセドアメツツヨ
 元津御神もとつみかみの定さだめたる　　モトツミカムヨサドメトロ
 聖きよき神庭みにはの　　エルサレムクヨキミニホヨエルソレム
 神かみの都みやこに神集かむつどひ　　カムヨミヨコイカムツドイ
 たがひに心こころを打うち開ひらき　　カトミニコモトヨウチヒロキ
 常夜とこよの暗やみの戸と押おし分わかけて　　トコヨヨヨミヨトオスフロキ
 言問こととひ議はかり赤誠まじこころを　　コトトイホコリモコモトヨ
 神かみの御前みまへに捧ささげつつ　　カムヨミモヘニサソゲツツ
 盡つくすは天地あめつち惟かむながら　　ツクスホアメツツカムナガラ

| | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|
| 神 <small>かみ</small> の <small>おほぢ</small> 大道 <small>おほぢ</small> に <small>かな</small> 叶 <small>かな</small> ふべし | カムヨオオヂニカノウベス |
| 常世 <small>とこよ</small> も <small>おな</small> 同じ <small>おほかみ</small> 大神 <small>おほかみ</small> の | トコヨヨオノシオオカムヨ |
| 造 <small>つく</small> りたまひし <small>くに</small> 國 <small>くに</small> なれば | ツクリタモイスクシノレボ |
| 神 <small>かみ</small> の <small>さだ</small> 定め <small>さだ</small> し <small>エル</small> エルサレム | カムヨサドメスエルソレム |
| 神 <small>かみ</small> の <small>みやこ</small> 都 <small>みやこ</small> も <small>かは</small> 變 <small>かは</small> らじと | カムヨミヨコヨカホロズト |
| 言 <small>ことあ</small> 擧 <small>あ</small> げたまふ <small>かみがみ</small> 神 <small>かみがみ</small> 人も | コトアゲタモフカムフトヨ |
| 澤 <small>さは</small> に <small>あ</small> 居 <small>あ</small> ま <small>さ</small> む <small>さ</small> り <small>な</small> が <small>ら</small> | サホイイモソムソリノゴロ |
| 元津 <small>もとつみ</small> 御神 <small>みかみ</small> の <small>みこころ</small> 御心 <small>みこころ</small> は | モトツミカムヨミコモトホ |
| 荒浪 <small>あらなみ</small> 狂 <small>くる</small> ふ <small>も</small> ろ <small>こ</small> しの | アロノミクルフモロコスヨ |
| 常世 <small>とこよ</small> の <small>くに</small> 國 <small>くに</small> と <small>さだ</small> 定め <small>さだ</small> てし | トコヨヨクシヨサトメトロ |
| 神 <small>かみ</small> の <small>みこと</small> 御言 <small>みこと</small> ぞ <small>な</small> かり <small>け</small> り | カムヨミコトヨノコイケリ |
| 神 <small>かみ</small> の <small>みゆる</small> 御許 <small>みゆる</small> し <small>な</small> き <small>くに</small> 國 <small>くに</small> の | カムヨミユルスノキクシヨ |
| 常世 <small>とこよ</small> の <small>しろ</small> 城 <small>しろ</small> の <small>かむ</small> 神 <small>かむ</small> つ <small>ど</small> ひ | トコヨヨスロヨカムツドイ |
| 集 <small>つど</small> ひ <small>も</small> につ <small>も</small> ど <small>も</small> 諸 <small>も</small> の <small>かみ</small> 神 <small>かみ</small> | ツトイニツドフモモヨカム |

すめおほかみ 皇大神の御心と スメオオカムヨミコモトヨ
 おきての則は如何にぞと オキテヨヨロホイコノロム
 ふか 深く省みたまふべし フコクカヘリミタモフベス
 とこよ 常世の國は廣くとも トコヨヨクシホフロクトモ
 とこよ 常世の神は強くとも トコヨヨカムホツヨクトモ
 かみ 神の許さぬから神の カムヨユルソヌカロカムヨ
 もと 許に交こり口合ひて モトニモロコリクツオイテ
 した 舌の劍を振りかざし ストヨツルギヨフリコゾス
 ひばな 火花を散らし鎬をば ホホノヲツロススノキオボ
 たがひに削る淺間しさ カトミニケヅルアソモスソ
 やつわう 八王の神は皇神の ヤツコスヨカムホスメカムヨ
 よさしたまひしつかさぞや ヨソストモイスツコソゾヨ
 きよ 清くたふとくおごそかに キヨコタフトコオコソコニ
 まも 守るは八王國魂の マモルホヤツコスクスシタモヨ

| | | | | | | | | | | | | | |
|----------|-----------|------------|------------|-----------|-------------|-----------|------------|------------|------------|-----------|------------|-------------|------------|
| 皇大神も嘉すらむ | あななひ奉り功績を | 左り右りの手を擧げて | その語らひは猿田姫も | 科戸の風に吹き拂ふ | 捨てこの世のあらそひを | 猛きつはもの速かに | 荒ぶる神の身に持てる | ア、常暗となりにけり | ア、常暗となりにけり | すてて惜まぬ神の胸 | 破れし沓を捨つること | そのちからさへ輕しみて | 身魂につける特權なり |
| すめおほかみ | まつ | て | かた | かぜ | よ | すみや | あ | とこやみ | とこやみ | かみ | くつ | かる | ちから |
| よみ | いさをし | あ | さだひめ | はら | す | す | も | に | に | むね | す | か | ら |
| ス | ア | ヒ | ソ | シ | ス | タ | ア | ア | ア | ス | ヤ | ソ | ム |
| メ | ノ | ド | ノ | ノ | テ | ケ | ロ | オ | オ | テ | ブ | ノ | タ |
| オ | イ | ヨ | カ | コ | テ | キ | ブ | ト | ト | オ | レ | チ | マ |
| カ | マ | コ | ト | セ | コ | ツ | ル | コ | コ | ス | ス | コ | ニ |
| ム | ツ | セ | ロ | ニ | ノ | ホ | カ | ヨ | ヨ | モ | ツ | ロ | ツ |
| ヨ | リ | ニ | イ | フ | ヨ | モ | ム | ミ | ヨ | ス | ヨ | ソ | ク |
| モ | イ | ヨ | ホ | キ | ア | ヨ | ヨ | ニ | モ | ス | ス | ア | ル |
| ス | ソ | テ | サ | ホ | ロ | コ | コ | モ | ト | ル | ル | カ | チ |
| ロ | ホ | ヲ | ド | ロ | ソ | ニ | ニ | ト | ロ | ゴ | ゴ | ロ | コ |
| ム | ス | ア | フ | フ | イ | コ | ケ | ロ | リ | ト | ト | ソ | ロ |
| | ヨ | ゲ | メ | フ | ヨ | コ | リ | リ | リ | ロ | ト | ミ | ノ |
| | ヨ | テ | モ | フ | ヨ | コ | リ | リ | リ | ロ | ト | テ | リ |
| | ヨ | テ | モ | フ | ヨ | コ | リ | リ | リ | ロ | ト | テ | リ |

ただ八王の神柱　　タドヤツコスヨカムボス口
やつわう　かむぼしら
一つ缺くとも空蝉の　　フトツコクトモイツソミヨ
ひと　か　うつせみ
御代も曲代とたちまちに　　ミヨモマモヨヨトチモチニ
みよ　まがよ
かたむき亂れ潰ゆべし　　カトムキミドレツイユベス
みだ　ついで
神の許せし八王神　　カムヨユルセスヤツコスカム
かみ　ゆる　やつわうがみ
八頭神諸の神　　ヤツコシロカムモモヨカム
やつがしらがみもも　かみ
高天原の御使と　　タコモヨホロヨミツコイヨ
たかあまはら　みつかひ
天降りたる猿田姫の　　アメクドリテルサドホメノ
あまくだ　さだひめ
言葉の花を常暗の　　コトボヨホノヨトコヨミヨ
ことば　はな　とこやみ
夜半の嵐に散らさざれ　　ヨホヨアロスニチロソゾレ
よ　は　あらし　ち
夜半の嵐に散らさざれ　　ヨホヨアロスニチロソゾレ
よ　は　あらし　ち
大虎彦や常世彦　　オオトロホコヨトコヨホコ
おほとらひこ　とこよひこ
常世の姫の類ひなき　　トコヨヨホメヨタクイノキ
とこよ　ひめ　たぐ
直き正しき眞心を　　ノヲキタドスキモコモトヨ
なほ　ただ　まごころ

尊^{たふと}み敬^{こやま}ひ歡^{よろこ}びて タフトミウヨモイヨロコビテ
 心^{こころ}きたなき醜^{しこくさ}草^{くさ}の コモトキトノキスコクソヨ
 片^{かきは}葉^はを風^{かぜ}に任^{まか}せつつ カキホヨコセニマコセツツ
 清^{きよ}き會^{つどひ}場^ばを汚^{けが}したる キヨキツトイヨケゴストロ
 我^わが身^みの深^{ふか}きつみとがを ワゴミヨフコキツムトゴヨ
 咎^{とが}めたまはず姫^{ひめ}神^{がみ}の トゴメタモホズホメカムヨ
 足^{たら}はぬすさびと平^{たひら}けく タロホ又スソブヨタヒロケク
 心^{こころ}安^{やす}らけく神^{かむ}直^{なほ}日^ひ ウロヨスロケクカムノヲヒ
 大^{おほ}直^{なほ}日^ひにと詔^のり直^{なほ}し オオノヲヒニヨノルノヲス
 又^{また}聞^き直^{なほ}し見^み直^{なほ}しつ マトキクノヲスミノヲスツ
 道^{みち}ある道^{みち}に手^てを曳^ひきて ミツアルミツニテヲヒイテ
 常^{とこよ}世^よの暗^{やみ}を輝^{かがや}かし トコヨヨヨミヨカゴヨロス
 天^{あま}の岩^{いはと}戸^とを押^おし開^{ひら}き アメヨイホトヨオスヒロキ
 天^{あまつ}津^{つか}御^み神^{かみ}や地^ちの上^{うへ}の アメツミカムヨツツヨエヨ

元津御神の大前に　　モトツミカムヨオオモヘニ
かへりまをしの太祝詞　　カへリモヲスノフトノリト
聲もさやかに唱へかし　　コエモサヨコニトノヘコス
目出度し目出度しお芽出度し　　メデトスメデトスオメデトス

(下段は神代言葉)

猿田姫は春風面を吹くごとく、平穩なる言靈に一種の強味と、大抱負を歌ひつ
舞ひつ、雙方の神人をしてやや反省せしめたるは、實に聖地の使者としてその名
を愧かしめざるものと云ふべきなり。

(大正一〇・一二・二一　舊一・二・三　出口瑞月)

(第一五章) 第一九章　昭和一〇・一・二〇　於日奈久泉屋旅館　王仁校正)

第二〇章　長者の態度〔一七〇〕

森鷹彦の峻烈なる攻撃演説と、猿田姫の流暢なる水も漏さぬ歌意によつて、竝居る満場の諸神司はややその本心に立復り神威の畏るべく、神律の儼として犯すべからざるを今さらの如く自覺し、神人らは以心傳心的に八王大神らの今回の言動の信憑すべからざるを固く知了したるとき形勢は、會場の各所に漂ひける。この形勢を目敏くも見てとりし八王大神は、ヤオラ身を起して演壇の前に立ち現はれたり。

さて八王大神常世彦は頭髮長く背後に垂れ、身軀長大にして色白く、眼清く、眉正しく鼻は高からず低からず、骨格逞しうして神格あり、何處となく長者たり頭領たるの權威自然に備はり、諸神人の猛烈なる攻撃も嘲罵も、少しも意に介せざるがごとく、如何なる強敵の襲來も、たとへば鋼鐵艦に蝶々の襲撃したるごとく態度にて悠々せまらず、光風霽月の暢氣さを惟神に發揮しむたりけり。かくのごとき神格者の八王大神も、少しく心中に欲望の念萌さむか、たちまち體主靈從的行動を敢行して憚らぬまで神格一變したりしなり。心に一點の欲望おこるや、宇宙間に充滿せる邪神は、その虚に乗じて體内に侵入し、ただちにその神格をし

て變化せしめ、惡心欲望をますます増長せしめむとするものなり。ゆゑに八王大神も常世姫も、天授の精魂體内を完全に支配するときは、じつに智仁勇兼備し且つ至聖至直の神格者となり得る人物なり。邪神の憑依せしときの二人は、俄然狂暴となり、時に由つては意外の卑怯者と變ずることあり。如何に善良なる神人といへども、その心中に【空虚】あり、【執着】あり、【欲望】あるときは直様邪神の容器となる。實に恐るべきは心の持方なりける。これに反し、至誠一貫わづかの執着心も欲望もなき神人は、いかなる場合にも恐怖し嗟嘆し失望することなく、行成彦のごとく、敵城にありながら少しも恐れず滔々として所信を述べ、その目的の達成に努力を吝まず、その使命を完全に遂行することを得るものなり。常世彦は悠悠せまらず靜かに壇上に行儀正しく佇立し、温顔に溢るるばかりの笑を湛へて兩手を揃へて卓上におき、ややうつむき氣味になりて、諸神人の面上を見るごとく見ざるごとく、諄々として口演を始めたり。

「あゝ満場の諸神司ら、吾が最も敬愛するところの八王をはじめ、慈愛と正義の權化とも稱ふべき神人らの前に、謹んで吾が胸中に深く永年納めおきたる赤心を

吐露し、もつてその同情ある御了解を得て、這般の大會議の目的を世界平和のた
めに達成せむことを、天地の神明に誓ひ、至誠をもつて貫徹せむことを希望する
次第であります。そもそも、宇宙の大元靈たる大國治立命の大宇宙を創造し、太
陽、太陰、大地および、列星を生み成し洪大無邊の神業を樹て給ひしは、萬有一
切の生物をして、至安至樂の世に永遠無窮に榮え住はしめ、かつ宇宙の大意志を
完全に遂行せしめたまはむが爲であります。大神は太陽を造り、これに附するに
その靈魂と、靈力と靈體をもつてし、太陽の世界にその守護神を任じたまひ、太
陰にも同じくその靈魂と靈力と靈體とを附與して、各自の守護神を定めて、太陽
界と太陰界の永遠無窮の守護神として、それぞれの尊き神をして守護せしめたま
ふ如く、我地上にも大國治立命の分靈をして、これを守護せしめたまふたのであ
ります。これぞ、吾々の日夜尊敬して止まざる大地の主宰たる國治立命でありま
す。賢明にわたらせらるる諸神司の方々は、吾々のごとき愚者の言は、耳を傾く
るの價値なきものとして一笑に付して顧みられざるは、當然であらうと思ひます。
しかしながら、宇宙一切のものには凡て本末がありますから、幼稚極まる論説で

あります、今日は天地開闢にも比すべき神聖祥徴の大会議でありますから、賢明なる諸神司の特に御承知のこととは存じながら、神の御恩徳を讚美したてまつるために、謹んで天地根本の大道より説きはじめた次第であります。そもそも我地上の大主宰にまします、國祖の國治立命は、銳意世界の平和と、進歩發達の聖業を完成せむと、不斷の努力を續けさせたまふは、諸神司の熟知さるところと堅く信じて疑はざる次第であります。國祖は大慈大悲の大御親心を發揮し、神人その他の生物をして各自そのところを得せしめむと、大御心を日夜に碎かせたまふは、吾々は實に何ンとも申上げやうのなき有難きことであつて、その洪恩に報いたてまつり、大神の御子と生れ出でたる地上の萬有も、大神の御心を心として、吾々はそれぞれ神のために、最善の努力と奉仕を勵まねばならぬのであります。國祖の神は、その御理想を地上に完全に遂行せむがために、ここに國魂の神を祭り、八王、八頭を配置し、もつて神政の完成を企圖したまひしことは、諸神司も御承知のことと思ふのであります。しかるに、現今世界の狀況をつらつら思考するに、賢明なる八王、八頭の方々の銳意心力を盡して治めらるる各山各地は、い

づれも星移り月代りて、次第に綱紀は緩み最早收拾すべからざるに立到つたことは、直接その任に當りたまふ、諸神司らの熟知さるところであります。かくのごとき世界の混乱を放任して、これを修齋せざるは、果して國祖の御聖慮に叶ふものでありませうか、いづれの神司らも、我々としては實に申上げがたき言葉であります。これでも、立派に國祖の大御心を奉體されてをらるのであります。國祖は現代の世界の状況を見て、いかに思召したまふであります。吾々は、深夜ひそかに國祖の神の大御心を推察したてまつるときは、熱淚滂沱として腮邊に傳ふるを覚えざる次第であります。仁慈に富ませたまふ、國祖の神の御聖慮はいかに残念に思召さるるであります。一旦神命を下したまひて八王と定めたまひし以上は、その不都合なる神政をおこなふ神司が、萬々一ありとして、神司らの體面を重んじ、容易にその御意思を表白したまはず、神司らの本心に立復り、神意の神政をおこなふを鶴首して待たせたまふは、必定であらうと思はれます。ア、國祖は今日の八王らの、優柔不斷の行動を見て、日暮ンとして途遠しの御感想をいただき、内心御落涙の悲惨を嘗めたまはぬであります。吾々

神人の身をもつて、國祖の大御心を拜察したてまつるは畏れ多きことではありま
すが、大神は必ずや、各山各地の八王の退隱を、自發的に敢行するのを希望され
つつ、心を痛めさせたまはぬでありますか。諸神司はここにおいて、一つ御熟
考を願はねばなりません。』
と自發的八王の退隱を慫慂したりける。竝る八王、八頭は、國祖を笠にきての
堂々たる八王大神の論旨にたいして、一言半句も返す辭なく、羞恥の念にかられ
て太息を吐くのみなりける。この時いかがはしけむ、八王大神の顔色俄に蒼白
となり、アツ、と叫んで壇上に打倒れたり。ア、この結末は如何に治まるならむ
か。

(大正一〇・一二・二一 舊一・二三 出口瑞月)

八王大神常世彦の堂々として毫末も抜目なき、眞綿で首を締め付るごとき手痛
き雄辨に列座の諸神司、ことに直接の關係ある八王は、我身の境遇と、その責任
に省みて、鷲を烏といひくるめたる巧妙なる言論にたいし、抗辨反駁の餘地なく、
たがひに顔を見あはせ當惑至極の體にて青息吐息、五色の息を一時にホツと吐き、
さすが雄辨の行成彦も猿田姫、出雲姫、齋代彦その他の神司も悄氣かへりて、
「八王大神め、よくも吐したり」
と心中に驚異しつつ形勢いかになり行かむかと、とつおいつ、諸行無常是生滅法
の因果をつらつら思はざるを得ざりける。

連日の諸神司が至誠一貫全力を傾注して、神界のために舌端火花を散らして奮
闘したるその熱誠と猛烈なる大々的攻撃も、沖の鷗の諸聲と聞き流したる八王大
神が、敵の武器をもつて敵を制するてふ甚深なる計略と、その表面的雅量とによ
りて、國祖の聖慮を云爲し、敵の弱點を捕へ、鼠を袋に入れて堅く口を締めたる
ごとく、咽元に短刀を突付けたるがごとき、辛辣なる手腕に、いづれも敬服する
の止むなきに至らしめ、満座の諸神人を小兒のごとく、内心に見くびりさげし

ながら、綽々として無限の餘裕を示したるその威容は、常世城の大會議における檜舞臺の千兩役者としての價值、十分に備はりにける。

幸か不幸か、八王大神はいま一息にして、その目的を達せむとする折しも、突然として發病したれば、彼我の諸神人は周章狼狽し、懇切に介抱しつつありき。常世城の從臣、春日姫、八島姫は驚きながら、城中奥深く八王大神の病軀を扶けて、その艷姿を議場より没したりける。

この突然の出來事に、城内は上を下へと、大騒ぎの眞最中、突然登壇したる神人は、大自在天の重臣たる大鷹別なりき。

ア、満場の諸神人よ、本會議の主管者たる八王大神は、御承知の通り急病のため退席の止むなきに立到られましたことは、相互に遺憾の至りであります。しかしながら、吾々はこの大切なる會議を、中止することは出來なからうと思ふのであります。吾々は八王大神のあまりに天下の平和について、造次にも顛沛にも忘れたまはざる、至誠の心魂ここに凝つて、つひに病を發したまふたのではあるまいかと、推察する次第であります。諸神人は如何の御感想を保持したまふや。

おも 思ふに吾々はじめお互ひに、八王大神の御熱誠なる訓戒的お宣示にたいして、一
げん 言の辭なきを思ひ、實に、汗顔の至りに耐へませぬ。直接の關係者たる八王各位
においても、腹の底をたたけば何れも同じ穴の狐、疵もつ足の仲間と云はれても、
たふべん 答辨の辭はなからうと思ひます。いづれも神定の天職を全うされた神司らは、あ
まり澤山には、この席に列なる方々には、失敬ながら有るまいと斷言して憚らな
いのであります。諸神司の間には斯のごとき重大なる會議は、國祖の御許容を得
て、神定の聖地エルサレム城において、開催するが至當である、徒に常世城にお
いて會議を開くことをもつて、自由行動、天則違反の甚しきものと主張さるる神
司らもありましたが、諸神人、胸に手をあてて、冷靜に御熟考をして戴きたいの
であります。萬々一、前日來のごとき紛亂の議會を聖地において開いたとすれば、
第一、大神の聖地を汚し神慮を惱ませたてまつり、吾々は天地の神明に對して謝
するの辭がありますまい。賢明卓識の八王大神は、今日の結末を事前に感知して
止むを得ず、この地において會議を開き、聖地を汚さざらしめむと、苦心された
る、その敬神の御心と天眼力は、吾々凡夫の企及すべからざる所であります。諸

神人は八王大神の理義明白なる御主張に對し、すみやかに御贊成あらむことを希望いたします」

と述ぶるや、末席の方より、

「ヒヤヒヤ」

「ノウノウ」

の聲湧き起り、中には、

「ヒヤヒヤ冷やかなノウノウの能辨者」

と叫ぶものもあり。

この時、緊急動議ありとて、登壇したるは例の齋代彦なり。齋代彦は、例のごとく右手をもつて鼻をこぢ上げ、兩眼を撫で、涙を手の甲にて拭ひ、その手を右側の着衣にて拭ひながら、

「今日は、八王大神の御急病なればこれにて解散いたし、明日あらためて開會せばいかん、諸神人の御意見を承はりたし」

と大聲に呼ばはりければ、満座の諸神人は、八九分まで手を拍つて贊成したり。

ここに、當日の會議もまた不得要領のうちに幕を閉ぢられたり。ア、今後の八
王大神の病氣および、會議の結果は如何に展開するならむか。

(大正一〇・一二・二二 舊一・二四 出口瑞月)

(第二〇章 第二章 昭和一〇・一一・二一 於八代驛長室 王仁校正)

第二章 窮策の替玉(一七二)

いかなる美事善事といへども、天地根本の大神の御許容なきときは、完全に何
の事業といへども、成功すること不可能なり。世界の一切はすべて神の意志のま
まにして、神は宇宙一切をして至美至善の境界に轉回せしめむとするが第一の理
想にして、かつ生命なり。ゆゑに如何なる善なる事業といへども、第一に神明を
祭り、神明の許諾を得て着手せざれば、その善も神をして悦ばしむることを得ず。
つまり神の眼よりは、自由行動の所爲と見られ、かつ宇宙の大本たる神明の尊嚴

を犯すものとなるがゆるぎなり。いはんや、心中大なる野心を包蔵し、天下の神人を籠絡したる八王大神、および、自在天一派の今回の常世會議における、紛糾混亂怪事百出するなどは、國祖の神の大御心に叶はざりし確なる證據なるべし。これを思へば人間はいかなる善事をなすも、まづ神の許しを受けて、至誠至實の心をもつて熱心にとりかからざるべからざるものなり。

ある信徒の中には、抜けがけの功名を夢み、神のため道のため、非常なる努力をはらひ九分九厘の域に達したるとき、その誠意は貫徹せずしてガラリとはづれることあり。その時にいふ、吾々は神のため、道のため、最善の努力をつくすにモかかはらず、神はこれを保護したまはず。神は果してこの世にありや。一步をゆづつて神が果してありとせば、無力無能理義を解せざるものと嘲罵し、あるひは恨み、つひには信仰より離るる者多し。しかしそれこそ大なる誤解慢心と云ふべし。神が人間をこの世に下したまへる目的は、何事も神の命のまにまに、天地の經綸に當らしめむが爲なり。もし、神にして善事ならば自由行動をなしても差支なしとする時は、ここに宇宙一切の秩序を破壊するの端を開くことを忌みたま

ふが故なり。ゆゑに、一旦神に祈願し着手したることは、たとへその事が萬一失敗に終るとも、ふたたび芽を吹き出し、立派に花咲き實る時期あるものなり。これに反して自己の意志よりはじめて失敗したることは、決して回復の時期はなきのみならず、神の怒りに觸れて、つひには身を亡ぼす結果をきたすものなり。

八王大神はじめ、常世姫らの連日の獻身的大活動も、最初に神の認可を得ず、加ふるに胸中に大野心を包藏しての開催なれば、成功せざるは當然の理なり。しかして八王大神の壇上にて病氣突發したるは、大江山の鬼武彦が、國祖の神命によつて、邪神の陰謀を根本的に破壊せむとしたる結果なり。八王大神の急病によりて、常世城の大奥は非常なる混雜を極め、そのためせつかくの會議も、一週間停會するのやむなきに立ちいたりぬ。八王八頭をはじめ、今回會議に集ひたる神人は、代るがはる八王大神の病氣を伺ふべく、夜を日について訪問したりしが、常世姫は代りてこれに應接し、一柱の神人もその病床に入ること許さざりける。

八王大神は、日に夜に幾回となく激烈なる吐瀉をはじめ、胸部、腹部の疼痛はげしく、苦悶の聲は室外に漏れ聞へたり。かかる苦悶のうちにも、今回の大會議の

成功せむことを夢寐にも忘れぬ執着心を持ちみたるなり。大神の病は時々刻々に重るばかりにして、肉は落ち骨は立ち、ちようど田舎の破家のごとく骨の壁下地現はれ、バツチャウ笠のごとく、骨と皮とに瘦きり仕舞ひけり。

常世姫は、重なる神人を八王大神の枕頭に集めて協議を凝らしたり。常世姫はいかに雄辨なりといへども、この大會議をして目的を達せしむるには、少しく物足りなく、不安の感あり。どうしても八王大神の顔が議場に現はれねば、たうてい進行しがたき議場の形勢なりける。

ここに謀議の結果、八王大神と容貌、骨格、身長、態度、分厘の差もなき道彦に、八王大神の冠を戴かせ、正服を着用せしめて、身代りとするこの苦策を企てける。道彦は招かれて八王大神の病室に入りければ、常世姫は前述の結果を手眞似で道彦に傳へけるに、道彦は嬉々として、ウーと一聲、首を二三度も縦に振りて應諾の意を表しければ、神人らは道彦に衣冠束帯を着用せしめて見たるに、妻の常世姫さへも、そのあまりによく酷似せるに驚きにける。

(大正一〇・一二・二三 舊一一・二五 加藤明子録)

第四篇 天地轉動

第二三章 思ひ奇や その一「一七三」

道彦は神人の推薦によりて、八王大神の衣冠束帶を着用し、ここに偽常世彦となりすましたり。常世姫の意見によりて、立派なる別殿を與へられ、殿中に數多の従者をしたがへて收まりかへりゐたり。奸黠なる常世姫は、思ふところありて八王、八頭にたいし八王大神に面會することを許したり。

春日姫、八島姫は、玄關の間に盛装をこらして、八王の病氣伺ひにたいし、應接の役にあたりゐたりしが、ここにモスコの城主道貫彦は病氣を見舞ふべく別殿を訪ひたるに、玄關には娘の春日姫が、花のごとき姿を現はしあふるるばかりの愛嬌をたたへて控へをるにぞ、道貫彦は思はず知らず大聲を發し、

「また出よつたなア」

と叫びながら、春日姫の顔を穴のあくほど見つめぬたり。春日姫は言葉静かに、

父上様、おなつかしう存じます」

と叮嚀に頭を下げたるが、その顔には悲喜交々まじり、兩眼からは涙さへ滲み出ぬたり。姫は立ちてその手を取り、奥殿に案内せむとするや、道貫彦は驚いてその手を振りはなち、眼を刮と見ひらき、

油斷のならぬ大化物、その手は喰はぬぞ」

と一喝したるに、春日姫は強てその手を取り、親切に奥へ導かむとするを、右手に持てる杖にて春日姫の面上を力かぎりに打据ゑたり。姫は悲鳴をあげてその場に打仆れける。

道貫彦は杖の先にて姫の全身を衝いたり、叩いたりしながら、

「コン畜生、何時までも馬鹿にしてやがる」

と怒り狂ひつつ姫には目もくれず、悠悠として杖を曳きながら、奥殿に進み入りぬ。奥殿には八王大神端然として神々に取りまかれ控へぬたり。

道貫彦は叮嚀に敬禮しながら、ふと見上げるとたんに、八王大神の下顎の裏の

黒子に氣がつき、合點ゆかじと目を圓くして見つめてゐたるが、道貫彦は思はず、
「汝は八王大神とは眞赤な偽り、先年吾に仕へたる大道別に非ずや。汝不届にも
この常世の國に渡り、神變不思議の魔術をつかひ、畏れ多くも稚櫻姫命の第三女
常世姫を籠絡し、八王大神と僭越にも自稱して、反逆無道の欲望を貫徹せむとし、
世界の八王をはじめ、有力なる國魂をここに參集せしめたる、その伎倆や感ずる
にあまりあり。されど邪は正に敵しがたく、開會以來の議場の怪を見よ。これ全
く國祖大神の御神慮に反し、神明の罰をうけ汝が目的の大望も九分九厘にて幾回
ともなく打ち覆され、つひには諸神環視の壇上にて急病を發し、大失態を演じた
るに非ずや。かくのごとく靦面なる神罰を蒙むりながら、なほ未だ目ざめず、あ
くまで反逆心を貫徹せむとし、ふたたび議場に現はれむとするか。われは開會の
當日より汝の面體を熟視して疑團晴れざりしが、いま汝に接近してその化けの皮
を感知せり。あらそはれぬ證據は汝が下顎下の黒子を見よ。他神人はいざ知らず、
われは汝を宰相として永く使用したれば、如何に隠すとも隠されまじ。また春日
姫なるものは汝が魔術によつて現はれたる惡狐の化身なり。われいま玄關口にお

いて彼女を打仆しおきたり。さぞ今ごろは彼女が正體を現はし、身體一面に毛を生じ仆れをるならむ。汝もまた或ひはその狐なるやも計りがたし、化の皮を現はしてくれむ』

といふより早く、携へたる杖にて面上目がけて打据ゑむとするや、この時數多の從臣は、

『亂暴者』

と云ひながら、前後左右よりとりまき、その杖をもぎとりにけり。八王大神は目をもつて、神司らに何か合圖をなしければ、常世姫はじめ從者は一柱も残らず席を避けたり。

あとには八王大神と道貫彦とただ二柱のみ。ここに八王大神は座を立て下座に降り、一別以來の挨拶を聲低に述べをはり、かつ常世城の一切の祕密および春日姫が、命の眞の娘なることを打明け、固く口外せざることを約しける。道貫彦は始めて實の娘なることを悟り、心も心ならず、急ぎこの場を立て玄關に出たり。

春日姫は少しく面部に負傷しながら、依然として玄關に控へる。道貫彦は眞の吾が娘なることを覺り、飛びついて抱へたき心持したれど、大事の前の小事と動く心を見づから制し、目に物言はせながら素知らぬ顔に、この場を立去りにける。

(大正一〇・一二・二三 舊一一・二五 外山豊二録)

第二四章 思ひ奇や その二(一七四)

南高山の八王大島別は、八王大神に拜顔せむと玉純彦を従へ、玄關口に現はれたるに、ここには、春日姫、八島姫の二女性が受付兼應接の役にあたりたりければ、大島別は二女の姿を見て、呆然として立ちとまり、みづから我が頬をつねり眉毛に唾をつけ、玄關の階段めがけて、
『またもや白狐には非ざるか』

としきりに杖の先にて突き試みけり。玉純彦は聲を荒らげ、

八島の古狐またもや八島姫と身を變じ、吾を誑かさむとするか。ここは立派な

る玄關口と見せかけをるも、擬ふかたなき泥田の中、吾が天眼力にてこれを看破

せり。速に正體を露はし、尻尾を曲げ降伏するか。さなくば汝春日姫、八島姫と

稱する惡狐、目に物見せてくれむ

と言ふより早く、腰の一刀を引きぬき、頭上より梨割りに斬りつけむとしたるに、

二女は驚きて體をかはし、そのまま奥殿に走りいり、道彦の前に致つて救ひを乞

ひぬ。大島別、玉純彦は二女の後を追ひ杖を打ち揮ひ、長刀を閃かしながら亂入

する。

このとき常世姫以下數多の神司は、大いに驚き、各自得物をとつて、前後左右

より大島別および玉純彦に打つてかかりぬ。大島別は老身のこととて、たちまち

取り押へられ縛されたり。玉純彦はこれを見てますます怒り、獅子奮迅の勢を以

て、當るを幸ひ前後左右に斬りまくる。その勢に辟易したる常世姫以下は、倉皇

として蜘蛛の子を散らすごとく逃げ散り、姿をかくしたり。後には八王大神高座

に八重疊を敷き悠然として、この光景を見守りゐたり。

玉純彦は八王大神にむかひ、

「常世の國の邪神の變化思ひ知れや」

と、またもや打つてかかれれば、八王大神は少しも騒がず、玉純彦の利き腕を「ぐつ」と握りしめたり。玉純彦は強力の大神につかまれて、その場に顔をしかめて平伏したりけり。八王大神はただちに立つて、大島別の縛を解き、慇懃にその背をなでさすり、四邊をはばかりながら小聲になりて、常世城における一切の秘密を物語り、かつ眞正の八王大神は急病のため今は九死一生、命旦夕に迫る旨を耳うちし、自分は一旦聾啞癡呆となりゐたる大道別にして春日姫は眞の八王道貫彦の娘なること、および八島姫は眞の大島別の娘にして、南高山にある八島姫は白狐旭の化身なることを詳細に物語り、かつ今後の議場におけるすべての計畫を打合せたり。

大島別、玉純彦は、はじめて疑ひ晴れ、かつ大道別の智謀絶倫なるを感嘆し、二神司は喜び勇みて、その場を退場せむとする時、物蔭より現はれ出でたる八十

枉彦は、

「聞く神なしと思ふは、汝ら愚者の不覺、この由、常世姫に報告せむ」と足早に走り出むとするを、玉純彦はうしろより飛びかかり、長刀を抜き、背部よりただ一刀のもとに斬り付けたれば、八十枉彦は七轉八倒、手をもがき足を動かせ、虚空をつかんで脆くも絶命したりける。

ここに八島姫、春日姫は赤き布をもつて八十枉彦の遺骸をつつみ、その上をふたたび白布をもつておほひ、玉純彦の背に「しつか」とくりつけたり。

玉純彦は素知らぬ顔にヤツコス氣取りにて、大島別の後にしたがひ、六方を踏みながら足音高く城内を面白き歌を唄ひつつ退出したりける。

玉純彦は背の荷物を夜陰にまぎれて、草原の野井戸にひそかに投げ込み、素知らぬ風を装ひあたり。このことは常世城の何人も知る者なかりしといふ。

(大正一〇・一二・二三 舊一一・二五 櫻井重雄録)

第二十五章 燕返し（一七五）

八王大神は病氣まつたく恢復し、ふたたび會議を續行すべきことを八百八十八柱の神司に、常世姫より一々叮嚀に通知したれば、諸神司は先を争ひて大廣間に參集し、例のごとく八王大神はじめ常世姫、春日姫、八島姫、その他の常世城の神司らは、中央の高座に、花を飾りたるごとく立派なる姿をあらはしたり。この時行成彦はたちまち登壇して八王大神の急病まつたく癒え、ふたたびこの大切な會議に出席されたることを、口を極めて慶賀し、諸神司とともに萬歳を唱へ、かつ猿田姫、出雲姫、春日姫、八島姫をして祝意を表するため、壇上に、優美にして高尚なる舞曲を演ぜしめたり。四女性の艶麗優美なる姿は、あたかも柳の枝に櫻の花を咲かせ、白梅の薰りを添へたるごとくなりけり。頭には金色の烏帽子を戴き、衣服は揃ひの桃色、緋の袴を長くひきずりながら、四女は一度に手拍子、足拍子をそろへて、春の野の草花に蝶の戯むれ飛び交ひ遊ぶごとくなりける。諸神司は、この長閑なる光景に心魂を奪はれ、吾を忘れて眺めたり。

行成彦は壇上に立ち、優雅な聲調にて謳ひはじめたるが、鶯の春陽に逢ひ谷の
戸開いて、白梅の梢に春を謳ひ、鈴蟲の秋の野の夕に、涼しき聲にて鳴くにも似
たる床しき聲調に、四邊の空氣をたちまち清鮮ならしめたり。
その歌、

千早振る神の御心かしこみて チーバブリカンヨミコモトカスクミテ

天地四方の國魂や アメツツヨシノコキシタマ

八王の司や八頭 ヤツコスヨツカスヨヤツカムロ

ももの神たち八百萬 モモロカムタチャモヨロツ

常世の國に神集ひ トコヨヨクシイカムツトヒ

虎狼や獅子大蛇 トツオオカムヨシスオロミ

鬼も探女も曲津見も オヌモサヨメヨマトツミヨ

伊寄り集ひて村肝の イヨキクルミテムロイコヨ

心の雲を吹き拂ひ コモトヨコモヨフチハロチ

拂^{はら}ひ清^{きよ}めて神^{かみ}の世^よの 八^{はち}口^{くち}チコソメテカムホヨヨ
 目^め出^で度^たき光^{ひかり}照^{てる}妙^{たへ}の メロトチフカリテロトオヨ
 綾^{あや}と錦^{にしき}の大^{おほ}御^み機^{はた} アヨヨ又^{また}スコヨオオムホト
 織^おりて神^{かみ}世^よのまつりごと オリテカムヨヨマツイコヨ
 堅^{かき}磐^は常^と磐^{きは}にたてよこの カコハトコハイタトヨコヨ
 神^{かみ}の任^よさしの神^{かみ}みたま カムヨヨサイヨカムミトモ
 世^よに出^いでまして美^{うる}はしき ヨニウテモステウロホスク
 榮^{さか}えみるくの大^{おほ}神^{かみ}の サコエミロクヨオオカムヨ
 安^{やす}けき國^{くに}を守^{まも}らむと ヨソケシコモヨモモロムト
 心^{こゝろ}めでたき常^{とこ}世^よ國^{くに} コモトメテトキトコヨクシ
 うしはぎ坐^あすところよひこ オソフクイモストコヨホコ
 とこよの姫^{ひめ}の世^よをなげき トコヨヨホメヨヨノゲク
 ももの千^ち草^{くさ}のあ^あら風^{かぜ}に モモヨツクソヨアロコセイ
 倒^{たふ}れ苦^{くる}しむわ^わざはひを トヨレコロスムワロワイヨ

救はむためのもよほしは スクホムトメイモヨホスヨ
 この天地の開けてゆ コヨアメツツヨフロケトヨ
 ためしあらしのしづまりて トモスアロスヨスヅモリテ
 常世の春の常永に トコヨヨホロヨトコスエイ
 千代萬世も動きなく トヨヨロヅヨヨヨロギノク
 高天原も賑はしく タコオモホロヨ又グホスク
 千歳の松の色あせず トツセヨマツヨウロアセズ
 枝葉も繁るくはし世に エロホヨスゲリクホスヨイ
 立直さむと身を忘れ トチノヨソムヨムヨワスリ
 家を忘れて朝夕に ウヘヨワスレテアソヨベイ
 心を盡し身を盡し コモトヨツクイモヨツクイ
 四方の雲霧吹拂ひ ヨモヨコモクリホキホロヒ
 國治立の大神の クシホロトチヨオオカムヨ
 いかしき御世を守らむと ウカスキムヨヨモモラムト

開ひらきたまひしこの集つどひ フロキトモイスコヨツドイ
集つどひ來きたりし行ゆき成なり彦ひこも ツドヒコモステユキノリホコモ
もろてをあげてこのたびの モロテヨアゲテコヨトヒヨ
常とこよ世よの彦ひこの御みこころに トコヨヨホコヨミコモトイ
まつろひまつり常とこやみ暗みの マツロイマツイトコヨミヨ
世よをとしへに照てらしなむ ヨヨトコシエイテラスノム
百ももの神かみたちみともたち モモヨカムトチミトモトチ
一ひとひ日も早はやくかた時ときも ヒツカモホヨクカトトキヨ
いと速すみやかにかたりあひ イトスムヨコイカトリアイ
けふのつどひをうれしみて ケフヨツドイヨウロスミテ
むなしく過すしすことなかれ ムノスクスゴスコトノコレ
國くに治はる立たちの神かみのまへ クシホロトチヨカムヨミエ
常とこよ世よの神かみのうるはしき トコヨヨカムヨウロホスキ
赤あかき心こころをうべなひて アコキコモトヨウベノイテ

四方よもの神かみ人びと草くさや木きの
 ヨモヨカムフトクサヨコヨ
 さやぎの聲こゑを静しづめかし
 サヨギヨコエヨスズメカス
 救すくひの神かみとあれませる
 スクイヨカムヨアレモセル
 國くに治はる立たちの神かみごころ
 クシホロトチヨカムコモト
 ただに受うけまます常とこよ世ひこ彦
 トドイウケモストコヨホコ
 とこよの姫ひめのひらきてし
 トコヨヨホメヨホロキテス
 これのもよほしいときよし
 コレヨモヨホスイトキヨス
 きよきごころの百ももの神かみ
 キヨキコモトヨモモヨカム
 八王やつわうの司つかさやつはもの
 ヤツコスヨツカスヨツホモヨヨ
 猛たけきうつはをとりぞぎ
 トケキウツホヨトリヨゾキ
 その根底ねそこよりあらためて
 ソヨネトコヨイアロトメテ
 はやとりのぞき大神おほかみに
 ホヨトリヨゾキオオカムイ
 叶かなひまつねよ松まつの世よの
 カノイモツリテマツヨヨヨ
 神かみのごころの神かみぞ目め出で度たく
 カムヨコモトヨカムゾメデトキ

松まつの心こころの神かみぞ目め出度でたけれ

マツヨコモトヨカムゾメデトケレ[㊦]

行成彦ゆきなりひこは、以前いぜんの極力きよくりよく反對はんたい的てきの態度たいどに打うつて變かはり、八王大神やつわうだいじん贊成さんせいの歌うたを作り、その豹變へうへん的てき態度たいどに諸神司しよしんを驚異きやういせしめたり。八王大神やつわうだいじんは欣然きんぜんとして、無言むごんのまま行成彦ゆきなりひこの讚美さんびの歌うたを、耳みみを澄すまして聞きき入りぬ。

常世姫とこよひめは、行成彦ゆきなりひこの行動かうどうに合點がってんゆかず、首くびをしきりにかたむけ、思案しあんに暮くるるもののごとくなりける。

行成彦ゆきなりひこの豹變へうへん的てき態度たいどをとりたるは、八王大神やつわうだいじんの偽物にせものたることを、よく知悉ちしつしむたるが故ゆゑなり。四柱よはしらの女性によしやうは満座まんざに一禮いちれいし、得えもいはれぬ愛嬌あいけうを振ふりまきながら静々しづしづと降壇かうだんしたり。このとき末席まつせきより發言はつげん權けんを請求せいきうして登壇とうだんする神司しんしあり。

これは長白山ちやうはくざんの八王有國彦やうわうありくにひこにして、その神格しんかくは温和おんわにして至誠しせい一貫いつくわんの神司しんしなり。やや頭あたまの頂いただきに禿はげを現あらはし、背丈せたけはスラリと高たかく、どこともなく威徳ゐとく具そなはりて見みへけり。いまや行成彦ゆきなりひこの豹變へうへん的てき歌うたを聞ききて、平素へいその溫柔おんじうなる性質せいしつにも似合にあはず、猛然まうぜんとして立上たちあがり登壇とうだんしたるなり。諸神司しよしんは彼の顔色かれがんしよくのただならざるを見みて、その發はつ

言のいかんを氣遣ひける。彼は口を開いて、

「満座の諸神司よ、吾々は今回の大會議については、許多の疑問胸中に山積せり。第一に泥田の中の失態といひ、同じ姿の女性の續出せる怪といひ、八王大神の急病といひ、森鷹彦の異變といひ、數へきたれば限りなき怪事の續出すること、あたかも妖怪變化の巢窟ともいふべき有様ならずや。しかのみならず聖地エルサレムの天使長廣宗彦の代理たる行成彦の軟化豹變、燕返しの曲藝的行動の不審千萬にして逆睹すべからざるに非ずや。思ふに行成彦も、連日の疲勞の結果精神に異状をきたせしにはあらざるか。ただしは前日來議場を攪亂しつつありし邪神惡鬼に憑依され、誑惑されて、その大切な使命を忘却し、かかる變説改論の醜を演じたるには非ざるか。熟考すればするにつけ腑に落ちぬことのみ、如何にしても、吾らは何處までも疑はざるを得ぬ。要するに、今回の會議は怪より始まりて怪に終るにあらざるか。吾々は國祖國治立命の聖慮に背き、神界の御制定になれる八王神の聖座を撤廢し、野武士的神政を樹立せむとする惡平等主義の、反逆的目的を根底より破壊せむとの、國祖大神の御心に出づる諸神人への嚴しき懲戒の鞭を

加へさせたまひしものと斷ぜざるを得ず。ゆゑに吾々は失禮ながら今日かぎり本會議を脱退せむ。諸神司よろしく吾々の行動をもつて本會議を亂すものとなす勿れ

と聲に力をこめて述べをはり、降壇せむとするや、

「暫く、しばらく」

と大聲に呼ばはる神司ありける。

(大正一〇・一二・二三 舊一・二五 出口瑞月)

第二六章 庚申の眷屬(一七六)

有國彦は、常世會議より脱退せむことを宣言し、降壇せむとするや、
「暫く、しばらく」

と、大聲に呼ばはりたる神司は、ヒマラヤ山の八王高山彦なりき。高山彦はただ

ちに登壇し満座を睥睨し、おもむろに口を開いていふ。

「そもそも今回の會議は、八王の撤廢をもつてその眼目とするもののごとし。八

王大神はさきに八王聯合を圖り、一大團結をもつて、聖地エルサレムの天使長

大八洲彦命以下の神司を協力一致彈劾して失脚せしめたるは、今日にいたつて考

ふれば、吾々は實に天則違反の非行爲なりと思ふ。その後の世界一般の形勢は、

ますます惡化し紛糾混亂の巷と化し去りしは、はたして何に原因するものぞ。吾々

は思ふ、これ全く國祖の大御心に叶はざるがためなりと。しかるに今回の提案た

るや、各山各地の八王八頭の政令おこなはれず、地上の世界はあたかも修羅の巷

と化しさりしを口實に、また八王の無能を口實としてこれを撤廢し八王大神みづ

から特權を握りますます欲望を完全に達成せむとするの下心あることは、吾々の

天地の大神に誓つて聲明するところのものである。ゆゑに吾々の考へとしては、

八王の撤廢論をすみやかに撤回し、八王一致團結して各自の中より主宰者を選出

し、確固不動の團結を造り、もつて國祖の聖慮に叶へる神政を顯彰し、地の高天

原に従前の過失を詫び、國治立命の管理のもとに服従し、誠心誠意歸順の實を擧

ぐるに如かずと思ふ。諸神司の賛否如何

と述べ了るや、満場破るるばかりの拍手と賛成の聲に充たされける。

高山彦は笑を満面にたたへながら、

「諸神司は吾が主張にたいし、十二分の賛成を表したまへり。これより總統者の選舉に移らむ」

と言ふや、高座の上左側に控へたる行成彦はふたたび登壇し、

「高山彦の説に吾々は雙手を擧げて賛成するものなり。ついては従前のごとく八王大神をもつて總統者と選定せば如何」

と提議したり。満場の諸神司は行成彦の提議に一も二もなく賛成の意を表したれば、いよいよ八王の撤廢は否決され、八王大神これを總統することとなり、地の高天原に直屬し、柔順に國祖の神命に奉仕すべきことを決定したりけるは、世界平和のため慶賀にたえざるなり。

高山彦はふたたび口を開き、

「世界平和のために各自の神司らの武装の一部を撤廢するの件は、諸神司におい

ても御異存なかるべきを確信す。賛成者はすみやかに起立されむことを
と述ぶるや、諸神司のほとんど八分までは、一齊に起立し、かつ賛成を唱へたる。
その聲あたかも常世城も震動するばかりなりける。

八王大神は高座の中央に黙然として控へ、庚申の眷屬よろしく、見ざる、聞か
ざる、言はざるの三猿主義を採り居たるもののごとし。常世姫は事ここにいたつ
ては如何ともするに由なく、たちまち容色を和らげ満場の諸神司にむかつていふ。

「諸神司らの誠心誠意世界の平和を希求さるるは、八王大神をはじめ吾々の實に
欣喜に堪へざるところであります。要するに八王大神をはじめ大自在天の提議に
かかはる八王の撤廢案は、その實諸神司の誠意のあるところを伺はむための反正
撥亂的神策でありまして、もはや吾々は諸神司の至誠公に奉ずるの御精神を實地
に拜察しました以上は、何とも申し上げやうはありませぬ。従前のごとく八王大
神をもつて八王の總統者となし、聖地にたいし協力一致歸順の誠をいたせば、今
回の大目的は、完全に成功したものといつて差支へはないのであります」
と打つて變りし常世姫の燕返しの變節改論に、諸神人は思はず顔を見合はし、そ

の先見の明と機敏に舌をまきにける。

常世姫はふたたび口を開き、

「かくの如く決定する以上、たがひに和衷協同の實を擧げ、もつて律法を遵守し、至誠至實の結合を見たる上は、あながちに、各神人の武装を撤回するの必要は無きものと考えへます。要はただ諸神司の心を改むるにあるのみ。この點については、いま一應御熟考を願ひます」

といつてのけ、自分の席に歸りける。

（大正一〇・一二・二四 舊一・二六 外山豊二録）

第二十七章 阿鼻叫喚（一七七）

行成彦は、ふたたび立つて壇上に現はれ、さも快活なる面色にて諸神人にむかひ、

「ただ今、高山彦の周密精細なる主張と、賢明仁慈なる常世姫の演説について、諸神人は全會一致をもつて賛成せられたることを、吾々は聖地エルサレムの天使長廣宗彦の代理として本心より歓迎するものであります。これまつたく諸神人が誠心誠意國祖大神の聖慮を奉戴し、神界の平和を熱望さるる結果と信じて疑ひませぬ。ついてはただ今常世姫は各神人の武裝撤廢については、その必要なきを詳論されましたが、私はこの際武裝の撤廢を斷行したいと思ひます。諸神人の御感想を承はりたし。賛成の諸神人はすみやかに起立を願ひます」

この提案に對して、満座の神司らは六分まで起立して賛意を表しける。行成彦はこれを見て、

「御承知のごとく、過半数の賛成を得ました。ついては速やかに實行にかかれむことを希望します。武裝の撤廢の方法については、龍神はその玉を取り、獅子、虎、熊、狼などの眷屬はその羽翼を全廢し、鰐、鯨および海龍はその針毛を撤廢し、白狐は堅き金毛銀毛および鐵毛を撤廢し、中空を翔る鳥族はその咽下の毒囊を排除せざれば、眞正の平和を永遠に維持することはできないと考へます。この

件けんについては、まづ第一だいいちに常世城とこよじやうの神司かみがみらより模範もはんを示しめされむことを希望きぼうします
と述べ終りをは、悠々いいううとして降壇かうだんし、自席じせきにつきぬ。常世姫とこよひめの顔色がんしよくは、にはかに失望しつぼう
落膽らくたんの影浮かげうかび出いでぬ。八王大神やつわうだいじんは莞爾くわんじとして高座かうざに控ひかへ、操あやつり人形にんぎやうのやうに首くびを
上下じやうげに振りふ、贊成さんせいの意いを形容けいように表へうしむたりける。

この様子やうすを見みたる常世姫とこよひめ、大鷹別おほたかわけ一派いっばの神司かみがみらは齒嚙はがみをなして口惜くやしがりた
れど、議場内ぎぢやうないの形勢けいせいは如何いかにともするに由よしなかりける。

このとき、森鷹彦もりたかひこは兩肱りやうひじを張りは、拳固げんこを固かため勢いきほひよく登壇とうだんし、満座まんざの壇上だんじやうにてそ
の正體しやうたいを露あらはし、巨大きよだいなる獅子ししとなり、矢庭やにはに右みぎの手てをもつて左ひだりの羽翼うよくをメリメ
リとむしりとり、壇下だんかの神人かみがみの前に投なげ捨すてたり。今度こんどは左手ひだりてを背せなか中にまはして、
右みぎの羽翼うよくを顔かほをしかめながら又またもやメリメリとむしりとり、その羽翼うよくを口くちにくは
へ、壇下だんかを目めがけて山嶽さんかくも崩くづるばかりの唸うなり聲こゑを立て巨眼きよがんを光ひからせ、雄叫をとけびし
ぬ。神人しんじんらの顔色がんしよくはサツと變かはりぬ。

このとき、春日姫かすがひめとともに常世城とこよじやうに逃のがれぬ鷹住別たかすみわけは、立たつて壇上だんじやうにのぼり、
ア、諸神人しよしんよ、言説げんせつよりも實行じつかうをもつて第一だいいちとす。神人かみは言心行げんしんかう一致いっぢちをもつて

精神とす。貴下らは國祖大神より神人の神格を賜ふ。この場に臨みて女々しく躊躇逡巡するは決して名譽ある神人の度量に非ざるべし。まづ常世城より實行されむことを希望す。常世城の神人にしてモスコの從臣森鷹彦に倣はずば、吾々は進んで諸神人の武装を排除し奉らむ。八王大神においては御異存ありや」と向き直りて問ひつめたり。

八王大神はさも愉快さうなる面色にて首を上下にしきりに振り、大贊成の意を表したり。常世姫は憂ひ悲しみ、内心狼狽の色面に表はれたり。行成彦は満座の諸神人にむかひ、

「諸神人よ、一齊に本城の神人らの屯所に出張し、武装撤回を監督されよ」と、さも得意氣に命令的に述べ立てたり。

血氣にはやる神人はまづ自分の羽翼を除き、あるひは牙を抜き、その場に投棄し、猛然として神人らの駐屯所に侵入したり。しばらくあつて、叫喚の聲、咆吼怒號の雷聲は城内に響き渡りける。八王大神はこの聲に驚き、病軀を提げ壇上に馳せ上り、武装撤回中止を嚴命したり。森鷹彦は巨大なる獅子に還元したるまま

眼を怒らせ、牙を立て八王大神目がけて飛びかからむとする猛勢を示し、ときどき雷のごとく咆吼し、八王大神を威喝しつつありける。神人らは自席より口々に、
「偽八王大神を引ずり落せ。今となつて、卑怯未練に諸神人の決議を無視するは、われわれを侮辱するの甚だしきものなり。現に常世城の城主八王大神の黙許を得たり。何れの癡漢ぞ、速やかに退去せよ」
と口をそろへて唖鳴り立てたり。

森鷹彦の獅子はまたもや後來の八王大神に向つて唸り立てたれば、場内はあたかも戦場のごとく修羅道のごとき光景とたちまち變じたりける。このとき三猿主義をとつて壇上に控へたる聾啞癡呆と思ひし道彦の偽八王大神は、猛然として立ち上り、満座を一瞥し、
「ただ今これに控へたるは八王大神と稱すれども、彼は容貌吾に似たりといへども、その實はモスコの八王に仕へたる道彦といふ發狂者なり。諸神人はかかる發狂者の言に耳をかたむけず、すみやかに武装撤回を斷行されよ」
と言ひければ、眞正の八王大神は齒噛みをなして口惜しがれど、身から出た錆の

如何ともするに由なく、主客顛倒したるこの大勢を挽回することは到底不可能なりける。このとき八王大神は猫に出會ひし鼠のごとく、萎縮して何處ともなく姿をかくしたり。常世姫の影は忽然として消え失せたり。神人らの叫喚の聲は實に物凄く、寂寥身に迫り、聞く者をして肌に乗を生ぜしむるにいたりける。たちまち天の一方より峻烈骨を裂くごとき寒風吹ききたるよと見る間に、王仁の身は高所より深き谷間に顛落したりけるより、目を開けば、身は高熊山の岩窟に寒風にさらされて横様に倒れみたりける。

（大正一〇・一二・二四 舊一一・二六 櫻井重雄録）

第二十八章 武器制限（一七八）

神代における神人らの武装撤回は、現代の某會議のごとき、軍艦や潜航艇の噸數を制限する如き不徹底なるものではなく、神人らの肉體上に附着せる天授の武

装を一部分、または全部除去することとなりける。太古の龍は嚴めしき太刀肌を備へ、かつ鋭利なる利刃のごとき角を、幾本ともなく頭に戴き、敵にたいしてその暴威を揮ふとともに、一方にはこれを護身の要器となし、互ひに争闘を續けたりしなり。ゆゑに今回の常世會議に於て八王大神の提議したる、神人各自の武器の廢止は、神界のためにはもつとも尊重すべき大事業なりける。すなはち龍神はその鋭角を二本に定められ、他は残らず抜き取られ、その嚴めしき太刀肌は容赦なく剥ぎ取られて、柔軟なる鱗皮と化せしめられたり。中には角まで全部抜き取られて、今日の蛇のごとく少しも防禦力の無きものになりたるもあり。

また猛虎や、獅子や、巨狼や、大熊のごときは鋭利なる爪牙を持てる上に、空中飛行自在の羽翼を有し、かつその毛は針のごとく固くして鋭く、實に攻撃防禦とも極めて完全なりけるが、それをいよいよ一部分の撤回となりて、これらの猛獸の神卒はその針毛を抜かれ、空中飛行にもつとも便なる羽翼を無殘にも斷たれける。

また金毛九尾白面の惡狐、その他銀毛や、鐵毛の狐神などは、その鋭利なる固

き針毛を全部脱却させられ、そのあとに軟弱なる毛を生ずるのみに止め、その代償として智慧の力を神人に勝劣なきほどまで與へられ、神界の眷屬として、忠實に奉仕する役目と定められたり。しかし狐神にも善惡正邪の別ありて、善良なる狐神は白狐として神界の御用を勤め居るは、太古の世より今にいたるも變らざるなり。世には狐神を稻荷の大神と稱へて居るもの澤山あれども、稻荷は飯成の意義にして、人間の衣食の元を司りたまふ神の御名なり。

豊受姫神、登由氣神、御饌津神、宇迦之御魂神、保食神、大氣津姫神は皆同神に坐しまして、天祖の神業を第一に輔佐したまひたる、もつとも尊き神にして、天の下の蒼生は一人として、この大神の御仁徳に浴せざるもの無し。

要するに狐神はこの大神の御使にして、五穀の種を口に銜へ世界に持ち運び、諸國の平野に蒔き擴げたる殊勳ある使者なり。世はおひおひに開けて、五穀の種も世界くまなく行きわたりたる以上は、狐神の職務も用なきにいたりければ、大神はこの狐に勝れたる智慧の力を與へて、白狐と命名され、すべての神人に世界の出來事を、精細に調査し進白せしめられにける。ゆゑに白狐とは、神人に世界

一切の出來事を【白】し上げる【狐】の意味にして、決して毛色の白きゆゑにあらずと知るべし。野狐、惡狐等の風來狐でも、年さへ寄ればその毛色は漸次に白色に變ずるものにして、あたかも人間が貴賤の區別なく、老年になりて頭髮の白くなると同様なり。ゆゑに毛色は、たとへ茶でも、黒でも構はぬ、神界に仕へる狐を白狐とはいふなり。

また空中を飛翔する猛鳥にして、立派なる羽翼を有するうへに咽喉の下に大なる毒囊を持ちあたるものありしが、これも今回の會議の結果取り除かれたりければ、地上の神人その他の動物は實に安心して日を送り得るに至りたるなり。また海中に棲める魚族や海蛇はいづれも鋭利なる針毛を鯨のごとくに、または針鼠のごとく全身に具備し攻防の用に供しめたりしを、その針毛をまた除去され、鱗、牙のみ殘されたるなりといふ。

かくして武装を除去されたる龍族は、漸次に進化して人間と生れ、あるひは神と生るるにいたるものなり。また獅子、虎、豹、熊、狼などは、世とともに進化して、人間と變じ、牛馬と生れ、犬猫などと生れ變りたるなり。その中に百獸の

王たりし、獅子や虎豹なぞはその身魂の善進したるものは人間と變化したり。ゆゑに人間、ことに或る人種のごときはその容貌いまに獅子や虎、豹などの痕跡を止め居るなり。かかる人種の性質は、いまに太古の精神までも多少遺傳して、人情冷やかく、色食の欲にのみ耽り、體主靈從の行動を取り居るもの多し。王仁がかくのごとき説をなす時は、人間を馬鹿にしたといつて怒る人士もあるべし。しかし王仁は元來無學で、人類學なぞ研究したることも無く、ただただ高熊山の神山に使神に導かれて、鎮魂歸神の修業の際、靈感者となり、神界探險の折、靈界にて見聞したる談なれば、その虚實の點については、如何とも答ふる由なきものなり。

(大正一〇・一二・二四 舊一一・二六 出口瑞月)

第五篇

局面一轉

第二十九章 月雪花（一七九）

風は新柳の髪を梳けづり、浪は青苔の髯を洗ふとは菅公の詩なり。

頃は彌生の央ごろ、天津日の神は西の山の端に隠れ黄昏の雲ただよふ。地には

燕の翩翩として忙しげに梭を織り、神人みな春の日長に睡眠をもよほす、時しも

東の空の雲の戸開けてたち昇る朧の月影は得もいはれぬ長閑さなりける。

照りもせず曇りも果てぬ春の夜の

朧月夜にしくものぞなき

と古人の詠へる歌は實にこの光景を描寫して遺憾なしと思はれたり。

ここに聖地エルサレムの桃上彦は、常に心中おだやかならず、不平満々の中に

この長き春の日を過ぎしつありぬ。たちまち吹きくる夜嵐に、庭園に今を盛り

と咲き誇りたる八重櫻は苦もなく風に打ち落されたり。寢所にありて寝もやらず

千々に思ひをくだき嵐の音に耳を澄ませ、首を延ばして屋外の光景を聞き入る時

しも、

『桃上彦、桃上彦』

と呼ぶやさしき女性の聲、嵐の音に交ぜりて聞え來たりぬ。桃上彦は不審の念にかられ、ひそかに戸を開けて庭園に出で、遠近と所狭きまで散り積りたる花の庭を逍遙し居たりける。

空には満月朧に懸り、地には花の筵を敷きつめたるごとく、月と花と相映じて得もいはれぬ雅趣をそぞろに感じける。このとき庭園の一隅より庭木を押し分け、雪をあざむく純白の女性忽然として現はれけるに、桃上彦はあたかも月雪花に包まれて天國に遊ぶの愉快を感じたり。女性は桃上彦の前に近くすすみ、叮嚀に腰をかがめ敬意を表しける。桃上彦は朧月夜のため何れの女性なるかを判別するに苦しめぬ。このとき女は、

『貴下は我がもつとも敬愛する桃上彦に在さずや』

と袖をもて顔を覆ひ、腰を屈め恥かしげに花のごとき優しき唇を開きたり。桃上彦は倒れむばかりに驚きいたる。この體を見てとりたる女性はしづかに、

『行成彦らは常世城の大會議において、傍若無人にしてほとんど天使長の代理た

るの資格なく、諸神人環視のうちにて終生拭ふべからざる恥辱を印したり。妾はいま常世の國にありて、神政を輔佐しつつあれども、元來妾が出生の聖地なる高天原を一刻も忘れたることなし。しかるに聖地の代理として出張したる行成彦の行動は實に聖地を辱しむるものなれば、妾は悲歎に堪へず、如何にもして聖地の權威と聲望とを回復せむと日夜焦慮し、遠き海山を越え纖弱き女性の足の痛みも、聖地を思ふ誠心のあまり打ち忘れ、夜を日につぎてここにその實情を貴下に懇へ、善後策を講じ、もつて國祖の神慮に叶ひたてまつらむとす、貴下の聖慮いかに」と言葉たくみに小聲に述べ立てたるに、桃上彦は驚くかと思ひきや、満面に會心の笑をもらしける。月と花とに照されたる桃上彦の笑顔をチラリとながめたる女性は、得意の色を満面に漂はしたりき。

若き男の清き姿と、浦若き女の姿は、しばらく花の庭に無言のまま立ち停まれる折しも月は雲の戸さらりと左右に開き、あたかも秋天の明月のごとく、光り輝ける二人の顔はいやが上にもその艶麗を加へたり。天には皎々たる月影蒼空を照し、下には大地一面の花筵、その中に窈窕鮮麗なる若き男女の二人、漆のごとき

黒髪を長く背後に垂れ、庭園を逍遙する有様は、天人天女の天降りたるがごとき高尚優美の面影をとどめける。

桃上彦は若き男女の夜中に私語するを他神司に見つけられ、痛からぬ腹を探られ、思ひも寄らぬ濡衣を着せられむことを遠く慮り、女を伴なひ態と足音高く殿内に進み入りぬ。桃上彦は女性にむかひ何事かささやきながら戸の入口にて袂を分ちぬ。この麗しき女性は果して何人なりしならむか。

(大正一〇・一二・二四 舊一一・二六 加藤明子録)

第三〇章 七面鳥(一八〇)

聖地の天使長廣宗彦命は、常世城における會議の結果と、行成彦一行の消息如何にと心を悩ませるたる折しも、桃上彦の從臣なる八十猛彦、百猛彦は慌ただしく廣宗彦命の前にあらはれ、その面上に一種異様の色をうかべて、

「急變あり、隣人を遠ざけたまへ」と奏上しける。

廣宗彦命は二人の畜ならざる顔色に不審の眉をひそめながら、その言を採納して從臣らを殘らず別室に立去らしめたり。二人は肩を怒らせ肱を張り、眼を丸く光らせ、口を尖らせ、何物にか襲はれたるとき形容にて、

「天使長よ、常世の會議について一大事變突發せり。天則破壊の張本人は貴下の代理として出張されし行成彦一行なり。ただ今常世姫遙々來城ありて、その詳細を貴下を通じ、國祖の大神に奏上すべく準備中なり。いかが取計らはむや」と二人は異口同音に符節を合したるごとく奏上したり。二人の一時に同じ語を揃へて發したるも道理、二人は野心つよき桃上彦の命により、持てる笏板の裏にこの奏言を書き記して讀みあげたればなり。

廣宗彦命は二神の意外なる報告に茫然として返す言葉も出ざりし。時しも桃上彦は、常世姫の後にしたがひ、悠然として入りきたり、勝ち誇りたる面色にて、その麗はしき白き顔を空に向つて少しくしやくりながら、

「ただ今これなる常世姫、常世城の常世會議の報告のため、はるばる來城あり。速かに國祖の大神に、この由傳奏せられたし」

と叩きつけるやうに云ひければ、廣宗彦命は弟の高慢不遜なる態度に憤懣せざるを得ざりけり。されど天地の律法に省み、わき立つ胸をジツとこらへ、さあらぬ體にて、

「常世姫遠路の御旅行、御疲勞のほど察し入る。先づこれにて御休息あれ」と席をゆづつて側に端坐したり。常世姫は、何の憚るところもなく、

「しからば高座を許されよ」

と悠然として座に着きぬ。この時の姫の態度は、群雀の中に丹頂の鶴のただ一羽、天空より舞下りしごとく、一種不可思議の威嚴をもつて、諸神司を壓伏するやに見えにける。

常世姫は、慇懃に一別以來の挨拶を述べ、かつ行成彦を聖地の代理として、はるばる常世城に派遣されしその好意を感謝し、かつ八王大神はじめ我身の不覺より、千載一遇の大會議をして紛糾混亂の極に達せしめ、かつ聖地の使臣らの一片

の誠意なく、權謀術數のみをこれ事とし、神格を傷つけたることを遺憾とするの旨を言葉さはやかに諄々として述べ立てたり。

廣宗彦命は頭上より突然冷水を浴せかけられたるとき心地して、答ふる言葉も知らざりき。姫はなほ語をついで、

「妾は貴下の知らるごとく、國祖國治立命の娘稚櫻姫命の第三女にしてこの聖地に永く神務を執り神政を輔佐したてまつりたるは、貴下の熟知さるところならむ。妾は身はたとへ海洋萬里を隔てたる常世の國にありといへども、聖地を忘れたることは瞬く間もなし。今回の常世會議は、神定の聖地にて開かざりしは、第一八王大神はじめ妾の失態には相違なけれども、今日の聖地の實況に照し、深く思ひ、遠く慮りて聖地を避け、常世城に開催したるもその眞意は、聖地の混亂紛糾の内情の天下に暴露せむことを恐れたればなり。しかるにただ單に吾々夫婦の野心遂行のために、常世城に諸神司を集めこれを籠絡せむとしたりとの聖地の使臣らの言は、實に亂暴の極にして天地の大神も、各神人も共に齒ひせざるの大非行なりと信ず。賢明なる貴下は天使長たるの資格をもつて、妾が陳述の詳細を

國祖の神に進言されたし。貴下にして直接進言を肯じたまはざれば妾を大神の御前に導きたまへ」
と進退させぬ言靈の猛烈なる釘、鋸を打たれる廣宗彦は思はず額を撫で、頭を掻き太き息を漏らすのみなり。

このとき桃上彦は猛然として立上り、

兄上に一言せむ」

と威猛高に呼はる折しも、門外俄に騒がしく、廣若を真先に二三の從臣慌しく入りきたり、廣宗彦命に向ひて、

行成彦の御一行御歸城あり」

と報告したりけるに、常世姫、桃上彦の顔色は、七面鳥のごとくさつと色を變じたりける。ア、この結果は如何。地震か暴風雨の襲來か、次章に明白とならむ。

(大正一〇・一二・二四 舊一一・二六 外山豊二録)

(第二章) 第三章 昭和一〇・一一・二一 於久留米市 布屋旅館 王仁校正)

第三章 傘屋の丁稚（一八一）

花のかんばせ月の眉、雪をあざむく優美姿の常世姫も、行成彦の一行御歸城あり、との急報に驚異の眼を見張り、不安の色を漂はしける。この光景を見て取つたる桃上彦は、ただちに八十猛彦、百猛彦に目配せしければ、二人はうなづきながら急遽表に驅出したり。これは行成彦以下の神人を龍宮城に導くためなりける。二人は、あまたの部下を率ゐて一行を出迎へ、今回の遠旅の使命を了へ無事歸城せられしを祝し、かつその勞苦を謝しける。

行成彦はまづ兄の天使長に拜顔せむことを望みけるに、二人は言を設けて、ただ今天使長は國祖大神と御懇談の最中なれば、暫時この城内に休息されたと進言したりける。行成彦命以下の神司らは、遠路の疲勞を慰せむとその言にしたがひ、城内の別殿に入り休息したり。諸神將卒一同も又龍宮海に瀕せる高樓に登り、春の海面に陽炎のきらめき渡り温かき風のおもむるに小波の皺を海面にゑがき、水莖の文字の清く美しく彩る長閑な光景を見やり、祝ひの酒に微酔の面をさらし

つつ、廣宗彦命の招き出しをいまや遅しと心待ちに待ちぬたり。しかして行成彦一行は、先だちて常世姫の來城せることを夢にも知らざりにける。

廣宗彦命は行成彦一行の歸城と聞き、一刻も早く面會して、その真相を聞かむことを急ぎたれど、常世姫、桃上彦の二人のために止むを得ず促されて、國祖の御前に參進したり。常世姫は國祖の御前に恭しく低頭平身して、御機嫌を奉伺し、かつ八王大神および吾身の自由行動の律法に違反せることを涙を流して陳謝し、速やかに天地の律法に照し嚴罰に處せられむことをと泣いて訴へ、かつ行成彦をはじめ聖地の使臣らの權謀術數の奸手段を弄して大會議を攪亂し陋劣極まる手段を用ゐて、神司らを煽動し、つひに天地の律法を破り、天下にその暴状と卑屈とのあらむ限りを遺憾なく暴露し、聖地の威嚴をして、まつたく地に落さしめたりと、虚實交々進言したり。【國祖は顔色俄に一變し一言の挨拶もなく奥の一室に入り玉ひけり。】廣宗彦命、常世姫、桃上彦は是非なく退出して錦の館に引上げたり。

ここに行成彦は、今回の常世會議において、殊勳を建て八百八十八柱の神司ら

の精神を統一し、聖地の危急を根底より救ひたる大道別をはじめ猿田姫、出雲姫を先導に、八王八頭を従へ天にも昇る心地して、得々とし意氣昇天の勢をもつて、衆望を一身に集め、八王大神なる大道別とともに潔く歸城したるなりき。

この光景を窺知したる桃上彦は嫉妬の念押ふるに由なく如何にもして行成彦を聖地より排除せむと、ここに常世姫と計り、國祖に虚實交々言辭をたくみに讒言したるなり。

聖地に今回参向したる、八王以下は、モスコの道貫彦、南高山の大島別および玉純彦、森鷹彦の四神司と聖地の神司らより外には、八王大神を大道別の偽八王大神たりしことを知るものなかりける。

ここに行成彦は、廣宗彦命、事足姫に謁見をもとめ、常世城における大成功を詳細に物語り、かつ大江山の鬼武彦をはじめ、高倉と旭の殊勳を物語り、なほモスコの宰相たりし大道別の永年の苦心より、つひに八王大神の替玉に選まれ、八王大神および大自在天の大陰謀を根底より覆へし、各山各地の八王以下を、心底より歸順せしめたることを、一々詳細に物語りける。

廣宗彦命は、弟の捷報を一夕聞き終りて歡喜するならむと、從臣一行は御兄の様子を窺居たり。されど廣宗彦命の面上には、何となく暗影のさし居ることは歴然として表はれ居たり。行成彦をはじめ御母の事足姫は、不審に堪へざるものごとし。廣宗彦命はやうやく口を開き、

「大道別はいま何處にありや」

と尋ねけるに、行成彦は何心なく、

「ただいま別殿に諸神司に護られ、八王大神となりて休息せり。しかして諸神司の大部分は八王大神常世彦と確信しつつあり。この機を逸せず、彼の口をもつて八王大神を辭職せしめ、諸神司をして御兄の直屬のもとに歸順せしむるの神策確立せり。兄上よ歡ばせたまへ」

と一切の祕密を打ち明けたる折しも、廊下に小さき足音聞えきたりぬ。はたして何人の立聞きならむか。兄弟二人は聲をひそめて、その足音のする方に耳をかたむけたり。

天に口あり壁に耳あり、慎むべきは、密談なりける。

第三章 免れぬ道(一八二)

しばらくありて桃上彦は、慌ただしく入りきたりて二人の前に拜跪し、畏れ多くも國治立命より吾母事足姫をはじめ御兄廣宗彦命、行成彦にたいし大至急參向すべしとの嚴命なりと報告したり。

桃上彦は天使長廣宗彦命の副となりて、神政を補佐し居たりしなるが、つひには兄二柱の愛を忘れ、みづから代つて天使長の聖職に就かむと企て居たるなり。このとき常世姫の來城せるを奇貨とし、たがひに心を合せて兄二柱を排除せむと考へたりける。事足姫は三柱の兄弟の子を伴ひて、國祖大神の正殿に伺候したりしに、國祖の傍には常世姫、常世彦の二神司が行儀正しく左右に侍し居たり。行成彦はこの姿を見て卒倒せむばかりに驚きたり。このとき國祖大神は、言葉おこ

そかに、

「大道別を吾が前に連れ來れ」

と命ぜられたるにぞ、行成彦は唯々諾々として、この場を退出し稍ありて、大道別を召し連れ國祖の御前にふたたび現はれけり。常世彦は大道別に向つて、

「汝の智略には餘も感服したり」

と笑みを浮べて顔をのぞき込めば、大道別は機先を制せられて狼狽したり。國祖

の大神は大道別に向ひ、

「汝は神界のために永年の艱難辛苦を嘗め、以て神人たるの天職を全うせしは、

我も感謝の念に堪へず。されど汝は智量餘りありて徳足らず、偽の八王大神とな

りてより忽ちその行動を一變し、その約に背きたるは神人として餘り賞揚すべき

行爲にあらず。また行成彦以下の使臣の行動は、聖地を大切に思ふの餘り天地の

律法を破りたり。汝らは至誠至實の者なれども、如何せむ國祖の職として看過す

べからず。ア、かかる功臣をば無殘にも捨てざるべからざるか」

と落涙にむせびたまふ。大道別は恐縮しながら、國祖大神に目禮し、八王大神そ

他の神司らに一禮し直ちに御前を退出し、そのまま龍宮海に投身したりける。その和魂、幸魂はたちまち海神と化しぬ。國祖はこれに琴比良別神と名を賜ひ永遠に海上を守らしめたまひ、その荒魂、奇魂をして日の出と名を賜ひ、陸上の守護を命じたまひぬ。琴比良別神および日の出の神の今後の活動は、實に目覺しきものありて、五六七神政の地盤的太柱となり後世ふたたび世に現はるる因縁を有したまへるなり。

ここに廣宗彦命は國祖の御心情を拜察し、責を負ひて天使長の聖職を辭し、弟の桃上彦に譲りける。ちなみに桃上彦の神政經綸の方法は前卷に述べたるごとく、つひには國祖の御上にまで累を及ぼし奉るの端を開きたりける。

八王大神は常世姫とともに桃上彦の襲職を祝したり。このとき大江山の鬼武彦は、高倉、旭を伴なひ國祖の大前に進み出でて、最敬禮を捧げたるのち、
「今回の常世城における行成彦以下の大功勞者をして、退職を命じたまひしは如何なる理由にて候や」

と恐るおそる伺ねたてまつれば、國祖はただ一言、

「汝らの心に問へよ」

と答へたまひける。鬼武彦はやや色をなし、

鹿猪盡きて獵狗煮らる。吾々は貴神の命によりて常世城に忍び入り八王大神を惱ませ、その陰謀を斷念せしめたるのみ。決して行成彦をはじめ一行の使臣は大神に背きて自由行動を取りしにあらず。ただ一點の野心も無く、聖地を守り御神業を輔佐したてまつらむとしての至誠の行動に出たるのみ。また吾は内命によりて、忠實に行動せしは御承知の御事に候はずや」と少しも畏るる色なく奏上したりける。

【國祖の大神の御顔には何となく驚愕の色表はれたまひぬ】。それと同時に八王大神の面上にはいやらしき笑ひがひらめき渡りける。ア、國祖大神の顔色と八王大神の顔色との、氷炭の差異を生じたるは、果して何事を物語るものならむか。讀者諸氏はこの不思議なる光景につきて十分熟考されむことを望むものなり。

第六篇 宇宙大道

第三三章 至仁至愛（一八三）

聖地エルサレムの大宮殿には、天使長桃上彦新任の披露と、廣宗彦命、行成彦以下の神司らの退職の披露を兼ねたる大宴會が開かれたるが、常世彦、常世姫、大鷹別その他各山各地の八王八頭およびその他の神人は、この芽出たく、芽出たからぬ宴席に綺羅星のごとく列席したり。

桃上彦は立つて新任の挨拶をなし、

「今後は國祖の大御心を奉體し、天地の律法を嚴守し、諸神人とともに世界經綸の大業に、協力一致奉仕せむことを望む」

と簡単に述べ終り、悠然として中央の正座に着きぬ。廣宗彦命は自席より立上り、諸神人にむかひ、

『永年諸神司は愚昧なる小生を輔けて、今日まで天使長の職を保たしめ給ひしその好意を感謝す』

と沈痛なる語調をもつて、今回退職の已むを得ざるに立到りしことを簡単に述べ終り、今後は身を雲水にまかせ、天下を遍歴し、身魂の修養につくし、蔭ながら神業に奉仕せむことを誓ひ、元の座に悄然として復したり。

このとき八王大神はじめ常世姫、大鷹別の面上には、得もいはれぬ爽快の色浮びみたりき。行成彦は立上り沈痛なる語氣にて、

『吾が心の暗冥愚直よりつひに常世會議における、天則違反の行動を不知不識のあひだに執りたることを悔悟し、みづから責任をおびて職を辭し、兄と均しく聖地を離れて天下を遍歴し修養を積み、ふたたび諸神司らの驥尾に附して神業に奉仕するの時機あらむ』

と述べ、

『今後の吾が犠牲的行動については、諸神司の懇篤なる御教示を給はらむことを希望す』

と陳べ終り、力なげに元の座に復しける。

このとき奥殿より玉の襖を押開き、數多の侍神司をしたがへて、國祖國治立命はこの場に現はれたまひ、言葉しづかに宣りたまふやう。

「この度の廣宗彦命以下の退職については、餘の胸は熱鐵を呑むがごとく、千萬無量の想ひに滿つ。されど天地の律法は犯しがたし。今となつては如何ともする餘地なく遺憾ながら至仁至愛にして、至誠天地に貫徹するの忠良なる神司を捨つる、餘が心中を推察せよ」

と、その御聲は曇り、御涙さへ腮邊に傳ふるを窺ひたてまつりたる。

一座の神人らは、國祖のこの宣示に一柱も顔を得上ぐるものはなく、感慨胸に迫つて、熱涙ほとばしり、鼻をすする聲四邊より聞へ來りぬ。國祖は、なほも御言葉をつがせられ、涙の袖をしぼりながら、

「神は洽く宇宙萬有一切をして美はしき神國に安住せしめ、勇みて神界經綸の大業に奉仕せしめむとし、晝夜の別ちなく苦心焦慮す。汝神人ら、神の心を心とし萬有一切にたいし、至仁至愛の眞心をもつてこれに臨み、かつ忍耐に忍耐を重ね、

克く神人たるの資格を保全せよ

と、説き示し給ひ更に重ねて宣りたまはく、

「神の慈愛は敵味方の區別なく、正邪理非を問はず廣く愛護す。汝ら桃上彦をは

じめ諸神人一同、これを見よ」

と上座の帳を、手づから捲り上げたまへば、六合も照りわたる眞澄の大鏡懸りあ

り。

諸神人は國祖大神の宣示にしたがひ、眞澄の大鏡の安置されたる正座に、一齊

に面をむけ思はず低頭平身、得も言はれぬ威嚴に打たれ、落涙しつつ頭を恐るお

そるもたげ、鏡面を拜すれば、こはそも如何に、シナイ山の溪間に天の鳥船より

落下して身魂ともに粉碎したる魔子彦をはじめ、竹熊、鬼熊、木常姫、鬼姫、磐

長姫、口子姫、鬼雲彦、佐賀姫、眞心彦、玉の湖に沈められたる三柱の白狐およ

び八尋殿にて玉を差出したる五柱の龍宮の神人および醜原彦、胸長彦、鶴若、龜

若、八十柱彦その他前述の神罰を受けて滅亡したる諸々の悪人は、いづれも生々

としてその肉體を保ち、國祖の身邊にまめまめしく、樂し氣に仕へ居ることを明

瞭に覺り得たりける。

國祖は滿座にむかひ、

「汝らは神の眞の愛を、これにて覺りしならむ」

と言ひ終りて、背部を諸神の前にむけ、

「わが後頭部を熟視せよ」

と仰せられたれば、諸神人はハツト驚き見上ぐれば國祖の後頭部は、その毛髪は

全部抜き取られ、血は流れて見るも無殘に爛れ果て、御痛はしく拜されにけり。

神司らは一度にその慈愛に感激し、この御有様をながめて、涙の兩袖を濕し、空

に知られぬ村時雨、心も赤き紅葉を朽ちも果てよと吹く風に、大地を染めなす如

き光景なり。神人のうち一柱も面を得上ぐるものなく疊に頭を摺りつけて、各自

の今まで大神の御心の慈愛深きを知らざりし罪を感謝したり。

大神の神諭に、

「この神はたれ一人つつばに致さぬ。敵でも、惡魔でも、鬼でも、蛇でも、蟲け

らまでも、救ける神であるぞよ」

と示しめされたる神諭しんゆを思おもひ出だすたびごとに、王お仁には何時いつも落涙らくるいを禁きんじ得えざる次第しだいなり。

惡神あくがみの天則てんそく違反ゐはんにより嚴罰げんばつに處しよせられ、その身魂みたまの滅ほろびむとするや、國祖こくそはその贖あがなひとして、我生毛わがいきげを一本いっほんづつ拔ぬきとりたまひしなり。この國祖こくその慈愛じあい無限むげんの御所業ごしよげふを覺さとりたまひし教祖けうそは、常つねに罪深つみふかき信者しんじゃにたいし、自みづから頭髪とうはつを引ひき拔ぬき、一本いっほんあるひは二本にほん三本さんほんまたは數十本すうじつほんを拔ぬき取り、
守まもりにせよ」
と與あたへられたるも、この大御心おほみこころを奉體ほうたいされたるが故ゆゑなり。
(大正一〇・一二・二五 舊一・二七 外山豐二録)

第三四章 紫陽花あぢさゐ（一八四）

滿座まんざの諸神人しよしんは、國祖こくその無限無量むげんむりやうの仁慈じんじの有難ありがたさにほだされて感涙かんでいに咽むせび、さ

しもに廣き宮殿も寂として水を打ちたるごとく、ただ諸所にすすり泣きの聲、感嘆の言葉のひそかに聞ゆるのみなりき。

くにはるたちのみこと
國治立命は儼然として正座に直り、言葉をあらためて桃上彦を天使長に任じ、龍山別、八十猛彦、百猛彦、鷹住別を聖地の天使の職に命じ、常世姫は龍宮城の主管者となし常世彦は常世城に歸りて神政を奉仕し、かつ天使八王となり、その他の八王八頭は従前のとほり、誠心誠意神明に奉仕し、天使長桃上彦の指揮に従ふべしと宣示し、満座の神司に一禮し、冠を戴き、頭部の血痕を祕し、憚然として奥殿に入らせ給ひける。

もがみひこのみこと
桃上彦命、廣宗彦、行成彦も共に顔を見合せ、大神の大御心に照り合せ、互に心中の不平を根底より科戸の風の天の八重棚雲を吹き拂ひしごとく、あたかも光風霽月の心地を遺憾なく色に表はしむたりける。智略縦横にして、奸佞ならぶ者なき常世彦も常世姫も、大自在天の從臣なる大鷹別以下の暴惡なる曲神も、いまは前非を悔い、誠心誠意國祖大神の御心を體し、忠實に奉仕し、神業の一端たりとも輔佐し奉らむとの本守護神の至誠を發露し、袖をしばりて歔歔するにいたり

ぬ。

「あゝ宇宙間何ものといへども、至善至愛の道に敵する者なかるべし」
と神人は口をそろへて感嘆の辭を洩らしめたり。強力無雙の森鷹彦は許されて
ふたたびモスコの從臣となり、鬼武彦、高倉、旭は聖地を離れ、各地に出没し
て山の尾上や川の瀬に、伊猛り狂ふ邪神を至善至愛の心をもつて歸順せしむるこ
とに努力したりける。

モスコの城主道貫彦の娘春日姫および南高山の城主大島別の娘八島姫は龍宮
城に止り、常世姫の左右の侍女として奉仕することとなり、桃上彦命は聖地アル
サレムの大宮殿にありて、國祖の大神に奉仕し神務を勵み、神政を聞き、下神人
にたいし慈愛をほどこし、聖地の神政はふたたび枯木に花の咲きしがごとく隆盛
を極めたり。また龍宮城は常世姫の指揮の下に一時は完全に統治されたりしに、
星移り月更るにしたがひ、桃上彦命はやや神政に倦怠の氣運を萌し、自由放埒の
所業多く國祖大神の大御心を忘却するにいたり、つひには八王常世彦をはじめ各
山各地の神司らの信望を失墜し、政令おこなはれず、つひに地の高天原の神政を

破壊し、ふたたび衰亡の悲境に陥らしめたりける。

前篇に述べたるごとく桃上彦命は御母事足姫の天則を破り、後の夫春永彦と相通じ、その罪惡の血統を享けたる桃上彦なれば、つひにその金箔を剥がし地金を暴露したるもやむを得ざる次第なりといふべし。

これを思へば、人たる者は胎内教育を最も尊重せざるべからず。父母兩親の精神行動至正至直なるときに受胎せし生兒は、至正至直の人となり、放逸邪慳なるときに宿りたる生兒は、また放逸邪慳の性質をもつて生れ、惡逆無道の精神行動を執りたるとき受胎したる子は惡逆無道の精神をもつて生るものなればなり。故に子の親たるものは、造次にも顛沛にも神を信じ、君を敬ひ、至誠善道を行はざるべからずと知るべし。

(大正一〇・一二・二五 舊一一・二七 櫻井重雄録)

第三五章 頭上の冷水(一八五)

聖地エルサレムは桃上彦命の失政により、ふたたび混乱紛糾をかさね、日向に氷の解くるがごとく、日に月に衰滅に傾ききたり。國祖大神はあたかも手足をもぎとられし蟹のごとく、進退きはまり如何ともなしたまふ術なかりける。各山地の八王はふたたび常世城に集まり、聖地の回復を首をあつめて凝議するの止むなきに至りける。

このとき聖地より常世姫の使臣として廣若、鬼若の二人は、天の鳥船に乗りて下り來りけるに、八王常世彦は、ただちに使臣を一室にみちびき來意をたづねたり。二人は聖地の慘状目も當てられず、このままに放任せむか、聖地は滅亡するの外なきことを詳細に述べたたり。

天授の本心に立歸り、本守護神の活動全く、至善至美の善神と改まりみたる常世彦も、このとき一種の不安を感じ、天を仰いで嗟嘆の聲を漏らしける。この虚を狙ひみたる八頭八尾の大蛇の靈は、頭上よりカラカラと打ち笑ひ、
「小心者よ卑怯者よ、汝のごとき弱蟲にては常世城はおるか、聖地の救援を焦慮するも何の力量かあらむ。汝すみやかに本心に立歸り、荒魂の勇を振りおこし、

奇魂くしみたまの覺さとを開ひらき、くだらぬことに煩慮はんりよするよりも男をとこらしく何なにゆゑに勇猛心ゆうまうしんを發揮はつきせざるか、自信じしんと斷行力だんかうりよくなき者は蛆蟲うじむしも同様どうやうなり。すみやかに大勇猛心だいゆうまうしんを振りおこし、快刀亂麻くわいたうらんまを斷きるの壯烈さうれつなる神業しんげふを敢行かんかうせよ。吾われこそは日の稚宮わかみやに坐ます日の大神おほかみの神使しんしなり、夢々ゆめゆめ疑うたがふなかれ』

といふかと思みれば、その聲こゑはバタリと止とまりにける。八王常世彦やつわうとこよひこは青息吐息あをいきといきの體ていにて兩手りやうてを組くみ、奥殿おくでんに安坐あんざしてその處置しよちにつき千思萬慮せんしばんりよを費つひやしゐる折をりしも、ふたたび天空てんくうに聲こゑあり、

吾われは大國治立命おほくにほるたちのみことなり。國治立命くにほるたちのみことは今いまや窮地きゆうちにおちいり、非常ひじやうなる苦境くきやうにあり。汝なんぢは神業しんげふに奉仕ほうしする神聖しんせいなる職しよくを奉ほうじながら、かかる危急ききふそんぼう存亡そんぼうの場合ばあひ何を苦くるしみて躊躇ちうちよしゆんじゆん逡巡しゆんじゆんするや。有名無實いうめいむじつとは汝なんぢがことなり。すみやかに奮ふるひ起たて、世よの中に恐おそるるものは神かみより外ほかになし。一つも憂慮いうりよすることなく各地かくちの八王神やつわうしんと語かたらひ、すみやかに聖地せいちエルサレムエルサレムに馳はせつけよ。神かみは汝なんぢに添そひて守まもらむ』

と聲こゑ高たからかに呼び終をはり、またもや鬼おにの聲こゑはバツタリと止とまりぬ。常世彦とこよひこは五里霧中ごりむちゆうに彷徨はつくわつしながら、大慈大悲だいじだいひの國祖大神こくそおほかみの窮状きうじやうを耳みみにして之これを

坐視するに忍びず、斷然意を決して神人の集へる大會議場に出席し、大國治立命とおよび外一神の宣示を諸神人に告げ決心を促したりける。しかしてこの大國治立命と稱するは全く僞神にして、大自在天を守護する六面八臂の鬼なりにける。

數多の八王は常世彦の言を聞き、聖地を思ふのあまり、前後の分別もなく、またその聲の正神の言なるや、邪神の言なるやを考慮する暇もなく、異口同音に常世彦の言に賛成したり。ここにおいて常世彦は誠心誠意聖地を救ふべく、八王とともに天の磐樟船に乗りて天空を轟かしつつ聖地エルサレムに安着したりける。

桃上彦命は八王の翼を連ねて下りきたれるその光景に膽をつぶし、
『常世彦またもや悪心を起し、この聖地を占領し、みづから代りて國祖の地位までも占領せむとする反逆の行爲にきはまつたり。聖地の神人らはただちに武装を整へ、彼ら反逆者を殲滅せよ』

と聲を洩らして號令したれど聖地の神人らはその勢力の優勢なるに膽を潰し或は腰を抜かし、猫に逐はれし鼠の如く各自身の安全を計りて逃げ出すもあり、隠るもあり、一柱として桃上彦命の命令に服従するもの無かりけり。桃上彦命は周

章狼狽して大宮殿に進みいり、國祖大神に謁し、

「常世彦叛逆を企て、數多の八王その他の神人を率ゐて短兵急に攻め寄せたり、

いかに取計らはむや」

と進言したるに、國祖大神は奮然として立ちあがり、

「事ここにいたりし原因は汝が律法を破壊し、放縱不軌の行動を執りし報いなれ

ば、一時も早く天に向つて罪を謝し、ただちに職を退き至誠を表白せよ」

と嚴重に言ひわたし、そのまま奥殿深く入らせたまひぬ。桃上彦命は何とせむ方

なく、涙にくれ悄然として宮殿を立ち出で吾が居館に歸らむとする時、常世姫は

春日姫、八島姫とともに禮装を凝らして入りきたり、

「八王大神聖地の混亂を坐視するに忍びず、あまたの神人とともに聖地を救はむ

がために参向したり。天使長はすみやかにこの次第を國祖大神に進言されたし」

と言葉も淑やかに述べ立つるにぞ、桃上彦命はふたたび宮殿に参向し襖の外より

國祖大神にこの次第を進言せむとし悲痛なる聲を絞りながら一言奏上せむとする

や、大神は中よりただ一言、

「神の言葉に二言なし、速に天地にむかつて汝が罪を謝せ、再び吾が前に来る勿れ」

と嚴格なる御言葉をもつて宣はせたまひければ、桃上彦命は是非なく宮殿を下り、面に憂鬱の色をうかべながら再び吾が居館に歸りける。

（大正一〇・一二・二五 舊一・二七 加藤明子録）

（第三章）三五章 昭和一〇・一・二二 於久留米市 布屋旅館 王仁校正）

第三六章 天地開明（一八六）

桃上彦命は、國祖大神の峻嚴骨を刺すてふ嚴格なる御一言にいよいよ退職の決心をなし、その由をただちに龍宮城の主宰常世姫に傳へたり。常世姫はただ一言留任の勸告をも與へず、内心欣喜雀躍しながら、さあらぬ體にて同情の色をうかべ、無言のまま命の辭表を受けとり、ただちに聖地エルサレムの大宮殿に參向し、

桃上彦命の責任を自覺し、骸骨を乞ふ旨を恭しく進言したりける。

ここに聖地高天原はあたかも扇子の要を除したるがごとく、四分五裂の慘状を呈するの止むなきに立ち到り、各山各地の八王八頭をはじめ國魂その他の諸神司らは高山の末低山の末より集まり來り、また龍神は五つの海より聖地をさして暴風を捲き起し、海面を躍らせながら黒雲に乗じて残らず聖地に集まりける。聖地に集まりし神人の數はほとんど粟粒三石の數に達したり。さしも剛直にかまへ常世會議の出席を峻拒したりし萬壽山の八王も、聖地の變亂を聞き一切の情實を排して集まり來たり、靈鷲山に退隱したる大八洲彦命、言靈別命、神國別命、大足彦をはじめ、エデンの野に蟄居を命ぜられたる高照姫命、眞澄姫、言靈姫、龍世姫の諸神人も禁を破り、あまたの從臣を引き連れ聖地の一大事とかけ集まり來たりける。

今まで大八洲彦命一派ならびに高照姫命一派にたいし、極力反抗の態度を呈したる大自在天大國彦も常世彦も、この度の聖地の殆んど滅亡に瀕したる慘状をながめ、何れも憂愁の念にかられ、敵味方の感情を心底より除却し、たがひに聖

ちくわいふく 地回復の誠意を起したり。ことに大自在天のごときは、おはやしまひこのみこと、たかてるひめのみこと、
ば 派の神人の隠忍蟄伏の心情を察して同情の涙に暮れみたりける。元來は全部國治
ちのみこと 立命を元祖といたたく神人なれば、いよいよ危急存亡の場合に立ちいたりては、
くく 區々たる感情はいづこにか雲散霧消して各自神司は互に謙讓の徳を發揮し、相親
あひあい しみ相愛し、毫末も心中に障壁を築かざりけり。諺に、
しん な 親は泣き寄り、他人は食ひ寄り
ぐわんらいただ といふ。元來正しき神の直系を受け又は直系より分派して生れ出たる神人は、こ
かむながら の時こそ惟神の本心に立ち復り至誠を發揮し大神に對し報本反始の實を擧げむと
せい い 誠意を顯はしける。

おち 落ぶれて袖に涙のかかる時人の心の奥ぞ知らるる

さすが 速に神世の神人だけありて、その天性に立復り本守護神の發動に復歸したる時
てき みかた はすべて敵もなく味方もなく、怨恨、嫉妬、不平不満の悪心も發生する餘地無か
えんこん 怨恨、嫉妬、不平不満の悪心も發生する餘地無か
しぜん 至善、至美、至直の神心を天賦的に保有する神人といへ
あらかん ども、天地間の邪氣の凝結して現はれ出たる六面八臂の鬼や、金毛九尾の惡狐や、

八頭八尾の大蛇の靈にその身魂を誑惑され、かつ憑依さるる時は、大神の分靈なる至純至粹の身魂もたちまち掌をかへすごとく變化するにいたる。その速かなること恰も影の形に隨ふが如くなり。

序に述べおきたきことあり、それは三種の邪神の名義についてなり。六面八臂の邪鬼といふは一つの身體に六個の頭や顔の付屬せるにあらず。ある時は老人と化し、ある時は幼者と變じ、美人となり醜人と化し、正神をよそほひ、ある時は純然たる邪神と容貌を變じ、もつて神變不思議の魔術をおこなふ者の謂にして、また八臂とは一つの身體に八つの臂あるにあらず。これを今日の人間に譬ふれば、一つの手をもつて精巧なる機械を作るに妙を得てをり、書に妙を得てをり、繪畫に堪能してをり、音樂に妙を得てあるとか、一切の技術、技能を他に勝れて持ち居たる手腕の意なり。強ち八種のこと妙を得たりといふ意味ではなく、一切百種の技能に熟達し居るの意義なり。

また金毛九尾白面の惡狐といふは、金色はもつとも色の中においても尊く、金屬として最上位を占てをる。狐としては黄金色の光澤ある硬き針毛を有して居

るが、化現くわげんするときうつくに美うつくしき女人にょにんの體たいを現あらはし優美いうびにして高貴かうきなる服装ふくさつを身みに纏まとひ、すべての神人しんじんを驚おどろかしめ、その威嚴ゐげんに打うたれしめむとするをいふなり。また九尾きうびといふは一匹いつびきの狐きつねに九本の尾きうほんの生はえてある意味いみにあらず、九きうとは數すうの終極しうきよく、盡つくすといふ意味いみにして、語ごをかへていへば、完全無缺くわんぜんむけつといふことなり。

いま筑紫つくしの島しまを九州きうしうといふのも、九きうは盡つくしの意味いみから出でたるなり。尾をといふは總すべてのものを支配しはいする力ちからをいふ。後世こうせいにいたり三軍さんぐんの將しやうが采配さいはいを振ふつて軍卒ぐんそつを指し揮きし、あるひは祭典さいてんにさいし被戸主はらひどぬしの役やくが大幣おほぬさを左右さいうさに振ふつて惡魔あくまを退しりぞけ、かつ正ただしき神かみを召集せうしふし、邪氣じやきを拂拭ふつしきするが如ごとし。眞澄姫ますみひめが黄金わうごんの幣ぬさを打うち振ふりて魔ま軍んを亡ほろぼしたまひしも、惡わるくたとへていへば金毛九尾きんまうきうびの尾をを振ふりたると同意味どういみなり。されど正ただしき神かみの使用しようするとききんべいは金幣きんべいを左右左さいうさに振ふるといひ、邪神じやしんの使用しようする時ときは九尾きうびを振ふると稱とへたるなり。この物語ものがたりのなかの所々ところどころに金毛八尾きんまうはちび、銀毛八尾ぎんまうはちびとあるは、九尾きうびにやや劣おとりし働はたらきをなす邪神じやしんといふ意味いみなり。また八頭八尾やつがしらやつをの大蛇をろちといふも、決けつして一つの蛇體じやたいに八やつの頭かしらがあり、また尾をが八やつあるにあらず。蛸たこや烏賊いかや、蟹かにには足あしが八やつつもあるが、蛇體じやたいには偶たまに尾をの先さき

二つに裂けて固まれるが、ありても、決して八つの岐になり居るものはなし。佛書に九頭龍などといひ、九つの頭のある龍のことが示しあれど、これも全く象徴的の語にして、神變不可思議の働きをなす龍神といふ意味なり。昔から「長いものには捲かれよ」といふ譬あり。大蛇は他の動物に比して身の丈もつとも長く、かつ蚯蚓のやうに軟弱ならず相當に堅き鱗をもちて身體を保護し、澤山の代用足を腹部に備へるなり。腹部の鱗と見ゆるは、みな蛇の足の代用をするものなり。足は下を意味す。ゆゑに上に立ちて下を指揮するものを長といひ、また長者ともいふなり。この大蛇の靈は世界の各地にその分靈を配り、千變萬化の活動をなし、神人の身體を容器として邪惡を起さしむる惡靈の意なり。十二柱の八王八頭を十二王、十二頭と稱へず、八王、八頭と稱へらるるごとく、この八頭八尾の大蛇の働きも決して八種に限るにあらず。千變萬化反道的行爲を敢行する惡力の働きの意なり。

王仁は聖地の混亂の状況を述ぶる心算なりしが、つい談が蛇のごとく「ぬるぬる」と長く滑りて、知らず識らず山の奥に這ひ込み、深き谷間に陥りけり。これ

がいはいゆる蛇足を添へるとでもいふならむか。

(大正一〇・一二・二六 舊一一・二八 加藤明子録)

第三十七章 時節到来(一八七)

地上神界の經綸の中心點なる聖地エルサレムは、前述のとほり、統率者を失ひ、ほとんど滅亡の域に瀕したるを、數多の神人らはあたかも日の大神の天の岩屋戸にかくれ給ひしごとく、悲しみ叫べるその中にも、ひとり常世姫は、心中深く期するところあるもののごとく面におつき合ひ的に憂ひを表しゐるものの、その奥底に何となく得意の色潛みあたりける。

聖地の大廣間には、八王八頭をはじめ、大八洲彦命、高照姫命、その他八百萬の神人は、おのおの威儀を正して座を列ね、天使長の後任者をすみやかに定めむことを協議し、まづ第一に、國祖大神の神慮をうかがひ、式を擧ぐることに決定

せり。ついでには國祖大神の御前に出でてこれを奉伺する神人を決定せざるべからずとし、衆議はまづ多數をもつて大八洲彦命を選定したり。

このとき大八洲彦命は立つて、満座の諸神人にむかひ、

「吾はさきに天則違反の罪により、萬壽山に蟄居を命ぜられたる者なれば、今この聖地に參集するも、何となく恐懼の念にかられつつあり。いかに諸神人の選定によればとて、未だ罪を赦されざる身として、至嚴至貴にまします國祖大神の前に列するは、實に厚顔無恥の所爲なれば、この役目のみは固く辭したし。何れの神人が改めて選定されむことを」

と、謙讓の眞心を面にあらはして述べたて座に復したまへり。満場の神人も命の心情を察し、強ひてこれを止むるものなかりける。

ふたたび選定されたるは高照姫命なり。しかるに命もまた大八洲彦命とおなじく、

「妾は天則違反の罪によりエデンの野に蟄居を命ぜられたる、いはば蔭身者なり。たとへ罪なき妾としても多士濟々たるこの集ひにおいて、妾のごとき女性の出

やばり、神聖なる用務を奉伺すべきに非ず。希はくは他より選定されむことを切望します」
と言ひて座に復したまへり。

ここに神人らはその言を拒むに由なく、全會一致をもつて常世彦を選定したり。常世彦は今まつたく至善至美の大精神に立ちかへり、心中一點の欲望もなく、ただただ至誠神明に奉仕し、國祖の御神業の一端を輔佐し奉らむと決心しめたる際なりければ、今の大切なる神務に選定されて大いに恥ぢ、たちまち立ち満場の諸神人にむかひ、

「我は大八洲彦命、高照姫命のごとく、一度も天使長の職に就きたることなし、ただ徒に野心に驅られて、大神の神業に妨害を加へ、つひには聖地の諸神人を苦しめ、延いては國祖大神の御神慮を悩ませ奉りたる罪重き者にして、今この聖地に參向し、諸神人に面を向くるも心憂しと日夜懺悔に堪へず。しかるに吾がごとき者をして、國祖の聖慮を奉伺するの役目に選定さるるは、實に迷惑千萬にして、國祖大神に對し恐懼の至りにたへず。すみやかにこの決定を撤回されむことを希

望す』

と言ひて座に復したり。

このとき大鷹別は場の一隅より「すつく」と立ち上り、諸神人に向つていふ。

「平時はとも角、今日のごとき危急存亡の場合にあたり、徒に謙讓の辭をくり返

し、善惡を争ふべき時に非ず。機に臨み變に應ずるは、神人たるものの最も努む

べきことと信ず。すべての感情を去り、既往をとがめず、現在および將來のため

奮つて常世彦の御奮勵を希望す』

との提案に、諸神人は異口同音に常世彦を選定したり。常世彦も今日の場合、拒

絶するは却て大神の神慮を煩はし、諸神人の厚意を無視するものなりと、ここに

斷然意を決し、神慮奉伺の承諾をなしたり。

満座の諸神人は恰も暗夜に月の出たるがごとく喜び勇み手を拍つて祝し、ウロー

ウローと叫ぶその聲、天地も破るるばかり勇ましかりける。

ここに常世彦は、諸神人の代表として國祖のまします奥殿に進み入り、後任の

天使長について恭しく神慮を奉伺したるに、國祖は、ただ一言、

□ 常世彦をもつて天使長に任ず

と仰せられたり。常世彦は恐懼措くところを知らず、頭をもたげて、

□ 國祖に對し奉り、今日まで極惡無道の邪神に頭使され、深き罪を犯したる吾々は厚きこの恩命を拜受するは分に過ぎたり。希はくは大八洲彦命をもつて天使長

に任じたまはば、有難き次第に候

と至誠を面に表はし進言したりけれど、國祖大神は、

□ 神の言葉に二言なし

とふたたび仰せられ、玉の襖を閉ぢて奥殿に入らせ給ひける。

ここにいよいよ常世彦は天使長となり、地上神界の總統者として八王八頭の上

位に就くこととなり、常世彦命の名を給はりにけり。

□ 時節を待てよ、時節には神も叶はぬぞよ。時節さへ來れば、煎り豆にも花が咲

くぞよ

と神諭に示されたるも、全くかかる事を云ふなるべし。

常世彦命は今まで聖地の天使長たらむとして苦心に苦心をかさね、神人らの惡

と神諭に示されたるも、全くかかる事を云ふなるべし。

罵嘲笑の的となり、幾回となく終局にいたりてその目的を破壊せしめられたりしが、今や一切の欲望を捨て誠心誠意に立ちかへり、何事も惟神に任してゆきたる徳によりて、自然に秋の野の桐の一葉の風なきに落つるがごとく、大神の親任を受け、諸神人の信望を負ひて顯要の地位に上りける。

これを思へば、誠と改心の力は實に偉大なりと謂ふべし。
時満ちて捨てた望みの花が咲き

(大正一〇・一二・二六 舊一一・二八 櫻井重雄録)

第三十八章 隙行く駒(一八八)

地上の神界は、國祖國治立命の公明正大なる英斷的聖慮に依つて、總ての神人の罪は赦され、大八洲彦命、神國別命、言靈別命、大足彦、高照姫命、眞澄姫、龍世姫、言靈姫らは、國祖大神の侍者として奥殿に奉仕し、神政に向つては、少

しも容喙を許されざりける。

一たん神政の職を離れ、單に國祖の帷幕に參じ、神務のみに奉仕するにいたりては、容易に神政管理者となることの出來ざるは、神界の嚴格なる不文律なりき。ゆゑに是らの諸神人は、國祖御隱退とともに表面隱退されしものの、千差萬様に身魂を變じ、五六七神政の曉の來るを待ちつつ神界に隠れて活動されつつありしなり。このことは後篇に判明するに至るべし。

ここにいよいよ常世彦命は、神界の執權者となり、天使長の職に就きぬ。天地開闢以來未曾有の盛典にして、かつ神人らの精神の一致したるは、空前絶後といふべき有様なりける。天上よりは天津神八百萬の神人を率ゐて、天の八重雲を伊都の千別に干別て天降りたまひ、國津神は高山の伊保理、低山の伊保理を掻き別けてこの聖地に集まり來り、大海原の神は浪を開いて聖地に集まり、諸神人一齊にウローウローと祝する聲は、實に清く、勇ましく、壯絶快絶たとふるにもなき狀況なりける。

八王八頭をはじめ、諸神人は追々と聖地を離れて、各自所管の地に歸りける。

一時神人の神集ひにより、隆盛殷賑の精氣に充ちたる聖地エルサレムも、漸次靜肅に復り、あたかも洪水の退しごとくなりぬ。神人らの合同して至誠を顯彰するときは、いかなる兇暴なる邪神といへども、これに向つて一指を染むるの餘地なきものなり。

されど聖地は、自然に靜肅閑寂となり、邪神界にたいしての制壓力は、手薄になり來たりけり。ここに八頭八尾の大蛇の靈は、潛心萬難を排し、黄金橋下を泳ぎわたり、潛かに龍宮海を占領し、龍宮海の龍王となりて海底に潛み、時のいたるを待ちつつありける。されど流石の八頭八尾の大蛇も、天使長の身魂を犯すこと容易ならず、常世姫は依然として龍宮城の主宰となりゐたり。常世姫の身體には、一大異状を來し、俄に庭園の青梅を侍女にもぎとらせ、好みてこれを食するにいたりける。

この梅を澤山食するとともに、腹部は日に月に膨張し、十二ヶ月を経て玉のごとき男子を産み落したれば、父母二神司はおほいに悦び、掌中の玉と愛で、蝶よ花よと慈しみ、その成長を引伸ばすやうに待ち居たり。ややありてふたたび常世

姫は、梅の實を好むに至り、以前のごとく腹部は日に月に膨張し、十六ヶ月を経
て玉のごとき女子を生みける。ここにおいて男子には高月彦と命名し、女子には
初花姫と命名し右と左に月花を飾つたるごとく、樂しみつつ二兒の成長を待ちけ
る。高月彦は長ずるにおよんで智、仁、勇の三徳を完全に發揮し、初花姫は親愛
兼備の徳を稱へられける。

あるとき常世彦命は、龍宮海に舟を泛べ、諸神人とともに酒宴を催し居たるに、
たちまち暴風吹起るよと見るまに、海水は左右にパツと分れ、海底に潜む魚介の
姿まで明瞭に見えにける。このとき海底より八頭八尾の大蛇の姿現はれて、見る
間に高月彦となりける。常世彦命は、この怪物を一刀の下に寸断せむと思ひしが、
あまり我兒に酷似せるを想ひ浮べて躊躇したり。偽の高月彦は、ただちに命の居
館に向つて歩を急ぎけるに、常世彦命は驚いて舟遊びを中止し、館に歸り見れば
奥の間に二人の高月彦、色澤といひ、背格好といひ、縦から見ても横から見ても、
少しの差異もなかりける。命はいづれを眞の愛兒と辨別すること能はざりける。
しかして一人の高月彦が東すれば、また一人は影の形に随ふごとく東へ進み、ま

た西へ進めば西へ進むといふ調子にて、分時といへども二人は離れざりける。

あるとき常世姫は、侍女を随へて橄欖山に遊び、無花果を取つて楽しみたりしが、その中に優れて色美はしく、大なる無花果の實がただ一個、時を得顔に熟しむたり。常世姫は一目見るより、その無花果を頻りに食ひたくなりければ、侍女に命じてその無花果を「むしり」取らしめ、その場に端坐し、四方の景色を眺めながら、美味さうに食ひ終りぬ。

俄に常世姫は腹痛を發して苦悶し始めたるに、侍女は驚いてこれを助け起し、龍宮城内に救け歸りしが、陣痛はなはだしく、玉のごとき女子を生み落したり。女兒の顔は初花姫に似るも似たり、瓜二つなりければ、父母二神司は五月姫と命名し、これを愛育したり。追々成長してこれまた姉の初花姫と背丈、容色すべてが瓜二つとなりける。

現在の親の眼より、その姉妹を辨別するに苦しみける。果してこの姉妹は何神の化身なりしか。

(大正一〇・一二・二六 舊一一・二八 外山豊二録)

第七篇 因果應報

第三十九章 常世の暗（一八九）

聖地エルサレムの天使長常世彦命には、高月彦誕生して追々と成長し、父を輔けて、その勳功もつとも多く、かつ天使長の聲望天下に雷のごとく轟き、その善政を謳歌せざるもの無く、一時は實に天下泰平の祥代となりける。

しかるに油断は大敵すこしにても間隙あらむか、宇宙に充滿せる邪神の靈はたちまち襲ひきたりて、或は心魂に或は身體にたいして禍害を加へ、またはその良心を汚し曇らせ、つひにはそのものの身體および靈魂を容器として、悪心をおこし悪行を遂行せしめむと付け狙ふに至るものなり。

大本神諭にも、

悪魔は絶えず人の身魂を付け狙ひ居るものなれば、抜刀の中に居る心持にて居

らざる時は、いつ悪魔にその身魂を自由自在に玩弄物にせらるるや知れず。ゆるに人は神の心に立歸りて神を信仰し、すこしも油斷あるべからず」
常世彦命は神界の太平にやや安心して、あまたの侍臣とともに龍宮海に舟遊びの宴をもよほすとき、龍宮海の底深く潜みて時を待ちつつありし八頭八尾の大蛇の邪靈は、この時こそと言はむばかりに、その本體を諸神人の前に顯はし、態と神人らの前にて高月彦と變化し、常世彦命の居館に入りこみ神人らを惱めたるなり。

常世彦命はじめ聖地の神人らは、二人の高月彦のうち一人は邪神の變化なることを何れも知悉すれども、その何れを眞否と認むること能はざりしたために、止むを得ず、同じ姿の二人を居館に住まはせたりける。眞の高月彦は、
「我こそは眞の高月彦なり、彼は邪神の變化なり」
と證明せむとすれば、邪神の高月彦もまた同じく、
「我こそは眞の高月彦なり、彼は邪神の變化なり」
と主張し、その眞偽判明せず、やむを得ず二人を立てゑたりける。

この怪しき事實は誰いふともなく神界一般に擴まり傳はり、八王八頭の耳に入り、神人らは聖地の神政に對して、不安と疑念を抱くに至りける。

常世彦命はこのことのみ日夜煩悶し、つひには發病するに立ちいたりぬ。命は妻を枕頭に招き、苦しき病の息をつきながら、

吾は少しの心の欲望より終に邪神に魅せられて常世國に城塞を構へ、畏くも國祖大神をはじめ歴代の天使長以下の神人らを苦しめ悩ませたるにも拘はらず、仁慈深き國祖は吾らの改心を賞でたまひて、もつたいなき聖地の執權者に任じたまひたれば、吾らは再生の大恩に報いたてまつらむと誠心誠意律法を嚴守し、神政に勵みて國祖の大神に奉仕せしに、心の何時となく緩みしたためか、龍宮海に船を浮べて遊樂せし折しも、海底より邪神現はれて愛兒の姿となり、堂々として我館に住み込み、その眞偽を判別する能はず、それより吾は如何にもしてその眞偽を知らむと、日夜天津大神および國祖大神に祈願を凝らせども、一たん犯せる罪の報いきたりて、心魂暗み天眼通力を失ひ、かつ、それより我身體の各所に痛みを覚え、今やかかのごとく重態に陥りたるも深き罪障の報いなれば、汝らは吾が身

の悲惨なる果を見て一日も早く悔い改め、寸毫といへども惡心非行を發起すべからず』

と遺言して眠るがごとく歸幽したりける。鳥の將に死なむとするや其の聲悲し、人の將に死せむとする時その言や善しと。宜なるかな、さしも一旦暴威をふるひたる常世彦命も本心より省み、その邪心を恥ぢ、非行を悔い神憲の儼として犯すべからざるを畏れ、天地の大道たる死生、往來、因果の理法を覺りて身魂まつたく清まり、神助のもとに安々と眠るがごとく歸幽したりける。ア、畏るべきは心の持ちかた一つなりける。

常世彦命の昇天せしより、聖地の神人らは急使を四方に派して、各山各地の八王をはじめ一般の守護職にたいして報告を發したれば、萬壽山をはじめ八百萬の神人は、この凶報に驚き我一と先を争ひて聖地に蝟集しその昇天を悲しみつつ、後任者の一日も早く確定せむことを熱望し、ここにエルサレム城の大廣間に會したり。常世彦命の長子高月彦を天使長に選定し、國祖大神の認許を奏請せむとするや、天下に喧傳されしごとく、二人の高月彦あらはれ來たりぬ。

諸神司はその眞僞について判別に苦しみ、七日七夜大廣間に會議をつづけられたれど、いかにしても前後と正邪の區別つかざるところまで克く變化しむるにぞ、眞僞二人の天使長を戴くことを得ず、神人らは五里霧中に彷徨しつつ、その怪事實に惱まされけり。

高月彦は大廣間に現はれ龍宮海に潜める邪神大蛇の變より、父の昇天までの種々聖地の怪を述べ且つ、

「吾身に蔭のごとく附隨せるは、かの大蛇の變化なることを證明すべきことあり。諸神人はこれにて眞僞を悟られたし。吾には父より賜はりし守袋あり、これを見られよ」

と満座の前に差出し、僞高月彦の邪神にむかひ、

「汝が果して眞なれば、父より守袋を授けられし筈なり、今ここにその守袋を取出して、その僞神にあらざること證明せられよ」

と詰め寄れば、邪神はたちまち色を變じ、何の返答もなく物をもいはず、眞の高月彦に噛付かむとする一刹那、たちまち「惟神靈幸倍坐世」の神言が自然に口よ

り迸出したるにぞ、偽神はたちまちその神言の威徳に正體を現はし、

ア、残念至極口惜さよ。我は永年この聖地を根底より顛覆せむと、海底に沈みて時を待ち、つひに高月彦と變化し、聖地の攪亂に全力を盡したりしに、高月彦の神言によりてその化けの皮を脱がれたれば、いまは是非なし、ふたたび時節を待つてこの怨みを報ぜむ

と言ふよと見るまに、見るも恐ろしき八頭八尾の大蛇と現はれ叢雲をよびおこし天空をかけりて、遠くその怪姿を西天に没したりけり。高月彦は忽然として立ち

あがり、

諸神司はただいまの邪神の様子を實見して、その眞偽を悟りたまひしならむ、吾こそは天使長常世彦命の長子高月彦なり。今後聖地の神政については、諸神司の協力一致して御輔翼あらむことを希望す

と慇懃に挨拶を述べ終るや否や、たちまち惡寒震慄、顔色急に青ざめ、腹をかかへて苦悶の聲を放ちければ、諸神司は驚きて命を扶けその居館に送り、侍者をして叮嚀に看護せしめたり。

この守袋は妹五月姫の計らひにて、俄に思ひつきたるカラクリにして、邪神の正體を現はすための窮策に出たるものなりける。かくのごとき權謀術數を弄するは、神人としてもつとも慎まざるべからざることなり。

また高月彦の急病を發したるは、眞正の病氣ではなく、命の安心とややその神徳にほこる心の隙に乗じて、西天に姿を隠したる八頭八尾の大蛇の邪靈が、間髪を容るるの暇なきまで速く、その肉體に憑依したる結果なりける。

(大正一〇・一二・二七 舊一一・二九 外山豊二録)

第四〇章 照魔鏡(一九〇)

高月彦が父母二神司をはじめ、八百萬の神人の眼力をもつて看破し得ざりし八頭八尾の大蛇の化身を、諸神人満座の中に善言美詞の神言を奏し、その正體を暴露せしめた天眼通力は、あたかも眞澄の鏡の六合を照徹するがごとしと、讚嘆せ

しめたりける。いかに善言美詞の神言なりといへども、これを奏上する神人にして、心中一片の暗雲あり、執着ある時はたちまちその言靈は曇り、かつ、かへつて天地の邪氣を發生するものなることは、第一篇に述べたるところなり。

ここに高月彦は神人らの絶對の信望を負ひて父の後を襲ひ天使長となり、天使長親任の祝宴は聖地城内の大廣前において行はれ、まづ莊嚴なる祭壇は新に設けられ、山野河海の種々の美味物を八足の机代に横山のごとく置き足らはし、御酒は甕戸高知り、甕腹充てならべて賑々しく供進されたりける。神人らは一齊に天地の神明にむかつて天津祝詞を奏上し終り、ただちに直會の宴に移りたり。

このとき龍宮城の主宰者として常世姫は、春日姫、八島姫を従へ禮装を凝らして臨席し、この目出度き盛宴を祝しける。

常世姫は夫と別れ、涙のいまだ乾かざるに、吾が長子は天使長の顯職につきたるを喜び、神明に謝し感涙に咽びつつ、悲喜こもごもいたり夏冬の一度に來りしがごとき面色なりけり。ここに長女初花姫、五月姫も常世姫の左右に座を占めける。常世姫は夫の昇天されしのは、みづから龍宮城の主宰たることを辭し、

夫の冥福を祈らむと決心し、その後任を初花姫に譲らむとし、さいはひ諸神司集合の式場にその意見をもちだし、諸神人の賛否を求めたるに、諸神人はその心情を察し、一柱も拒止するものなく異口同音に初花姫をして、龍宮城の主宰者たりしむることを協賛決定したりけり。善は急げの諺のごとく、ここに常世姫の後任者として初花姫就任の披露をなし、ふたたび嚴肅なる祭典を執行されたれば、聖地は凶事と吉事の弔祝の集合にて非常なる雑踏を極めけり。祭典は無事にすみ、初花姫は就任の挨拶をなさむとし中央の小高き壇上に現はれたるに、同じく五月姫も登壇したり。しかしてその容貌といひ、背格好といひ、分厘の差もなく瓜を二つに割りたる如くなりき。初花姫が一言諸神人に向つて挨拶すれば、五月姫も同時に口を開いて同じことをいふ。初花姫が右手を擧ぐれば五月姫も右手を擧げ、くさめをすれば同時にくさめをなし、あたかも影の形に従ふがごとく、あまたの神人らはこの不思議なる場面に二度びつくりしたり。さきに二柱の高月彦の怪に驚き、漸くその正邪を判別し、ほつと一息吐きしまもなく、またもや姉妹二人の判別に苦しませる不思議の現象を見せつけられ、いづれも目と目を見合せ、ま

たもや常世城とこよじやうにおける野天泥田會議のてんどろたくわいぎの二にの舞まひにあらずやと眉まゆに唾つばきし、頬ほほを抓つかめりなどして煩悶はんもんしめたりける。二女性にぢよせいは互たがひに姉妹しまいを争あらそひぬ。されど現在げんざい生うみ落おとしたる母ははの常世姫とこよひめさへ、盛装せいさうを凝こらしたる姉妹しまいを判別はんべつすることを得えざりける。ここに高月彦たかつきひこはふたたび「惟神靈幸倍坐世かむながらたまちはへませ」の神言かみごとを奏上そうじやうしたれど何なんの効果かうくわもなく、依然いぜんとして二女にぢよは互たがひに姉あねの位置みちを争あらそふのみ。ここに宮比彦みやびひこは座ざをたち諸しよ神しん人にむかつて、

「我われはこれより國祖大神こくそおほかみの宮殿きうでんに参向さんかうし、大神おほかみの審判しんぱんを乞こひ奉たてまつらむと思おもふ。諸神しよしん人の御意見ごいけん如何いかん」

と満座まんざに問とひけるに、諸神司しよしんは一齊いつせいに賛成さんせいし、宮比彦みやびひこをして大神おほかみの神慮しんりよをうかがひ正邪せいじやの審判しんぱんを乞こひ奉まつらしめけり。

大宮殿だいきうでんには大八洲彦命おほやしまひこのみこと、高照姫命たかてるひめのみこと一派いつぱの神人かみがみがまめまめしく國祖大神こくそおほかみに奉侍ほうじし、神務しんむに奉仕ほうしし居あたり。宮比彦みやびひこはただちに奥殿おくでんに入り、神務長しんむちやう大八洲彦命おほやしまひこのみことにむかひ、國祖大神こくそおほかみに傳奏でんそうされむことを願ねがふにぞ、大八洲彦命おほやしまひこのみことは大おほいに笑わらひ、

「汝なんぢは常つねに神明しんめいに奉仕ほうしする聖職せいしよくにありながら、かくのごとき妖怪變化えうくわいへんげをも看破かんぱし

能はざるや。我はかかる小さきことを國祖に進言するは畏れおほければ謝絶す
と斷乎として撥ねつけたれば、宮比彦は大いに恥ぢ、神務長の言に顧み直ちに天
の眞名井に走りゆき、眞裸體となりて御襖を修し、祈禱を凝らしけるに、果然宮
比彦は國祖大神の奇魂の懸らせたまふこととなりぬ。ここに宮比彦は急ぎ大廣間
に現はれ、壇上に立ち兩手を組み姉妹の女性にむかつて鎮魂の神業を修したるに、
命の組みたる左右の人指指より光明赫灼たる靈氣發射して二女の面を照らしけれ
ば、たちまち五月姫はその靈威光明に照らされて、金毛九尾白面の惡狐の正體を
現はし、城内を黒雲にて包み、雲に隠れて何處ともなく逃げ去りにける。宮比彦
は中空に向つて鎮魂をはじめ、
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 萬
の天の數歌を再び繰返し奏上し終るとともに、大廣間の黒雲は後形もなく消え去
せ、神人らの面色はいづれも驚異と感激の色ただよひにける。
常世姫は現在我が生みの子五月姫の惡狐の我が胎内を借りて生れ出たりしもの
なるかと、驚きあきれ茫然として怪しみの雲につつまれけり。これより常世姫は

病を得、つひに夫の後を追ひて昇天したりしより、いよいよ龍宮城は初花姫代りて主宰者となりぬ。金毛九尾白面の悪狐の邪靈現はるとともに、初花姫は精神容貌俄に一變し、さしも温和なりしその面色は次第に險峻の色を現はしけるに、満座の神人らは初花姫の面貌の俄に險峻となりしは、今までの氣樂なる生活に引き替へ、龍宮城の主宰者たるの重職を負ひしより、心魂緊張をきたしたる結果ならむと誤信し居たりける。ああ初花姫の身魂は、何者ならむか。

(大正一〇・一二・二八 舊一一・三〇 加藤明子録)

第四章 悪盛勝天(一九一)

ここに高月彦は天使長に任ぜられ、神界の神司の總統者となり、父の名を襲うて常世彦と改名したり。改名したるその理由とするところは、さきに二人の高月彦あらはれ、不祥事の續出せるを忌みたるが故なり。

また初花姫は同じく母の名を襲ひ常世姫と改名したりける。これまた初花姫に酷似せる邪神によりて、聖地および龍宮城の攪亂せられしを忌みての故なりける。改名したる常世彦は、初めの中は天地の律法をよく嚴守し、仁愛をもつて天下に臨み至治太平の安泰國を現出したるに、八頭八尾の大蛇の惡靈憑依してより神格俄に一變し、ここに體主靈從の行爲をつづけ、大神の神慮を煩はし、かつ聖地の空氣を一變せしめける。次にまた改名したる常世姫は兄と同じく、最初のうちは靈主體從の大道を遵守し、至仁至愛にして城内はあたかも春の日のごとく安泰によく治まりゐたりしに、彼女に憑依したる金毛九尾白面の惡狐は、時を経るにしたがひ、常世姫の身體を驅使して、言行日々に惡化し、ために聖地アルサレムの神政を攪亂するの端を開きたりける。

天使長常世彦にして、その行動かくのごとくとせば、その部下に仕ふる八王八頭もまた河川の上流濁りて下流濁るがごとく、八王八頭には八岐の大蛇なる八頭八尾の邪神の惡靈、その靈魂を千々に分ちてこれに憑依し、その妻には金毛九尾白面の惡狐の邪靈、その靈魂を分ちてこれに憑依し、つひに天下の神人をして大

蛇ち惡あく狐この容よう器きたらしめたりき。同おなじ惡あく靈れいの分ぶん派ぱを受うけたる、八やつ王わう八やつ頭がしらその他たは、その本ほん靈れいの憑ひよう依いせる常とこよひ世こ彦この願い使しに従したがふは自しぜん然ぜんの道だう理りなり。また惡あく狐この邪じゃ靈れいの分ぶん派ぱたる惡あく靈れいの容よう器きとなりし八やつ王わう八やつ頭がしらの妻つまらの擧こぞつて、その本ほん靈れいの憑ひよう依いせる常とこよひ世こ姫めの願い使しに甘あまんずるは、これまた自しぜん然ぜんの理りなり。ここに常とこよひ世こ彦こは八やつ王わう八やつ頭がしらの協け力ふりよく一致いつちの推すい薦せんによりて天てん使し長ちやうの職しよく名めいを廢はいし、八やつ王わう八やつ頭がしらと改かい稱しやうすることとなり、その認にん許きよを國こく祖そ大おほ神かみに奏そう言ごんしたるに、大おほ神かみは八やつ王わう八やつ頭がしらの職しよく名めいを附ふすることを甚いたく嫌きらはせたまひける。そのゆゑは國こく祖その大おほ神かみさへもその表へう面めんは神しん名めいを用もちゐたまはず、たんに國くに治はる立た命ちのみことと稱しやうし給たまへるに、その部ぶ下かに仕つかふる天てん使し長ちやうとして僭せん越えつにも八やつ王わう八やつ頭がしらの名なを附ふするは、天てんの大おほ神かみに對たいして畏おそれ多おほく、かつ下しも、上かみを犯をかすの端たんを開ひらくものと見みなされたるが故ゆゑなりき。

されど常とこよひ世こ彦こは、八やおほ百よろづ萬ぶつの神かみ人がみの協け力ふりよく一いつ致ちの推すい薦せんを堅かたく主しゆ張ちやうし、多た數すうの同どう意いをもつて強しひて八やつ王わう八やつ頭がしらの名なを降かう下かされむことを強きやう要いようして已やまざりにける。

ここに國こく祖そは、大だい宮きう殿でんの奥おく深ふかく諸しよ神しん司しを集あつめて、八やつ王わう八やつ頭がしらの職しよく號がうにつき各かく自じの意い見けんを聽ちやう取しゆされたるが、ここに神しん務む長ちやう大おほ八やし洲まひ彦このみこと命ことは、ただちに立たちて言いひけらく、

□ 天に二日なく地に二王なきは、宇宙の大眞理なり。いはんや國祖さへも、常に謙讓の徳を堅持したまひ、天にせぐまり地にぬきあしして、深く上は天津神を敬ひ、下神人を敬愛したまふ。しかるに何ぞや、大神に至誠身をつくして奉仕すべき天使長たる者、我が天職を忘れ、驕慢心を起し、天下の諸神人を籠絡してこれに甘んじ、その職名の強要を申請するその心事の惡逆無道なる察するにあまりあり。希はくは國祖におかせられても天地の秩序を整ふるため、斷じて御許容なきことを願ひ奉る□

と奏上されたり。他の神司は何の辭もなく、默然として國祖の御言葉いかにと固唾を呑んで控へゐたり。

ここに高照姫命は國祖の大神にむかひ、

□ かれ常世彦はさきの高月彦時代の精忠無比の眞心なく、いまは邪神のためにその精魂を魅せられ、惡逆無道の心性と惡化しつくせり。また常世姫も初花姫時代の崇敬の心は全く消え失せ、いまは常世の惡狐の靈に憑依され、奸佞邪智の女性と化し去れり。この際、大神にして萬一彼らが願ひを聽許したまはば、惡狐はま

すまず増長し、一步を譲れば一步を進みきたり、二歩を譲れば二歩を進みきたり、その要求際限無かるべし。このさい斷然として彼ら悪人の奸策におちいり給ふことなかれ」

と理非をつくして言上したりしが、國祖大神は首肯かせたまひ、ただちに二神司の言を容れて、常世彦にたいし、八王大神の職名を附することを許されざりけり。それより常世彦の、國祖大神をはじめ大八洲彦命、高照姫命以下にたいする反抗の念は、ますます昂まりにける。

(大正一〇・一二・二八 舊一・三〇 櫻井重雄録)

第四章 無道の極(一九二)

常世彦は衆を恃みて、その横暴いたらざるなく、八王八頭その他の神司らをほとんど臣下のごとく頭使するにいたりぬ。さるほどに奸佞邪智に長けたる邪神の

内面ないめんにありて操縦さうじゆうする常世彦とこよひこは、巧言令色かうげんれいしよくよく天下てんかの諸神人しよしんを悦服えつぷくせしめたりける。

八王八頭やつわうやつがしらをはじめその他の神司かみがみらは、常世彦とこよひこのあるを知つて、國祖大神こくそおほかみをほとんど有名無實無用の長物ちようぶつと感ずるにいたりけり。常世彦とこよひこは執拗しつえうにも國祖大神こくそおほかみに對し、八王大神やつわうだいじんの稱號しやうがうを得むと迫せまることをますます急きふにして、萬々一國祖まんまんいちこくそにして聽許ちやうきよなき時は、みづから進すすんで國祖大神こくそおほかみを斥しりぞけ自ら地上ちじやうの一大主權いちだいしゆけんを掌握しやうあくせむとの強きやう硬かうなる態度たいどを持ぢし居ゐたるなり。

而しかして神務長しんむちやう大八洲彦命おほやしまひこのみこと以下いか、國祖直屬こくそちよくぞくの神人かみをはじめ、高照姫命たかてるひめのみこと以下の女性ぢよせいが、八王大神やつわうだいじん稱號しやうがうの聽許ちやうきよにつきて國祖こくそに對たいし、異議いぎを言上ごんじやうしたることを深く恨うらみ、これを常に眼めの上うへの瘤こぶとし居ゐたりしが、國祖こくそは常世彦とこよひこの勢いきほひ、到底たうてい制せいすべからずとし、涙なみだを嚙のんで彼らかれの言げんを採用さいようし、ここに八王大神やつわうだいじんの稱號しやうがうを與あたへ給たまひける。

この事を聞ききつけたる世界各山各地せかいかくざんかくちの有力いうりよくなる神司かみがみは、先さきを争あらしふて聖地せいちエルサレムえいしよくに參集さんしふし、その榮職えいしよくに就つけることを祝しゆくし、聖地せいちの大廣間おほひろまにおいて衆神司しうしんくわんこのあまり、底拔そこぬけ騒さわぎの大祝宴だいしゆくえんが催もよほされ、大廣間おほひろまの中央ちうあうには高壇かうだんを設まつけて、常世とこよひ

彦まづ登壇して新任の挨拶をなし、かつ、

「今より天使長の名稱を廢し、八王大神と呼ばれたし」

と宣示したり。集まる諸神人は鬨の聲を擧げて、その宣示を歡び迎へ、拍手喝采

の聲は聖地エルサレムも崩るるばかりなりき。これより八王大神の世界における

聲望は、旭日昇天の勢を示し、大神の一言はいはゆる鶴の一聲となりて、遺憾な

く實行さるることとなりける。八王大神は最早斯うなりては、國祖は第一に眼の

上の瘤となり、すべてに對して嚴肅不動なる御態度は、和光同塵的神策を行ふに

あたり、非常に邪魔物となりたれど、頭無き身體は生命を保つこと能はざるがご

とく、いづれかの有力の神人にして、かつ吾意に隨ふ神人を戴かねばならぬこと

を悟りたるなり。ここに八王大神は、父の時代より常世城内深く奉戴し居たりし

盤古大神鹽長彦に望みを囑し、天の大神の承認を得て國祖の地位に代らしめむと

し、あらゆる手段をめぐらし、第一着手として八王八頭を説きつけしめたり。

しかるに萬壽山の八王磐樟彦一派は頑としてその誑惑に應ぜざりける。ここに

八王大神の惡心日に日に増長し、遂には八王八頭をはじめ八百萬の神人を地の高

あまはら 天原なる聖地せいちエルサレム城じやうの大廣間おほひろまに集めて、露骨ろこつに國祖大神こくそおほかみの御退隱ごたいいんを勸告くわんこくし、國祖こくそにしてこれを容いれたまはざる時は、諸神人しよしんを率ひきゐて天あめの若宮わかみやに參向さんかうし、日ひの大神おほかみに直願ちよくぐわんせむことを提議ていぎしたりける。

つぎに大八洲彦命おほやしまひこのみこと、言靈別命ことたまわけのみこと、神國別命かみくにわけのみこと、桃上彦命ももがみひこのみこと、大足彦おおたるひこその他のた正ただしき神しん人を根ねの國くにに追放つあほうし、かつ女性側めがみがはとして高照姫命たかてるひめのみこと、眞澄姫ますみひめ、言靈姫ことたまひめ、龍世姫たつよひめ以下かの神司かみがみを根ねの國くにに追放つあほうせむことを國祖大神こくそおほかみに迫せまり、これまた聞きき入いれざれば、天上てんじやうに坐ます日ひの大神おほかみに奏願そうぐわんせむことを提議ていぎしたり。

同じ邪靈じやれいに心魂しんこんを全部ぜんぶ誑惑けうわくされたる神人かみがみは、一いちも二にもなく満場まんぢやう一致いつちをもつて、これに贊成さんせいしたれば、八王大神やつわうだいじんは満面まんめんに笑あみをたたへながら、傲然ごうぜんとして大手おほてを振り、大宮殿だいきうでんに參入さんにふし國祖大神こくそおほかみに謁えつして、まづ第一だいいちに、
大八洲彦命おほやしまひこのみこと以下のを男神司がみおよび高照姫命たかてるひめのみこと以下のか女神司めがみを根ねの國くにに追放つあほうされむことを

と奏請そうせいしたりけるより、國祖大神こくそおほかみは、大おほいに怒いからせたまふものごとく、默もくして答こたへたまはざりけり。八王大神やつわうだいじんはなほも進すすんで言いふやう、

「われ今世界の諸神人を代表して、世界永遠の平和のために善言を奏上す。しかるに大神は吾言を請容れたまはず、不平の色を面に表はしたまふは、天下諸神人の至誠を無視し、かつ天地の律法を自ら破りて憤怒の顔色を表はしたまふに非ずや。大神のみづから制定されし律法に言はずや、「怒る勿れ」と。しかるに、大神は自ら律法を制り、また自らこれを破りたまふ。律法の守りがたきは、固より大神制定の律法に無理を存すればなり。國祖大神にして自ら守ること能はざるごとき不徹底なる律法は、天下を毒し神人を誤らしむること多し。貴神はこの罪によつて、すみやかに根の國、底の國に隱退さるる資格十分に備はれり。われは今天地の眞理によつて貴神に言明す」

天が地となり、地が天となり、桑田化して海となり、海は變じて山となる、亂暴極まる言辭を弄し、國祖大神をはじめ數多の侍神司をしてその言の高慢不遜と惡逆無道に舌をまかしめたり。

國祖は一言も答へたまはず、玉の襖を閉ぢて奥殿深く御姿を隠したまひける。ア、この結果は、いかに落着するならむか。

(大正一〇・一二・二八 舊一一・三〇 外山豊二録)

第八篇 天上會議

第四三章 勸告使(一九三)

常世彦は我が目的とする、八王大神の稱號を國祖大神に迫つて、これを獲得し、
旭日昇天の勢をもつて天下の諸神人に臨み、盤古大神を首長と仰ぎ、これをもつ
て國祖の位置に就かしめむと、内々準備を整へ、諸神人をふたたび常世城に集め
て神界改造の相談會を開催したり。大自在天國彦は、八王大神を極力讚美して、
この際一日もはやく國祖の退隱を迫り、鹽長彦をして神政神務の總統者に推戴す

るをもつて、世界救済の一大要點なりと主張したり。

ここに美山彦、國照姫は立つて、大國彦の主張に對しあらゆる讚辭を呈し、かつ、

國祖大神をして、かくのごとく頑強固陋の神となさしめたるは、前天使長大八洲彦命、言靈別命、神國別命、大足彦および萬壽山の頑老、磐樟彦以下の聖地の神人および女性側としては、前天使長高照姫命、眞澄姫、言靈姫、龍世姫ら聖地の神司らの一大責任なれば、國祖の退隱に先だち、右の諸神人を聖地より追放し、根底の國に神退ふべきものなり」

と息をはずませ、肩を揺りながら述べ立てたり。

一旦聖地において全く悔い改め、本心に立歸りみたる至善の神人も、いまは少しの油斷のために、邪神の容器となり、いづれも擧つて國祖にたいし反抗の態度を執るにいたりたるは、果して時節の力か、ただしは因縁か、測度しがたきは世界の經緯なり。

神諭に曰く、

「時節には神も叶はぬぞよ」
と、全大宇宙の大主神たる大六合治立尊の御分身にして、宇宙の大主權神たる、國祖國治立命も、時節の力は如何ともすること出來得ざりしなり。至正、至直、至嚴の行動は、かへつて多數の神人より蛇蝎のごとく忌嫌はれて、つひには惡神と貶せられ、崇り神と強ひられ、惡鬼の巨頭良の金神と名稱を附して、大地の北東に居所を極限さるるにいたりたまへるも、神界經綸上止むを得ざる次第ならむか。

このたびの常世城の會議は、前回のごとく少しも騷擾紛糾の光景を現出せず、和光同塵、體主靈從的神政を謳歌せる神人（邪靈の憑依せる）のみの集會なりしゆゑ、全會一致をもつて、まづ國治立命をして、大八洲彦命、高照姫命以下の神人を根の國底の國に追放せしめ、その後において、國祖の自發的退隱を迫ること一決したりける。ついではその衝にあたるべき神司の選舉をなさざるべからざれば、ふたたび自決勸告使たるべき神人を物色したりしが、この時大國彦の重臣大鷹別は進んで、この大切なる使命は吾々ごとき小人の能く耐ふるところにあら

ずとし、智徳兼備の八王大神および大自在天の御盡力を乞ふのほかなきを主張し
たれど、八王大神は何か心に期するところあるもののごとく、首を縦に振らざり
けり。その場に威儀儼然としてひかへたる大國彦も、無言のまま首を横に振り
たりける。美山彦、國照姫は立上がり、
「今回の勸告使は、畏れながら小神に任じられたし」
と切り出しけるに、常世彦も、大國彦も言ひ合はしたるごとく頓首きて、承諾の
意を表示したり。

美山彦、國照姫は諸神人の一致的賛成のもとに、意氣揚々として勸告使となり、
聖地エルサレムの宮殿に参向し、國祖に對面せむと、數多の神人を引率して聖地
に向き歸途に就きける。

常世彦命はまたもや八王大神の資格をもつて聖地に歸還せむとするに先だち、
盤古大神の輔佐として、大國彦の從臣大鷹別をして常世城の主管者に任じ、かつ
部下の神人をして、各自に神政を分掌せしめ、八百萬の神司を引率して、エルサ
レムを指して旗鼓堂々天地も震撼せむばかりの勢にて、上り來たりぬ。先に勸告

使として歸還したる美山彦、國照姫の使命は果して完全に成功せしや疑はしき限りなり。

(大正一〇・一二・二九 舊一二・一 出口瑞月)

(第三章、第四章、昭和一〇・一・二二 於佐賀市松本忠左氏邸 王仁校正)

第四章 虎の威(一九四)

美山彦、國照姫は天下萬生の代表と自稱し、かつ八王大神および大自在天の勢力を笠に着ながら、虎の威を藉る野狐の尾を掉り廻し、傲然として聖地の國祖大宮殿に數多の神人を引率し、常世城の大會議における諸神司の信任と希望とを擔ひて、勸告使に選抜されしことを居丈高に吹聴し、ただちに國祖の御前に進み進言すらく、

今日の美山彦、國照姫は前日のごとき微々たる美山彦、國照姫にあらず、勢望

仁徳天下に並びなき、畏くも八王大神常世彦、權勢天下の神人を壓する神力無雙の、自在天大國彦の代表者にして、八百萬の神司の代表たる勸告使の重職を擔へる美山彦、國照姫なれば、國祖大神におかせられても、必ず粗略の取扱ひあるべからず」

と傍若無人の言辭を弄しながら、

「先づ第一に大八洲彦命以下の頑迷固陋なる神々を、神界平和のため、八王大神の聖意に答ふるため、國祖の神權をもつて御側を追放し、神界攪亂者として根の國底の國に退去を命じたまへ」

と無禮千萬にも強力なる後援者あるを楯にして強硬に迫りける。國祖は美山彦にむかひ、

「汝の言果して八王大神および、自在天その他一般の意見なりとせば、ア、餘また何をか云はむ。至正至直の神人も、天下の平和のためには涙を呑んで馬謖を斬らざるべからざるか」

聲淚交々降らせたまひ、感慨無量の御面色に、近く仕へたてまつれる神人らも、

美山彦らの從臣らも、涙の袖を絞らぬはなかりける。心弱くては今回の使命は果しがたしとや思ひけむ、やや憂愁に沈まむとせる美山彦を勵ましなから、國照姫は國祖の返答をしきりに促したり。國祖も事ここに至りては如何ともなしたまふの餘地なく、その請求を容れて大八洲彦命、言靈別命、神國別命、大足彦を根の國に追放したまふことを承認されたりける。

ここに右の四神司は、國祖の嚴命によりて、夜見の國なる月界に神退ひに退はれ、四魂合同して國大立命となり、月の大神の精靈に感じてふたたび地上に降り、千辛萬苦を嘗め、五六七神政の基礎的活動を開始されたれど、體主靈從の八王大神および大自在天一派の神人は、一柱として此の間の消息を知るもの無かりけり。次に高照姫命、眞澄姫、言靈姫、龍世姫は、大地の底深く地月の世界に神退はれたまひ、地月の精靈に感じて大地中の守護神と現はれ、四魂合同して金勝要之神となり、時を得て地表の世界に出現し、五六七神政の基礎的神業に盡力されつ太古より現代に至るまで神界にあつて、その活動を續けられつつありしなり。

されど八王大神系の神司らも、大自在天系の神司らも、一柱としてこの神業を

知了し居る者は絶對にあらざりしなり。神諭に、

「昔の神代が環り來て、元の昔の神代に立替るぞよ、三千世界一度に開く梅の花」
などの神示を十分味はふべきなり。

さて美山彦、國照姫の二人は、右の諸神人を國祖の御神權によつて、追放せしむべきことを、面を犯して強硬に進言し、さいはひにその目的は達したるが、肝腎かなめの國祖の自發的御退隱の勸告に對しては、さすがの邪神も口籠り發言を躊躇し居たり。大神は矢つぎ早に、

「汝の進言はこれにて終れりや」

と問はせたまふに、二使者は大神の威嚴に討たれて何心なく、

「もはや申し上ぐることにこれ無く候」

と、思はず答申したりける。國祖大神は二使者の答を合圖に、ツト立ちて玉の襖を手づから閉ぢ奥殿深く隠れさせたまへり。二柱の使者は奥齒に物の挟まれる如き心地しながら勢なく、その結果を八王大神に奏上したり。八王大神は肝腎の國祖大神に對する自發的御退隱を勸告し能はざりし二人の卑怯を怒り、直ちにこれ

に蟄居を嚴命したれば、夜食に外れた梟鳥面ふくらせながら悄然として退場したりける。

(大正一〇・一二・二九 舊一二・一 出口瑞月)

第四五章 ああ大變(一九五)

ここに八王大神は諸神人と圖り、その一致的意见を集めて、天上にまします日の大神、月の大神、廣目大神に、國祖の頑強にして到底地上世界統理の不適任なることを奏上すべく、天地を震動させながら數多の神人を率ゐて、日の若宮に參上り大神に謁し、國祖御退隱の希望を口を極めて奏上したり。

天上の大神といへどもその祖神は、國祖國治立命なれば、大いに驚きたまひ、如何にもして國祖の志を翻さしめ、やや緩和なる神業神政を地上に施行して、萬神の心を和めしめ、從來のごとく國祖執權の下に諸神人を統一せしめむと、焦慮

せられたるは、骨肉の情としては實にもつとも次第なりといふべし。

ここに天の若宮にます日の大神、廣目大神および、月界の主宰神月の大神は、八王大神以下の神人に對し、追つて何分の沙汰あるまで下土に降りて命を待つべしとの神命に、唯々諾々として降り來たりける。

ア、國祖國治立命は、大宇宙の太祖大六合治立尊の神命を遵奉し、天地未分、陰陽未剖の太初より、大地の中心なる地球世界の總守護神として、修理固成の大業を遂行し、久良藝那す漂へる神國を統轄し、律法を嚴行したまひける。されど大神の施[?]たるや、あまりに嚴格にして剛直なりしたため、混沌時代の主管神としては、少しく不[?]適任たるを免がれざりき。ゆゑに部下の諸神人は、神政施行上、非常なる不便を感じゐたるなり。さいはひ和光同塵的神策を行はむとする八王大神および、自在天の施政方針の臨機應變にして活殺自在なるに、何れの神人も贊成を表し、つひに常世城に萬神集合して、國祖の退隱されむことを決議するに至れるなり。

三柱の大神は地上世界の狀況やむを得ずとなし、涙を呑んで萬神人の奏願を聽

許せむとせられたり。されど一旦地上世界の主宰者に任せられたる以上は、神勅の重大にして、軽々しく變改すべきものに非ざることを省みたまひて、容易に萬神人の奏願を許させたまはず、直ちに國祖に向つて少しく緩和的の神政を行ひたまふべく、種々と言をつくして、あるひは慰撫し、あるひは説得を試みたまひける。されど、至正、至直、至嚴、至公なる國祖の聖慮は、三體の大神の御命令といへども容易に動かしたまはざりける。

三體の天の大神は、ほとんど手を下すに由なく、ここに、國祖の御妻豊國姫命を天上に招きて、國祖に對し、時代の趨勢に順應する神政を施行さるやう、諫言の勞を取らしめむとなしたまひぬ。豊國姫命は神命を奉じて聖地に降り、百方言を盡して、天津大神の神慮を傳へ、涙とともに諫言したまひたれど、元來剛直一途の國祖大神は、その和光同塵の神政を行ふことを好みたまはず、斷乎として妻の諫言を峻拒し天地の律法の神聖犯すべからざるを説示して寸毫も譲りたまはざりける。

ここに豊國姫命は止むを得ずふたたたび天上に上りて、三體の大神に國祖の決心

強くして、到底動かすべからざることを奏上されたり。

時しも八王大神は、豊國姫命の後を追ひて、天上に登りきたり、天の若宮にます日の大神の御前に恭しく奏問状を捧呈して裁許を請ひぬ。日の大神は、八王大神の奉れる奏問状を御覽遊ばされて、御面色俄に變らせたまひ、太き息をつきたまひける。その文面には、

國祖國治立命は、至嚴至直にして律法を嚴守したまふ神聖者とはまをせども、その實は正反對の行動多く、現に前代常世彦命、常世城に大會議を開催するや、聖地の從臣なる、大江山の鬼武彦にみづから祕策を授け、權謀術數の限りをつくして、至嚴至聖なる神人らの大會議を混亂紛糾せしめ、つひに根底より顛覆せしめたたまへり。吾らをはじめ、地上世界の神人は、もはや國祖を信賴したてまつる者一柱もなし。速やかに國祖を退隱せしめ、温厚篤實にして名望天下に冠たる盤古大神鹽長彦命をして、國祖の神權を附與したまはむことを、地上一般の神人の代表として奏請し奉る。以上敬白

地上の世界一般の神人らは、幾回となく天上に上りきたり、國祖大神の御退隱

を奏請すること頻にして、三體の大神はこれを制止し、慰撫し、緩和せしむる神策につきたまひ終に自ら天上より三體の大神相ともなひて、聖地に降らせたまひ、國祖大神をして、聖地エルサレムを退去し、根の國に降るべきことを、涙を呑み以て以心傳心的に傳へられたりける。國祖大神は、三體の大神の深き御心情を察知し、自發的に、

「我は元來頑迷不靈にして時世を解せず、ために地上の神人らをして、かくのごとく常暗の世と化せしめたるは、まつたく吾が不明の罪なれば、吾はこれより根の國に落ちゆきて、苦業を嘗め、その罪過を償却せむ」
と自ら千座の置戸を負ひて、退隱の意を表示したまひける。

ア、國祖は、至正、至直、至嚴、至愛の神格を發揮して、地上の世界を至治太平の神國たらしめむと、永年肝膽を碎かせたまひし、その大神業は、つひに萬神人の容るところとならず、かへつて邪神惡鬼のごとく見做されたまひ、世界平和のために一身を犠牲に供して自ら退隱の決心を定めたまひたる、その大慈大悲の大御心を拜察したてまつりて、何人か泣かざるものあらむや。

神諭に曰く、

「善一と筋の誠ばかりを立貫いて来て、悪神崇り神と申され、悔し残念、苦勞、
艱難を耐り詰めて、世に落とされて蔭に隠れて、この世を潰さぬために、世界を
守護いたして居りた御蔭で、天の御三體の大神の御目にとまり、今度の二度目の
天の岩戸を開いて、また元の昔の御用を致すやうになりたぞよ」
と示されたるごとく、數千萬年の長き星霜を隠忍したまひしは、實に恐れ多きこ
となり。

さて三體の大神は國祖にむかつて、

「貴神は我胸中の苦衷を察し、自ら進んで退隱さるるは、天津神としても、千萬
無量の悲歎に充たさる。されど我また、一陽來復の時を待つて、貴神を元の地上
世界の主權神に任ずることあらむ。その時來らば、我らも天上より地上に降り來
りて、貴神の神業を輔佐せむ」
と神勅嚴かに宣示したまひけり。

ここに國祖大神は、妻の身に累を及ぼさむことを憂慮したまひて、夫妻の縁を

斷ち、獨り配所に隱退したまひけり。國祖はただちに幽界に降つて、幽政を視たまふこととなりぬ。されど、その精靈は地上の神界なる、聖地より東北にあたる、七五三垣の秀妻國に止めさせたまひぬ。諸神は國祖大神の威靈のふたたび出現されむことを恐れして、七五三繩を張り廻したり。ここに豊國姫命は、夫の退隱されしその悲惨なる御境遇を坐視するに忍びずして、自ら聖地の西南なる島國に退隱し、夫に殉じて世に隱れ、神界を守護したまひける。ここに艮の金神、坤の金神の名稱起れるなり。豊國姫命が夫神の逆境に立たせたまふをみて、一片の罪なく過ちなく、かつ一旦離縁されし身ながらも、自ら夫神に殉じて、坤に退隱したまひし貞節の御心情は、實に夫妻苦樂をともになすべき、倫理上における末代の龜鑑とも稱したてまつるべき御行爲なりといふべし。

ア、天地の律法を國祖とともに制定したる天道別命および、天真道彦命も八王大神のために彈劾されて、ここに天使の職を退き、恨を呑んで二神は、世界の各地を遍歴し、ふたたび身を變じて地上に顯没し、五六七神政の再建を待たせたまひける。惟神靈幸倍坐世。

國祖大神以下の神々の御退隱について、その地點を明示する必要上、神示の宇宙を次章に述べ示さむとす。

(大正一〇・一二・二九 舊一二・一 出口瑞月)

(第四章、第五章 昭和一〇・一・二三 於佐賀市松本忠左氏邸 王仁校正)

第九篇 宇宙真相

第四六章 神示の宇宙 その一(一九六)

我々の肉眼にて見得るところの天文學者の所謂太陽系天體を小宇宙といふ。大宇宙には、斯くの如き小宇宙の數は、神示によれば、五十六億七千萬宇宙あり。

りといふ。宇宙全體を總稱して大宇宙といふ。

我が小宇宙の高さは、縦に五十六億七千萬里あり、横に同じく、五十六億七千萬里あり、小宇宙の靈界を修理固成せし神を國常立命といひ、大宇宙を總括する神を大六合常立命といひ、また天之御中主大神と奉稱す。

小宇宙を大空と大地とに二大別す。而して大空の厚さは、二十八億三千五百萬里あり、大地の厚さも同じく二十八億三千五百萬里ある。

大空には太陽および諸星が配置され、大空と大地の中間即ち中空には太陰及び北極星、北斗星、三ツ星等が配置され、大地には地球及び地汐、地星が、大空の星の數と同様に地底の各所に撒布されあり。大空にては之を火水といひ、大地にては之を水火といふ。大空の星は夫れ夫れ各自光を有するあり、光なき暗星ありて凡て球竿状をなしあるなり。

大地氷山の最高部と大空の最濃厚部とは密着して、大空は清く軽く、大地は濁りて重し。今、圖を以て示せば左の如し。

?

大空の中心には太陽が結晶し、その大きさは大空の約百五十萬分の一に當り、地球も亦大地の約百五十萬分の一の容積を有せり。而して太陽の背後には太陽と殆ど同形の水球ありて球竿状をなし居れり。その水球より水氣を適宜に湧出し、元來暗黒なる太陽體を助けて火を發せしめ、現に見る如き光輝を放射せしめ居るなり。故に太陽の光は火の如く赤くならず、白色を帶ぶるは此の水球の水氣に原因するが故なり。

太陽は斯くの如くして、小宇宙の大空の中心に安定し、呼吸作用を起しつつあるなり。

?

又、地球（所謂地球は神示によれば圓球ならずして寧ろ地平なれども、今説明の便利のため從來の如く假りに地球と稱しておく）は、四分の三まで水を以て覆はれあり。水は白色なり。この大地は其の中心に地球と殆ど同容積の火球ありて、地球に熱を與へ、且つ光輝を發射し、呼吸作用を營み居るなり。而て、太陽は呼吸作用により吸收放射の活用をなし、自働的傾斜運動を起しあるなり。されど太

陽の位置は大空の中心にありて、少しも固定的位置を變ずることは無し。

?

地球は大地表面の中心にありて、大地全體と共に自働的傾斜運動を行ひ、その傾斜の程度の如何によりて、晝夜をなし春夏秋冬の區別をなすものなり。自働的小傾斜は一日に行はれ、自働的大傾斜は四季に行はる。彼岸の中日には太陽と地球の大傾斜が一樣に揃ふものなり。又六十年目毎にも約三百六十年目毎にも、夫々の大々傾斜が行はれ、大地および地球の大變動を來す時は即ち極大傾斜の行はるる時なり。

太陽は東より出でて西に入るが如く見ゆるも、それは地上の吾人より見たる現象にして、神の眼より見る時は、太陽、地球共に少しも位置を變ずることなく、前述の如く、單に自働的傾斜を行ひてゐるのみなり。

天に火星、水星、木星、金星、土星、天王星、海王星その他億兆無數の星體ある如く、大地にも亦同様に、同數同形の汐球が配列されありて、大空の諸星も、大地の諸汐球も、太陽に水球がある如く、地球に火球がある如く、凡て球竿状を

なしあるものにして、各それ自體の光を有しあるなり。なほ、暗星の數は光星の百倍以上は確かにあるなり。

太陰は特に大空大地の中心即ち中空に、太陽と同じ容積を有して一定不變の軌道を行し、天地の水氣を調節し、太陽をして酷熱ならしめず、大地をして極寒極暑ならしめざるやう保護の任に當りあるものなり。

而して太陰の形は圓球をなし、半面は水にして透明體なり。而てそれ自體の光輝を有し、他の半面は全く火球となりあるなり。今圖を以て示せば次の如し。

(第四圖參照)



太陰は大空大地の中心を西より東に運行するに伴ひ、地汐をして或ひは水を地球に送らしめ、或は退かしむるが故に滿潮干潮の現象自然に起るものなり。神諭に、

☐ 月の大神様は此の世の御先祖様である
と示しあるは、月が大空と大地の呼吸作用たる火水を調節するの謂なり。火球は

呼吸作用を司り、地汐は吸気作用を司る。

「富士と鳴門の仕組が致してある」

といふ神示は、火球の出口は富士山にして、地汐は鳴門を入口として水を地底に注吸しあることを指示せるものなり。火球及び地汐よりは、なほ人體に幾多の血管神経の交錯せる如く、四方八方に相交錯したる脈絡を以て、地球の表面に通じあるものなり。

(大正一〇・一二・一五 舊一一・一七 櫻井重雄録)

第四七章 神示の宇宙 その二(一九七)

前節に述べたるところを補ふために、更に少く断片的に説明を加へ置くべし。併し自分の宇宙観は凡て神示の儘なれば、現代の天文学と如何なる交渉を有するや否やは全然自分の關知するところにあらず。

自分は神示に接してより二十四年間、殆ど全く世界の出版物その物から絶縁し居たり。随つて現在の天文学が如何なる程度にまで進歩發達しめるかは無論知らざるなり。故に自分の述ぶる宇宙觀に對して、直ちに現代の天文学的知識を以て臨むとも、俄に首肯し難き點少なからざるべし。

前節に引續き太陽のことより順次述ぶる事とせり。

太陽は暗體にして、太陽の色が白色を加へたる如き赤色に見ゆるは、水が光り居るが故なり。暗夜に赤布と白布とを比較して見れば白布の方がハツキリ見ゆるものなり。これに依りて見るも水の光りあることが判じ得るなり。

大宇宙間の各小宇宙は互に牽引してあるものにして、それと同じく太陽がその位置を支持するは諸星の牽引力によるものなり。故に天主は太陽を支持する爲に先づ諸星辰を造りたり。(第一篇天地剖判の章參照)

太陽と我が地球との距離は、小宇宙の直徑五十六億七千萬里の八分の一に當り、而て大空の諸星は皆それ自體の光を放ちつつ太陽の高さ以上の位置を占めぬるなり。太陽の光は、決して大空に向つては放射されず、恰も懷中電燈の如く、凡て

大地に向つてのみ放射さるるなり。

普通我々は太陽の昇る方角を東としてゐるが、本來宇宙それ自體より言へば、東西南北の別なし。佛説に、

□ 本來無東西何處有南北 □

とあるも、この理に由る。今、東西南北の區別を立つれば、大地の中心たる地球が北極に當る。北とは氣垂、水火垂、呼吸垂、の意なり。南とは「皆見」えるといふ意味の言靈なり。

地球は前述の如く、世の學者らの信ずる如き圓球にあらずして地平なり。我々の所謂地球は、大地の中心なる極めて一小部分にて、大地は第一圖に示す如く、悉く氷山なり。而て其の氷山は所謂地球を相距る程愈嶮峻になり行く。普通氷山の解けるといふことは、地球の中央に接近せる氷山の解けるのみにして、大部分の氷山は決して解くことはなきものなり。

地球説の一つの證據として、人が海岸に立ちて沖へ行く舟を眺める場合に、船が段々沖へ行くに従つて、最初は船體を没し、次第に檣を没して行くといふ事實

を擧げられるやうだが、それは我々の眼球がすでに圓球に造られてあるが故である。望遠鏡は凹鏡であるから、人間の瞳との關係で、遠方が見えるのである。故に地球説を固執する人々は先づ人間の眼球そのものの研究より始めねばなるまい。地球は又一種の光輝を有し、暗體ではない。

宇宙全體の上に最も重大なる役目を有するのは、太陰即ち月である。太陽の恩恵によつて萬物の生成化育し行くことは誰でも知つてゐるが、蔽はれたる月の洪大無邊なる恩恵を知る者は殆ど全く無い。

宇宙の萬物は、この月の運行に、微妙にして且つ重大なる關係を有つてゐる。月は二十九日餘即ち普通の一月で、中空を一周する。但し、自轉的運行をするのではなく、單に同一の姿勢を保つて運行するに過ぎない。大空に於ける月の位置が、たとへば月の三日には甲天に、四日には乙天と順次に變つて行くのは、月が静止してゐるのでなくして西より東に向つて運行してゐる證據である。

月が我々の眼に見えるのは、第一圖の上線を月が運行してゐる場合で、下線を通過してゐる時は全然我々には見えない。月が上線を運行する時は、月讀命の活

動であり、下線を運行する時は素盞鳴尊の活動である。

次に月を眺めて第一に起る疑問は、あの月面の模様である。昔から猿と兔が餅を搗いてあるといはれるあの模様は、我々の所謂五大洲の影が月面に映つてあるのである。それ故、何時も同じ模様が見えてゐる。蝕けた月の半面に朧げな影が見えるのは、月それ自体の影である。つまり月の半面たる火球の部分が見えてゐるからである。

月蝕の起るは、月が背後から太陽に直射された場合である。日蝕は、月が太陽と地球との中間に入つて、太陽を遮ぎつた場合である。

銀河は、太陽の光が大地の氷山に放射され、それが又大空に反射して、大空に在る無数の暗星が其の反射の光によつて我々の眼に見えるのである。銀河の外縁に凸凹あるは氷山の高低に凸凹あるが爲めである。

又彗星は大虚空を運行し時に大地より眺められる。大虚空とは此の小宇宙の圏外を稱するので、青色を呈してゐる。大空の色は緑色である。併し、我々は大空の色のみならず、青色の大虚空をも共に通して見るが故に、碧色に見えるのである。

る。

此の小宇宙を外より見れば、大空は大地よりは「ずっと」薄き紫、赤、青等各色の靈衣を以て覆はれ、大地は黄、淺黄、白等各色の厚き靈衣を以て包まれてゐる。そしてこの宇宙を全體として見る時は紫色を呈してゐる。これを顯國の御玉といふ。

わが小宇宙はこれを中心として他の諸宇宙と、夫れ夫れ靈線を以て蜘蛛の巢の如く四方八方に連絡し相通じてゐるのであつて、それらの宇宙にも、殆ど我々の地球上の人間や動植物と同じ様なものが生息してゐない。但此の我が小宇宙に於ける、地球以外の星には神々は坐ませども、地球上に棲息する如き生物は斷じてゐない。この小宇宙と他の宇宙との關係を圖によりて示せば、第五圖の如くである。

第四八章 神示の宇宙 その三（一九八）

王仁は前席に於て、太陽は暗體であつて、其の實質は少しも光輝を有せぬと言ひ、また地球は光體であると言つた事に就き、早速疑問が續出しましたから、念のため茲に改めて火と水との關係を解説しておきます。されど元來の無學者で、草深き山奥の生活を續け、且つ神界よりの嚴命で、明治以後の新學問を研究する事を禁じられ、恰も里の仙人の境遇に二十四年間を費したものでありますから、今日の學界の研究が何の點まで進んで居るかと云ふ事は、私には全然見當が付かない。日進月歩の世の中に於て、二十四年間讀書界と絶縁して居たものの口から吐き出すのですから、時世に遅れるのは誰が考へても至當の事でありませぬ。昔話にある、浦島子が龍宮から歸つて來た時の様に世の中の學界の進歩は急速であつて、私が今日新なる天文、地文、その他の學問を見ましたならば、嘸驚異の念にからるるで在らうと思ひます。併し私としては今日の科學の圏外に立ち、神示のままの實驗的物語をする迄です。

「神ながら虚空の外に身をおきて日に夜に月ぬものがたりする」現代文明の空気に觸れた學者の耳には到底這入らないのみならず、一種の誇大妄想狂と見らるかも知れませぬ、然れど「神は賢きもの、強きものにあらはさずして、愚なるもの、弱きものに誠をあらはし玉ふ」と言へる聖キリストの言を信じ、愚弱なる私に眞の神は、宇宙の眞理を開示されたのでは無からうかとも思はれるのであります。

凡て水は白いものであつて、光の元素である。水の中心には、一つのゝがあつて、水を自由に流動させる。若しこのゝが水の中心から脱出した時は固く凝つて、氷となり、少しも流動せない。故に水からゝの脱出したのを、氷と云ひ、又は、氷と云ふ。火もまたその中心に水なき時は、火は燃え、且つ光る事は出来ぬ。要するに水を動かすものは火であり、火を動かすものは水である。故に、一片の水氣も含まぬ物體は、どうしても燃えない。

太陽もその中心に、水球より水を適度に注入して、天空に燃えて光を放射し、大地はまた、冰山や水の自然の光を地中の火球より調節して、その自體の光を適

度に發射して居る。

次に諸星の運行に、大變な遅速のある様に地上から見えるのは、地上より見
星の位置に、遠近、高低の差あるより、一方には急速に運行する如く見え、一方
には遅く運行する様に見えるのである。が、概して大地に近く、低き星は速く見
え、遠く高き星はその運行が遅い様に見える。

例へば、汽車の進行中、車窓を開いて遠近の山を眺めると、近い處にある山は、
急速度に汽車と反對の方向に走る如く見え、遠方にある山は、依然として動かな
い様に見える又その反對の方向に走つても、極めて遅く見ゆると同一の理である。

前述の如く、太陰（月）は、太陽と大地の中間に、一定の軌道を採つて公行し、
三角星、三ツ星、スバル星、北斗星の牽引力に由つて、中空にその位置を保つて
公行して居る。月と是等の星の間には、月を中心として、恰も交感神経系統の如
うに、一種の微妙なる靈線を以て、維持されてある。

太陽と、大空の諸星との關係も亦同様に太陽を中心として、交感神経系統の如
うに一種微妙の靈線を以て保維され、動、靜、解、凝、引、弛、合、分の八大神

力の、適度の調節に由つて、同位置に安定しながら、小自動傾斜と、大自動傾斜を永遠に續けて、太陽自體の呼吸作用を營んで居る。

大地も亦その中心の地球をして、諸汐球との連絡を保ち、火水の調節によつて呼吸作用を營み居る事は、太陽と同様である。地球を中心として、地中の諸汐球は、交感神経系統の如く微妙なる靈線を通じて、地球の安定を保持して居る。

また地球面を大地の北極と云ふ意味は、キタとは、前述の如く、火水垂ると云ふことであつて、第六圖の如く、（挿圖参照）太陽の水火と、大地の中心の水火と、大地上の四方の氷山の水火と、太陰の水火の垂下したる中心の意味である。

人間が地球の陸地に出生して活動するのを、水火定と云ふ。故に地球は生物の安住所であり、活動經綸場である。また水火即ち靈體分離して所謂死亡するのを、身枯留、水枯定と云ふのは、火水の調節の破れた時の意であります。されど靈魂上より見る時は生なく、死なく、老幼の區別なく、萬劫末代生通しであつて、靈魂即ち吾人の本守護神から見れば、單にその容器を代へるまでであります。

（大正一〇・一二・二七 舊一一・二九 加藤明子録）

第九章 神示の宇宙 その四（一九九）

『瑞月憑虚空、照破萬界暗』
とは神示の一端である。

瑞月王仁は前述の如く、現代の盛んな學說に少しも拘泥せず、靈界にあつて見聞させるそのま
まを、出放題に喋舌る斗りである。是に就いては、滿天下の智者學者が邪説怪論として、攻撃の矢
を向けて來るであらう。

大空に懸る無数の星辰の中には、其の光度に強弱あり、厚薄ありて、その色光一定して居ない
のは、決して星の老若大小に依るのではない。その水火調節の分量及び金、銀、銅、鐵等の包含の
多少の如何に由つて種々に光色が變つて見えるまでである。水の分量の多い時は白光を顯はし、
火の分量の多い星は赤色を表はす。故に星の高低や位置に由つて種々の光色を各自に發射して居

る。星の光の☆の如く五光射形に地球より見えるのは火の量分の多い星であり、☆の如く六光射形に見ゆるのは水の量分の多い星である。火の字の各端に○点を附して見ると✱のごとく五つの○点となる。五は天を象り、火を象る。また水の字の各端に○点を附して見ると、✱の如く六つの○点となる。六は水を象り、地を象る。故に五光射星と六光射星は天上にあつて水火の包含量の多少を顯はして居るのであります。

又星は太陽の如く、自動傾斜運動を爲さず、月球のやうに星自體が安定して光つて居るから、五光射、六光射が良く地球上から見得らるるのである。

太陽もまた星の様に、安定し自體の傾斜運動をせなかつたら、五光射體と見え、又は六光射體と見えるのであるが、その自動的傾斜運動の激しきために、その光射體が圓く見えるのである。譬へば蓄音機の圓盤に、色々の畫や文字を書き記しておいて、これを廻して見ると、その色々の形の書畫が盤と同様に、丸くなつて見えるやうなものである。

また北斗星と云ふのは、北極星に近い星であつて、俗に之を七劍星、又は破軍星と稱へられてゐる。この七劍星はまた天の瓊矛とも言ひ、伊邪那岐の神、伊邪那美の神が天の浮橋に立つて漂へる泥海の地の世界を、鹽古淤呂古淤呂にかき鳴らしたまひし宇宙修理固成の神器である。今日も猶我國より見る大空の中北部に位置を占めて、太古の儘日、地、月の安定を保維して居る。

また北斗星は、圓を畫いて運行しつつある如く地上より見えて居るが、是は大空の傾斜運動と、大地の傾斜運動の作用に由つて、北斗星が運行する如く見ゆる斗りである。萬一北斗星が運行する様な事があつては、天地の大變を來すのである。併し他の星は、地上より見て、東天より西天に没する如くに見ゆるに拘らず、北斗星の運行軌道の、東西南北に頭を向けて、天界を循環するが如くに見ゆるのは、その大空の中心と、大地の北中心に位して居るため、他の諸星と同じ様に見えぬのみである。譬ば、雨傘を擴げて、その最高中心部に北極星稍下つて北斗星の畫を描き、その他

の傘の各所一面に、星を描いて直立しその傘の柄を握り、東南西北と傾斜運動をさせて見ると、

北斗星は圓を描いて、軌道を巡る如く見え、廣い端になるほどその描いた星が、東から西へ運行するやうに見える。之を見ても、北斗星が北極星を中心として圓き軌道を行するのでない事が分るであらう。

また太陽の光線の直射の中心は赤道であるが、大地の中心は北極即ち地球である。大地の中心に向つて、大空の中心たる太陽が合せ鏡の如くに位置を占めて居るとすれば、地球の中心たる北部の中津國即ち我が日本が赤道でならねばならぬと云ふ人があるが、それは太陽の傾斜運動と、地球の傾斜運動の或る關係より、光線の中心が地球の中心即ち北部なる我日本に直射せないためである。また赤道を南に距るほど、北斗星や北極星が段々と低く見え、終には見えなく成つて了ふのは、大空と大地の傾斜の程度と、自分の居る地位とに關係するからである。是も雨傘を上と下と二本合して傾斜廻轉をなし乍ら考へて見ると、その原因が判然と分つて來る。

(大正一〇・一二・二七 舊一一・二九 外山豊二録)

第五〇章 神示の宇宙 その五（二〇〇）

宇宙間には、神靈原子といふものがある。又單に靈素と言つてもよい、一名火素とも言ふ。火素は萬物一切の中に包含されており、空中にも澤山に充實して居る。又體素といふものがあつて單に水素とも云ふ。火素水素相抱擁歸一して、精氣なるもの宇宙に發生する、火素水素の最も完全に活用を始めて發生したものである。この精氣より電子が生れ、電子は發達して宇宙間に電氣を發生し、一切の萬物活動の原動力となるのである。

そして此の靈素を神界にては、高御産巢日神と云ひ、體素を神御産巢日神と云ふ。この靈體二素の神靈より、遂に今日の學者の所謂電氣が發生し、宇宙に動、靜、解、凝、引、弛、合、分の八力完成し、遂に大宇宙小宇宙が形成された。二ユートンとやらの地球引力説では、到底宇宙の眞理は判明しないでありませう。物質文明は日に月に發達し、神祕の鍵を以て、神界の祕門を開いた如くに感ぜられる世の中になつたと言つて、現代の人間は誇つて居るやうであるが、未だ未

だ宇宙の眞理や科學は神界の門口にも達して居ない。併し今日は、高皇産靈（靈系）、神皇産靈（體系）の二大原動力より發生したる電氣の應用は多少進んで來て、無線電信や、電話やラヂオが活用されて來たのは、五六七の神政の魁として、尤も結構な事であります。併し乍ら物には一利一害の伴ふもので、善惡相混じ、美醜互に交はる造化の法則に漏れず、便利になればなる程、一方に又それに匹敵する所の不便利な事が出来るものである。電氣なるものは、前述の如く宇宙の靈素、體素より生成したものであるが、其の電氣の濫用のために、宇宙の靈妙なる精氣を費消すればするだけ、反對に邪氣を發生せしめて宇宙の精氣を抹消し、爲に人間その他一切の生物をして軟弱ならしめ、精神的に退化せしめ、邪惡の氣宇宙に充つれば滿つる程、空氣は濁り惡病發生し害蟲が増加する。されど今日の人間としては、是以上の發明はまだ出來て居ないから、五六七神世出現の過渡時代に於ては、最も有益にして必要なものとなつて居る。モ一步進んで不増不減の靈氣を以て電氣電話に代へる様になれば、宇宙に忌はしき邪氣の發生を防ぎ、至粹至純の精氣に由つて、世界は完全に治まつて來る。この域に達するにも、今日の

やうな淺薄なものを捨て、神靈に目醒めねばならぬ。大本信者の中には、電氣燈を排斥する方々が、たまたま在るやうに聞きますが、夫は餘り氣が早過ぎる。これ以上の文明利器が發明されて、昔の行燈が不用になつた様に、電燈が不用になる時機の來た時に電氣を廢すればよい。

また宇宙には無限の精氣が充滿してあるから、何程電氣を費消しても無盡藏である。決して、無くなると云ふ心配は要らぬ。また一旦電氣濫費より發生した邪氣も宇宙無限の水火の活動によつて、新陳代謝が始終行はれて居るから大丈夫である。この新陳代謝の活用こそ、神典に所謂祓戸四柱の大神の不断的活動に由るのである。

人間は宇宙の縮圖であつて天地の移寫である。故に人體一切の組織と活用が判れば、宇宙の真相が明瞭になつて來る。諺に曰ふ「燈臺下暗し」と、吾人の體內にて間斷なく天の御柱なる五大父音と、國の御柱なる九大母音が聲音を發して生理作用を營み居る如く、宇宙にもまた無限絶大の聲音が鳴り鳴りて、鳴り餘りつつある。而して大空は主として五大父音を發聲し、地上及び地中は主として九大

母音が鳴り鳴りて、鳴り足らざる部分は天空の五大父音を以て之を補ひ、生成化育の神業を完成しつつある。天空もまた大地の九大母音の補ひに依つて、克く安靜を保ち、光温を生成化育しつつある。またこの天地父母の十四大音聲の言靈力によつて、キシチニヒミイリヅの火の言靈を生成し、またケセテネヘメエレエの水の言靈と、コソトノホモヨロヲの地の言靈と、クスツヌフムユルウの結（即ち神靈）の言靈とを生成し、天地間の森羅万象を働き働かしめつつ造化の神業が永遠無窮に行はれて居る。試みに天空の聲を聞かむとすれば、深夜心を鎮めて、左右の人指を左右の耳に堅く當てて見ると、慥にアオウエイの五大父音を歴然と聞くことが出来る。瑞月王仁の無學者が斯んなことを言つても、現代の學者は迂遠極まる愚論と一笑に附し去るであらうが、身體を循環する呼吸器音や、血液や、食道管や、腸胃の蠕動音がそれである。然るにその音聲を以て宇宙の音響と見做すなど、實に呆れて物が言へぬと笑はれるであらう。安くんぞ知らむ、人間の體內に發生する音響そのものは、宇宙の神音靈聲なることを。今醫家の使用する聴診器を應用して考へ見る時は、心臓部より上半身の體内の音響は、五大父音が主

として鳴り轟き、以下の内臓部の音響は九大母音鳴り渡り、その他の火水地結の音聲の互に交叉運動せる模様を聞くことが出来る。人體にして是等の音聲休止する時は、生活作用の廢絶した時である。宇宙も亦この大音聲休止せば、宇宙は茲に潰滅して了ふ。地中の神音は人間下體部の音響と同一である。只宇宙と人體とは大小の區別あるを以て、其の音聲にも大小あるまでである。大聲耳裡に入らず、故に天眼通、所謂透視を爲すに瞑目する如く、宇宙の大聲を聞かむとすれば、第一に閉耳するの必要がある。神典に曰ふ、「鳴り鳴りて鳴り餘れる處一所あり、鳴り鳴りて鳴り足らざる處一所あり」と、是れ大空及び大地の音聲活用の神理を示されたものである。聖書に曰ふ「太初に道あり云々」と、之に依りて宇宙言靈の如何なる活用あるかを窺知すべきである。

(大正一〇・一二・二八 舊一・三〇 松村仙造録)

(第四六章 第五〇章 昭和一〇・一・二三 於車中 王仁校正)

さんぜんせかい、いちどにひらくむめのはな、こんじんのよになりたぞよ。さん

ぜんせかいが、いちどにひらくぞよ。しゆみせんざんにこしをかけ、あをくもが
さでみみがかくれぬぞよ。

(明治三十七年九月六日神諭)

附録 第二回高熊山參拜紀行歌

王仁作

高熊山參拜者名簿

(大正十一年二月五日)

(一)

大き正しき王みづのえの 戌いぬの節分祭すみて

神の【出口】の道【王】く 【仁】慈の【三】代の開け口 (出口王仁三

郎)

【直】く正しく【澄】渡る 心も清き【大】空【二】 (出口直澄)

大本瑞祥會々長 【湯川貫一】始めとし (出口大二)

神徳【高木】高熊の 四十餘り八ツの寶座をば (湯川貫一)

拜して神慮を息めむと 金【鐵】溶かす信仰の (高木鐵男)

心も固き益良【男】が 御國に盡す眞心は

天地の神もうべなひて 雲【井】の【上】に【留五郎】 (井上留五郎)

神と君とに捧げむと 孕む誠は世の人の

夢にも知らぬ【岩田】帶 二十五年の【久】しきを (岩田久太郎)

耐り詰めたる【太】元の 前の教主の王仁三【郎】

教の花も【櫻井】の 一視【同仁】神界の (櫻井同仁)

經綸に開く白梅の 四方に薰るを【松】心 (松村仙造)

【村】雲四方に搔別けて 須彌【仙】山にこしを掛け

天地を【造】りし大本の 神の稜威は内【外】の (外山豊二)

國々島々【山】川に 【豊二】あらはれ北の空 (原あさ)

光もつよき天の【原】 【あさ】ぢヶ原もいや【ひろこ】 (原ひろこ)

【遠】き近きの別ちなく 世はあし引の【山】ふかみ (遠山一仁)

神人【一】致【仁】愛の 祥たき御代となりぬらむ

【東】は小雲西四ツ【尾】 川を隔つる【吉】美の里 (東尾吉雄)

中に【雄】々しき龍やかた 節分祭も相すみて

【同】じ心の信徒がまめひと 【さき】を争ひステーション (同さき)

汽車に揺られて勇ましく 【東尾】さして進み行く (東尾萬壽)

名さえ芽出度【萬壽】苑 瑞祥會の大本部 (森良仁)

神の眞【森】も【良仁】の 和知の【高橋】打ち渡り (高橋常祥)

【常】磐の松の心もて 瑞【祥】閣に入りにけり

大井の【河】も名をかへて 保【津】の谷間降り行く (河津雄)

水勢益々【雄】大に 鳴り響くなる高熊の

【小竹】小柴の中分けて 【玖仁】武【彦】や【小和】田姫 (小竹玖仁

彦)

神の聖跡を慕ひつつ 【常】磐の松の色も【吉】く (小澤常吉)

茂りて【高井】神の山 い【こう】間もなく登り行く (高井こう)

【田二】と【谷】とに包まれし 巖に【繁】る一ツ葉の (田二谷繁)

色青々と威勢よく 榮え【三谷】の眺め【良】し (三谷良一郎)

【一】行二百五十人 祝詞の聲も清【郎】に

【藤】蔓生ふる坂道を 【津】たいて【暹】む神の子が (藤津暹)

【同】じ心の神の道 【ひさ】を没する草原を (同ひさ)

射る【矢】の如く走り【岸】 役員信者が【金】鐵の (矢岸金吉)

誠の心ぞ雄々しけれ 色【吉】く【重】れる【松】の山 (重松健義)

【健】固の足の進み【義】く 【濱端】ならぬ池の端 (濱端善一)

【善】男美女の【一】隊は 【森】の下路【永】々と (森永熊太)

【熊】もつつまず【太】どりゆく

(二)

甲子^{きのえね}四月【江頭】がしら 【右】も左も知らぬ身の (江頭右門)

【門】口あけて【上】り行く 大【原】山や經塚を (上原芳登志)

上るを【芳登志】神風や 【福井】の空を笠に着て (福井又次郎)

【又】もや進む神の山 【次】第に【倉】き馬の【瀨】の (倉瀬吉稚)

ながめ【吉】ろしく【稚】雄が 奥山さして夜の道

いなむ由なき【稻川】の いと【泰】らけく渡り行く (稻川泰造)

神の【造】りし蛙岩 右手にながめて薄原

【山口】近くなりければ 【恆】に似合ぬ山【彦】の (山口恆彦)

とどろく聲をしるべにて 一視【同】仁博愛の (同安子)

神のふところ【安々^{やすやす}】と 足を早めて【長谷川】や (長谷川八重子)

【八重津】草【村藤】の蔓　　ふみ分け進む【太】間子原　　（津村藤太郎）
拓く道芝茂り行く　　神の教えぞたふとけれ

（三）

【吾】故【郷】に【勝】たれる　　神の御山【哉】世を渡す　　（吾郷勝哉）

小幡の【橋】の【本】清く　　流るる【瑞】の水勢は　　（橋本瑞孝尼）

忠【孝】々と響くなり　　由緒も深き宮【垣】内　　（垣口長太郎）

神の出【口】の【長】として　　世の【太】元の【大】神の

珍の言靈神【賀】の【龜】の瑞祥も充ち【太郎】　　（大賀龜太郎）

五六七の御代を【松浦】の　　教の道もいち【治郎】し　　（松浦治郎助）

人力車に【助】けられ　　氣は【針】弓の遠き道　　（針谷又一郎）

【谷又】谷を【一】越えに　　圓滿清【郎】太祝詞

【古】き記憶を【田】どりつつ　　【初】めて【九郎】の味を知り　　（古田）

初九郎)

名さへ目出度龜【岡】の 【森】良仁氏東尾氏 (岡森常松)

【常】磐の【松】の心もて 【久】方ぶりに【勇】ましく (久勇藏)

登りて行く【藏】樂しけれ 【梅】花の薰る神の【村】 (梅村隆保)

【隆】々昇る朝日影 天【保】爺おやじの阿【房】面 (房前市三)

お【前】はよつぽど【市】助と 【三】くびられたる皮【堤】 (堤嘉吉)

安本丹の【嘉】すてらと 【吉】くも言はれぬ【吉】松【野】 (吉野光)

俊)

倅の力【光】る【俊】 曾我部穴太の【宮】垣【内】 (宮内喜助)

上田【喜】三郎の野呂【助】も 【青】鼻垂らした幼年【野】 (青野郁)

秀)

小さき心に馥【郁】と 包みし神力現はれて

人に【秀】れた神の術 ねがい【金井のえ】み深く (金井のえ)

神の教にしたがひて 【佐伯】ませうと山路を (佐伯史夫)

【史】わけ進む大丈【夫】の 【宇城】も見ずに【信】仰の
郎） （宇城信五

日【五郎】の力試めさむと 【土】ン百姓の小倅が
しけこき【居】宅を立て出でて 【重】い身體【夫】運びつつ
夫） （土居重

岩【石】ふみ別けまつ【崎】に よこ【米】もふらず上り行く
吉） （石崎米

心持【吉】き高【倉】の 山に【成】りなる神の【徳】 （倉成徳郎）
ワンパク野【郎】が【關】々と 谷【川】渉るも世の【爲二】 （關川爲
二郎）

つくさむものと三ツ栗の 【中】執臣のそのみすえ （中安元務）

【安】閑坊の喜樂人 世の太【元】の神【務】をば
清く盡さにやおか【内藤】 【いち】目散に神の道 （内藤いち）

心も身をも投げ【島田】 とくに解かれぬ神の【文】 （島田文）

どうかこう【加藤】案じつつ　　神の光に照されて　　（加藤明子）

心の空も【明】けにけり

（四）

【吉野】の花の開く時　　【時子】そよけれ神【徳】を　　（吉野時子）

【重】ぬる春と村肝の　　心も【敏】く【雄】々しくも　　（徳重敏雄）

【長井】夜道の露【亨】けて　　【二】つなき身を山の【中】　　（長井亨二）

谷【川】こえて松の木の　　【繁】り榮ゆる高【藏】の　　（中川繁藏）

神山目當てに只一人　　【神谷】佛を頼りとし　　（神谷千鶴）

【千】年の松に【鶴】巢ぐふ　　神世に早く【渡邊】の　　（渡邊淳一）

至粹至【淳】の善の道　　只【一】と筋に立て通し

その功績も【大久保】の　　世界【一】と【藏】響くなり　　（大久保一藏）

(五)

浦【安】國の神【德】を 顯はす道は【敬】神と (安德敬次)

【次】に尊皇愛國心 【松岡】神使の世の中を (松岡均)

治めて枅掛ひき【均^{なら}】す 教の花の道【開】き (開徳藏)

神の御【徳藏】たふとけれ 山川【野】邊に【崎】匂ふ (野崎信行)

【信】の花のまつりごと 【行】ひま【森】東の (森山登)

【山】の尾ノ上に旭影 【登】るが如き祥瑞の

五六七の御代は昔より 例しも【内藤】歡びつ (内藤正照)

斯の世を渡る【正】人の 頭に神の光り【照】る

春の緑の【若林】 【家支】しげき神の國 (若林家支^{いへかす})

萬世の【龜】玉の【井】に 遊ぶ目出度き【巖】の御代 (龜井巖義)

仁【義】の君の知召す 豊葦原の【中】津國 (中森篤正)

神のま【森】のいや【篤】く 世人の行ひ【正】しくて

人跡絶えし【山中】も 【きく】の薰りの芳ばしく (山中きく)

下萬民も【上窪】も 【純】み渡り行く【雄】々しさよ (上窪純雄)

【多田】何事も百の【玖仁】 【磨】く治まり開けつつ (多田玖仁磨)

一視【同】仁神の道 正【義】に強き益良【雄】の (同義雄)

胸も【鈴】し【木源之】 瑞の御魂の【助】け神 (鈴木源之助)

【古木】神代の有様を 物語りつつ【民】草の (古木民三郎)

迷を開く【三】ツ葉彦 綾の高天にあらはれて

音吐【郎】々述べ立つる 宇宙のほ【加納】空に立ち (加納森市)

神のま【森】の【市】の【森】 忠【義一】途の人【生】は (森義一)

【一】度は參れ皇神の 教の元の修行場 (生一正雄)

道は【正】しく【雄】大に 天下に傳はる麻柱の (同つね)

教の花は【つね】ならず 和光【同】塵今の世の

世の持方を根本より 【同】じ心の道の友 (同清子)

力協はせて【清】め行く 災わざはひ多き世の【中】の

【村】雲四方に掻分けて 誠つくしの神の【みよ】 (中村みよ)

古きを捨てて【新】しく 心の【海】に日月の (新海留吉)

影を【留】めて住【吉】の 神の稜威も【有】が【田】く (有田九臯)

千年の鶴は【九臯】に 翼を竝べ神の代を

謳ふときはの松の國 四方の國【土】を玉の【井】の (土井靖都)

水に清めて【靖都】と 治むる御代も【北】の空 (北村隆光)

【村】雲ひらく星の影 【隆】く【光】る世ぞ來ると【きく】 (同きく)

ア、【有】が【田】き加【美】代ぞ【登】 天津神たち八百萬 (有田美)

登)

國津神たち八百萬 民草けもの蟲けらも

【同】じ惠の露を浴み 【義夫】あしきを超越し (同義夫)

仁慈の【雨】の【森】きたる 月日を【松】の大本の (雨森松吉)

神の館ぞ樂もし【吉】 【坂】え目出度【木】日の本は (坂木義一)

仁【義一】途の神の國 【湯】津桂木の【淺】からぬ (湯淺寛康)

神の御陰は【寛康】 聖の御代のいま【近藤】 (近藤國廣)

まつ【國】民の胸の内 【廣】く【清】けく【田】のもしくは (清田西友)

【西^か】洋國^ら人も【友】々に 雲【井】ノ【上】に坐す神の (井上賴次)

力を【賴】り【次】々に 集り來る神の前

【龜】の齡の【田】のもしくは 斯世の【親】とあれませる (龜田親光)

神の【光】を道の【辻】 山の奥までいと【安】く (辻安英)

照らす梅花の【英】の 【中井しず】まるこの教 (中井しず)

一【同順次】に味ひつ 【大】原山や【西】山の (同順次郎)

谷を【佐】して【六】合治の 皇【大】神の御教を (大西佐六)

【谷】具久渡る國の端^{はて} 神を【敬】ひ世の人を (大谷敬祐)

【祐】け渡して六道の 【辻】にさまよふ【正】人を (辻正一)

誠【一】つの善の道 神の【宮】なる人の身を (宮田光由)

【田】すけ【光】らすことの【由】 四方の國々傳^{つた}【遠藤】 (遠藤銳郎)

精新氣【銳】の神司 鳴る言靈も【朗】かに

天地に響く勇ましさ

(六)

松樹茂れる神の【森】 岩窟の前に端坐して (森禮子)

神に御【禮】の祝詞【子】と 浅【桐山】に立ち籠めて (桐山綾子)

【綾】に畏【子】き久方の 高天【原】と田々へつつ (原田益市)

天の【益】人【市】なして 東や【西】や北南 (西村壽一)

四方の國人【村壽】々目 【一】度に開く言靈の

花咲き匂ふ千引【岩】 この堅【城】に信徒【達】 (岩城達禪)

座【禪】の姿勢を取り乍ら 怪し【木】心の【村】雲を (木村敬子)

伊吹拂ひて天地の 神を【敬】ひ真心を

煉りて仕ふる【神】の子の 【同】じ思ひは八百【よね子】 (同よね子)

杵築の宮に神集ひ 世の悉々を神議り

議らせ玉ふ神の【徳】 【重】き使命もい【佐三】つつ (徳重佐三郎)

三【郎】九の神の御使ひ 【武内】宿禰の代へ御魂 (武内なか)

【なか】き月日を送りまし 小松林と現はれて (同久米代)

この一【同】の信徒に 【久米】ども盡きぬ神の【代】の

その有様をた【上倉】 【あき】らめ諭し玉はんと (上倉あきこ)

天地【兼】ぬる常磐木の 【松】の大道を教【ゑつ】つ (兼松ゑつ)

【伊賀】しき稜威もうし【とら】の 隅にかくれて世を【衛】る (伊賀

とら)

【藤】き昔の【襄】と姥 神代【一】代耐へ忍び (衛藤襄一郎)

現はれ出でし【澤田】姫 【豊】榮昇りに【記】し行く (澤田豊記)

奇しき神代の物語り 聞くも嬉しき十四夜の

空に輝やく月の影 【西】山の【尾】に春きて (西尾愛藏)

明くれば二月十五日 仁【愛】の教を胎【藏】し

上【田】の家に歸りたる 【中】の五日のお【しま】れぬ (田中しま)

【上】田【野】家に生まれたる 年も二八の喜三郎 (上野豊)

【豊】國姫の教受け 吾家に歸り【北】の【里】 (北里利義)

【利】益を捨てて【義】に勇む 心とこそは成にけり

皇【大】神の御教は いよいよ【深】く【浩】くして (大深浩三)

普く天地に【三】ツの魂 過ぎ【西】罪の除け【島】い (西島新一)

心【新】らしく【一】つ道 【柴】り附い【田】る【元】の垢 (柴田元

輔)

神の【輔】けに拭はれて 漸やく【佐藤】りし神心 (佐藤六合雄)

御【六合雄】思ふ村肝の 心の【中島恆也】の (中島恆也)

塵も消え失せ心地【吉】し 【濱】の眞砂の數々を (吉濱芳之助)

花【芳】ばしき大神【之】 【助】けに生れ變りつつ

神と【同】じく【暉】りにけり (同暉)

(七)

【佐藤】りの道を【貞】やかに 【吉】く諾なひし信徒は （佐藤貞吉）

神の御徳を慕ひつつ 大島【小島】に出【修】し （小島修吾）

心も垢も荒波の 【吾】の身魂を清めむと

島の【中】なる神の【島】 【卯】の花匂ふ大【三】空 （中島卯三郎）

朝【日】受けつつ五里の路 つ【田井】て進む【正男】 （日田井正男）

女も共にまひ鶴の 狼の面【高】き中【塚】見 （高塚忠俊）

暗礁危ふく避け乍ら 【忠】勇義烈の【俊】才や

【小】兒も交り漕ぎ渡る よろこび【泉】の涌く如く （小泉清治）

【清】く【治】まる小島沖 義侠の心【富永】の （富永熊次郎）

波路【熊】なく【次】々に 島へ島へと行く船も

波と浪との【谷】あ【井】を 【又】もや潛る面【四郎】さ （谷井又四郎）

郎）

舞【鶴丸】を【忠】心に 教祖の神の【一】隊は （鶴丸忠一）

心も清く進みけり

【齋】きまつれる【藤】津代の 神の【吉】言を【次】々に (齋藤吉次)

異口【同】音に唱へつつ 神の【まさ】道ふみて行く (同まさ)

堅き心の信徒は 百のなやみも【伊東】ひなく (伊東きくよ)

神聲【きくよ】の嬉しさに 世の【大】本【野金】の神 (大野金一)

善【一】と筋を【田】て通ほす その眞心ぞ神の【村】 (田村慶之助)

至【慶】至祥【之】限りなり 【助】けも著るき【金】神の

錦【織】りなすいさをしは 日に夜に月に【益太郎】 (金織益太郎)

上中下なる【三段】の 神の御魂ぞ【崎】はひて (三段崎みち)

圓く治まる神の【みち】 世人救はにや【岡崎】の (岡崎よしの)

花も【よしの】の芳ばしく ながめ【吉田】の十曜の【紋】 (吉田紋助)

【助】けよま【森田】まへかし 誠の道も【富太郎】 (森田富太郎)

千【倉】の置戸を負ひながら 世人に心【掛】巻も (倉掛徳義)

畏こき神の御威【徳】 仰ぐもき【義上】の【園】 (上園權太郎)
無限の【權】威並びなく 充ち【太郎】なり【三】ツの魂
寶も【澤】に人清く 親しみ睦ぶ至【治】太【平】 (三澤治平)
國の【中村】おだやかに 進む神【徳】著【治郎】し (中村徳治郎)

(九)

【高】天原は【取】わけて 【太】宮柱たかみ【藏】 (高取太藏)
【齋】ひ奉る【藤みゆき】空 ふるき千年の松ヶ枝に (齋藤みゆき)
【鶴】も巢を組み【治】まれる 國の稜威も【高橋】や (同鶴治)
【榮】え【二】榮えます鏡 福知【田邊】の外がこひ (高橋榮二)
筆の【林】の茂り合ふ 【三】柱【神】の【崎】はひて (田邊林三郎)
國を【保】つ【之助】け船 命の親の千田五百田 (神崎保之助)
【前田】に【滿】つる【稻】の波 【有】りあり見ゆる【働】きの (前

田満稻)

【續】く限りの【眞】心は 黄【金】の色の秋の野邊 (有働續)

心持ち【良】き正【人】の 教に魂を【奥村】の (眞金良人)

誠一つに【晉】むなり 【難波】ン【鐵次】のいやかたき (奥村晉)

日本心は萬代の 【龜】鑑とこそは知られけり (難波鐵次)

遠き【山道太】どりつつ そ【郎】そろ開く神の教 (龜山道太郎)

【藤】の神山を【田】子の浦 【武】藏甲斐より眺むれば (藤田武壽)

【壽】ぎ祝ふ白扇の 末廣々と白雲や

【吉田】の【時】雨【治】まりて 【金】字の【山】姿いと氣【善】し

(吉田時治)

國の譽れもいち【次郎】く 【根占】かなめや【忠】孝の (金山善次郎)

道【明】らけき大本の 教の【園】は天の【原】 (根占忠明)

かきわけ來る神の筆 固く【信次】て疑はず (園原信次)

よしも【蘆】きも【澤】々に 世は【ひさ】方のいつまでも (蘆澤ひさ)

曾【加部】の里に鳴【瀨】る 神を【齋】ける【藤原】氏 (加部瀨^{わたる})

【榮】華の夢は【一】朝に 消えた家系の上田姓 (齋藤榮一)

【沖野】かもめのいと【長】く 行き交ふごとく【造】作なき (神野長

造)

筆の運びの【信司^{しんじ}】つは 神人ならば分【かる】べし (同信司・同かる)

(十)

いかに手【荒井兵】もの【之】 勢ひたけく攻め來とも (荒井兵之助)

神の守に【助】けます 親の心も暖かに

【小川^{こがは}】いがりいたはりて 人の愛にもいや【政】り (小川政男)

國に心を【男木村】の 大御めぐみぞ尊とけれ (木村伴太郎)

教の【伴】の充ち満てる 【太】元神の開きたる

誠の道の【牧】ばしら 【慎】み仕へ【平】けく (牧慎平)

【村】雲拂ふ【上林】 【治】まる御代もいと【長井】 (村上林治)

【吉】事は日【五郎】次々に 大き【小】さきまがつ神 (長井吉五郎)

【原】ひ清むる【竹】箒 【三】つの御魂の現はれて (小原竹三郎)

【高】熊山の神の教 彼【岸】に波も【平】けく (高岸平八)

渡す【八】百重の游【藤田】か【龜】 神のみいづぞ【雄】々しけれ

(藤田龜雄)

【黒】白も分かぬ暗の世の 【田】からとあがめ歡こ【ひて】 (黒田ひ

で)

天津祝詞に曲の靈 かたく【藤岡】世は【澄】ぬ (藤岡澄)

大山【小山】かきわけて 【昇】る朝日の影清く (小山昇)

檜木【杉】生ふ【山】かげに 光も【當】る【一】と筋の (杉山當一)

神の御綱につながれて 道【安】々【藤唯】一人 (安藤唯夫)

日本大丈【夫】進み行く 神の恵も【淺】からず (淺田正英)

上【田正英】九日の 月に照らされ【青木】原 (青木久二)

【久二】も病まず小【杉原】 【たか】熊さして登りゆく (杉原たか)

神の【林二】生ひたてる 諸の木草に時じくの (林二郎)

木の實も澤に【成岡】の その味はひもうるはしく (成岡銀一郎)

【銀】月【一】天すみ切りて 西へ西へと【渡邊】の (渡邊泰次)

珍の姿の【泰】然と 追【次】に山にかくれ行く (同常吉)

【同】じ【常】磐の松の露 【吉】く味はひし【木下】暗 (木下愛隣)

至仁至【愛】の心もて 遠【隣】救ふ神の教

世の【根本】を【保】々と 【夫】れ夫れ御魂にさとし行く (根本保夫)

縦【横山】谷【英二】のぼり 神の【定】めし【金】神の (横山英二)

道【傳】へ行く神【兵】が 【衛】りに勇み【堂】々と (定金傳兵衛)

【前】む【正】しき益良雄が 花も【盛】りの【岩城】に (堂前正盛)

【繁】々通ふ【太郎】次郎 【同】じ身魂の【よし】あしを (岩城繁太)

郎)

さばく審神者の修行場 【小野】が御【田】麻も【安】々と (同よし)

【男】子と女子の跡たづね　【うさ】も忘るる神の道　（小野田安男）

【小野】が御【田】麻の【定】め【藏】と　【田】がひに進む皇神の

（同うさ）

恵みの【淵】に浮びつつ　神の【政】の【男】々しくも　（小野田定藏）

仕へ奉るぞ楽しけれ　（田淵政男）

（十一）

【佐】かえ目出度き神の道　大みたからも【澤】々に　（佐澤廣臣）

【廣】まり茂る瑞穂國　君と【臣】との中きよく

能く治まれる【矢島】國　常世の端に【伊太郎】まで　（矢島伊太郎）

【山】跡と國なる日の【本】の　神の大道に【納】め行く　（山本納吉）

日嗣の君の大前に　【吉】くも仕ふる【山川】の　（山川石太郎）

草木や【石】にい【太郎】まで　固く守らす【岩】の松　（岩淵久男）

【淵】瀨と變る世の中に 天の【久】方雲わけて

【男】神女神の二柱 山の【上原熊】もなく (上原熊藏)

下も【藏】まる西東 青【垣】山をめぐらせる (西垣岩太郎)

下津【岩】根に宮柱 【太】しき建てて浦【安】の (安田武平)

國の【田】からは農と【武】士 世は泰【平】に進みつつ

神の御前にたなつもの 【横山】の如たてまつり (横山辰次郎)

豊の煙も【辰次郎】 【木】の【下】潛る清【泉】も (木下泉三)

神の恵と【三谷口】 【千代】の基【藏肇】めたる (谷口千代藏)

瑞穂の魂のその流れ 長く清けき【吉川】の (同肇)

世界改【良】の神【策】地 【氏】や素性や【家】柄を (吉川良策)

ほこらず只に道の爲 【力雄】つくせ【須】^し【須】^ら 奥^くも (氏家力雄)

田【釜】の原のいや【廣】き 神【之助】けをあななひて (須釜廣之助)

神の司と【成田】身は 【常】磐かきはに世を【衛】る (成田常衛)

【田】すけの神の其【中】に わけて尊き國【竹】の (田中竹次郎)

彦の命の神徳は 外に勝れていち【次郎】し

黄泉津よもつの坂の【坂本】に 【善】と惡とを立別ける (坂本善兵衛)

神【兵】堅く【衛】りつつ 大【神】津つ實みの【崎】みたま (神崎保之助)

浦【保】國【之助】け神 醜の曲津も【在原】の (在原丑太郎)

言向和はす【丑】寅の 神の御息のいや【太】く

清【郎】無垢の【神守】 天津神【國】の日の神の (神守)

その【分】靈幸ひて 忠【義一】途の神司 (國分義一)

【八】島の國は掛【卷】も 畏こき神の御教を (八卷市三郎)

まづ第【市】とたつと【三】て 神を君とに竭す身は

その【名】も【倉】も【清】く【吉】く 【中】津御國【野】醜の名は

(名倉清吉)

必ず【寅次】とこしへに 神の誠の道守れ (中野寅次)

【中】津御國【野】皇神の 【作】り玉ひし言靈の (中野作朗)

圓滿清【朗】淀みなく 言向け【北】る出【口】王仁 (北口新平)

心【新】しく【平】けく 小幡の【川】の水清き (川村喜助)

曾我部の【村】に生れたる 幼名上田の【喜】三郎

神の【助】の命毛いのちげの 筆を揮ひて高熊の

山の因縁あらあらと 頭を搔いて恥をかき

下らぬ歌をかき残す。

靈界物語 第四卷 靈主體從 卯の卷

終り